

# 転職先は正義の魔法少女の悪側面【完結】

畑渚

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

クソ上司に電話越しに辞表叩きつけてキャリア人生をキルしたと思ったらバケモノに人生キルされた元社畜が、正義の魔法少女の悪側面として生き返り、ついでにいろいろと救っちゃう話の予定。

ぶっちゃけFaOeに影響受けてると思われる、そんな話。  
タグやジャンルはまだ迷い中。

小説家になろうでも同時投稿中。

## 目次

そして俺は転職した	1
そして私は分裂した	5
欲にまみれろ	9
変身つてもつとこうなんかあつただろ	13
表裏と正義	18
そのカタチ	22
私の日常は変化する	26
ちよちよいと	30
眠るときはね、こうなんというか救われてなきやダメなんだ	34
私のおひる	38
大人気	42
夢オチつてさいてー、夢オチならね	46
そんなところ	50
魔法少女は墮とすもの	55
幕間	60
魔法少女マシマシ	63
表と裏	67
戦闘中	71
さんじゆうろっけい	75
まずはお茶でも一杯	79
そんなことより	83
これでいいのさ	88
俺の朝	93
私の夜	96

最近頑張りすぎてね？	99
これが罪の味……	102
唐揚げ食べたい	106
世界観の不一致	110
たぶん世界は俺の左腕に恨みがある	114
深夜のラーメンは罪だよ	119
長話はコーヒーの後に	124
新たな気配	128
帰宅	132
鼓動	136
だが断る	140
それはずるって	144
神に一つ	148
覚醒	154
おやすみ	158
エピソード	163

## そして俺は転職した

ああクソ、あのクソ上司、絶対に許さねえ

ふつつつと湧いてくる怒りを道端の石ころにぶつけながら、俺は街灯のみが照らすオフィス街を駅に向かって歩く。

なんだかすべてにイライラしてきた。なんでこうクソみたいに駅が遠いんだうちの職場は。しかもなんだ、なんでおれはこんなクソみたいな時間まで残らされたんだ。要領が悪いわけじゃないだろうに。

それもこれも、全部クソ上司のせいだ、絶対に許さん。

石ころを大きく蹴り上げたところで、スマホが鳴る。

「ああもう、こんな時間に誰だよ」

スマホの画面を見て、青ざめる。

「おい、うそだ、嘘だと言ってくれ」

着信の相手ではない。着信画面のせいで上の方に追いやられた時間の方だ。

「終電……のがしたじゃねえか!」

地面に膝をつきながら、俺はこんな深夜に電話なんぞをかけてきよったクソ上司に悪態をついてやると着信をとる。

『いやあ、君、ちゃんと退勤したかと思ってねえ』

「ええ、おかげさまで退勤して終電のがしたところですよ」

『いやあ良かったよかった。君、困るよ。最近は制度も厳しくなってるさいんだから』

「……せえ」

『ん?なんだね?』

「うるせえのはどっちだオラァ!アアン?なんで俺が残業してると思ってたんだクソ野郎!俺は仕事しねえどこぞのクソ上司の尻ぬぐいしてやってんだよ!」

『ちよつと君、お、落ち着きたまえ』

「落ち着いてられっか!もう辞めてやるこんな仕事!月曜からは自分で仕事すること覚えるんだな!じゃあな!」

それだけ言い捨てるどブチつと電話を切る。ついでに俺のキャリア

ア人生もキルつと。ははっ、笑えねえ。

「いいし、俺にはニチアサがあるし」

先週は休日返上だったため録画した分が残ってる。タクシーでも捕まえてさっさと家に帰ろうそうしよう。こういう日はビールでも流し込みながらアニメ鑑賞するに限る。

【ああ、ちょうど良かった】

人ならざる声が聞こえたのは、その時だった。

次の瞬間、俺の胸のあたりは火傷したかのように熱くなり、次第に真冬のような寒さが襲ってきた。何が何だか分からないうちに、気がつけば俺は自分の臓物を食い散らかしているバケモノと目があつて、そのあとすぐに視界が真っ暗になった。

いや、嘘だろ。これこそ嘘だろ。夢だと言ってくれそうじゃないと困る。せめて死ぬにしてもこういう感じの理由がほしかった。ていうかあと三週間くらいでニチアサに追ってたアニメも終わるんだしせめてそのくらいは生かしてくれてもいいんじゃないか？

【生きたい？】

こんどはさっきのバケモノとは似て非なる声が頭に響いてくる。

鬼なのか蛇なのか知らないが、生きたいかなんて問いかけてくるのは神みたいなサムシングだと相場が決まっている。

【酷いなあ。僕は真正銘の神の使いさ】

なるほど、つまりは邪神の使いか。俺そんな悪いことしたっけなあ。

【少なくとも、今の僕は君に助けを求める立場さ。そこだけは信用してほしいな】

ふむ。この自称神の使いはどうやら話せるやつらしい。それで、生きたいってどういう意味なんだ？

【話を進めさせてくれて助かるよ。いやあ実は、魂が一人分欲しくてね】

やはり死神の類이었다らしい。くわばらくわばら。

【だから違うと言っているだろう！とりあえず、僕の下で働いてほし

「いんだ。その魂でね」

あゝ。その言い方だと、俺は単純に生き返れるわけではない？

【そうだね。体のほうはこちらが用意した器に入ってもらおうことになるよ】

こういうのはブラック企業より真つ黒案件だつておいどんは某創作サイトにて読んでごわす。

【そうだね。言うならば……3食昼寝付き、現金支給、ただ人間関係はイチから、つてところかな】

やります。

【そうだよね。これだけじゃ足りないだろうから僕からも少しお金を……。えっ？】

やります。尊敬する上司様。あなたの下で働かせて欲しい所存です。

【えっ、ええ……？まあ良い返事がもらえて嬉しい限りではあるんだけど……。人選間違えたかな……】

このとおりにやる気なら十分あります。残業も週に5日いけます。

【……君、何をそこまで……】

実は……私三度の飯より昼寝が好きです。ああ恥ずかしいなあ。だからしないとかわれないか我心配ゆえ言い出せなかつたでござる。

【不安になつてきたけど……まあ大丈夫だろう。それじゃあ採用だなにかに引つ張られていく感覚がする。

【目が覚めたら改めて僕の担当から説明させるよ】

いやあ、俺つてば最高にラッキーだな。仕事を投げ捨てた瞬間に次の就職先が決まるなんて。善行を無意識のうちに積んでたのかもしれねえ。まじで俺つてば最高だぜ。

「なんて思つてた俺がバカだったみたいだな」

「ああ！お願いですから足閉じてください。見えちゃいけないもの見えちゃってます！」

「おお、スマンスマン」

俺は目の前の少女に言われたとおりに足を閉じる。しかし、こう安

心感がない。スースーして落ち着かないなあスカートは。

「しっかし……まあ不思議なこともあるもんだなあ」

俺はクローゼットに備え付けの姿見で自分の姿を確認する。

そこには、目の前の少女の2Pカラーかとても言うくらいに瓜二つな姿の美少女が、困惑した顔を浮かべながらポリポリと頬をかいている姿が写っていた。



そして私は分裂した

「そう、私は正義の味方！」

そんなわけがない。そもそも正義ってなんだ。

「悪は絶対に許さないんだから！」

許さないとは自分は何様のつもりだ。

「怪人さんも、もう悪さはしちやだめだよ？」

岩をも容易く割ってしまふ拳をつきつけられたら誰だって首を縦に振る。

もうすべてが限界だった。そもそも中学生である私に、日本の平和を守るだなんて責はおもすぎるのだ。

【大丈夫かい？】

「うん……。だって私が倒れるわけにはいかないだもん」

私は選ばれた。選ばれてしまったというべきかもしれない。私の代わりはいない。私がやるしかないのだ。

「間に合わなくて……。ごめんなさい」

まだお兄さんと呼べるくらいの青年の死体に、私は手を合わせる。腹を開かれ臓物を食られた死体には、もう慣れた。けれど、私の良心は痛むばかりだ。最近はその痛みすらも鈍くなってきたが。

【限界……。かな】

「そんなことないよ」

あははと笑ってみせるけれど、それでこの自称神の使いさんを欺けるわけがない。私は後片付けを神の使いさんに任せて、帰路につく。汗だかなんだかわからないような液体で肌がべとべとだ。

「先に帰ってシャワーを浴びてるから」

【ああ、待って】

そういつて神の使いさんは私にペンダントを渡す。中には何かがある。うごめいていた。

【今日はそれを付けて寝て。理由は……。明日の朝に彼と共に話すから】

彼？とは思いましたが、深夜ということもあって眠気が襲ってきた私は、そうそうに家へと帰るために空を飛ぶのであった。

倒れ込むように風呂上がりそのままベッドに飛び込んだ私は、ふとペダンントから「やります」と聞こえたような気がした。しかし疲れ切っていた私の意識は、それを確かめる間も与えずに眠りの世界へと誘われたのだった。

||\*||\*||\*||\*||

「それで、いったいどういうことなんですか」

「俺にもさっぱり」

目の前の私は、まるで男の子のようにガシガシと頭をかきながらそう答えた。あぐらをかいていて私のとまったく同じパンツが丸見えである。

「ああ！お願いですから足閉じてください。見えちゃいけないもの見えちゃってますー！」

「おお、スマンスマン」

目の前の私は言われたとおりに足を閉じる。しかし、こう安心感がない。なんでこんなことになったのだろうか。

「しっかし……まあ不思議なこともあるもんだなあ」

「不思議って言葉で片付けちゃっていいんですかね」

「自称とはいえ神の使いらしいから、こんなこともできるのかもな」

頬を引っぱっている目の前の私は、私と瓜二つだ。髪の色や肌の色の差が少しちがうくらいで、同一人物といっても8割がたの人は気が付かないであろうほどだ。

「まあなんか？やつ曰く君が溜め込んだ鬱憤みたいなのが俺らしいけどそれっておかしな話だよな」

「そうですね。なぜその器にわざわざあなたという魂を入れたのかわからない」

「反転した性格でもしてんのかねえ俺と君は」

「……わかりません」

彼との距離感がつかめない。話を聞く限り彼は神の使いさんが私のために作ってくれた存在らしいのだけれど、私の面影が容姿くらいで他は何にも共通点はない。

「まあよくわかんないけどよろしく頼むよ」

「えっ……もしかして一緒に住むんですか」

ピタリと彼は動きを止める。そして指を一本立てながら私の方へと振り向いた。

「ここで問題です。気がついたら君の隣で寝ていた俺の家はどこでしょう」

「もともと住んでた家があるじゃないですか」

「うーん、そういうわけにもいかんだろう」

そう言つて彼はスマホをどこからともなく取り出す。一瞬私のかと驚いたが、同機種の色違いのようでホッと一息ついた。

「ほら、な?」

大手検索エンジンのニュース欄。そこには、深夜のトラックの交通事故の記事だ。そこでは、犠牲者に男性の名前が刻まれている。言わずもがな、昨日の青年であり、そして目の前の私の中にいるらしき彼の名前だろう。

「ははっ、見ろよ。責任10:0でトラックの運転手は捕まったんだよ」

笑う彼はどこか嬉しそうである。自分が死んだ事件の何が面白いのだろうか。私には理解できない。

「人が死んだという記事の何が面白いのですか?」

「笑うだろそりゃ。だって俺はまだここにいます。ここで生きてる。トラックの運転手も……恐らくは架空の人物だ。それなのにニュースサイトに出てくるのが面白い以外のなんだって言うんだ」

言われてみればそうかもしれない。しかし、何か腑に落ちない。

「やっぱりあなたとは分かり合えなさそうです」

「いいさ、俺みたいな人間を中学生が理解しちやいけない」

「それは——」

「なあ、腹減ったんだが何かあるか?」

これ以上は話したくないと言外に滲んでいる気がした。

「そうですね。とりあえず朝ごはんにしますか」

ちようど私もお腹が空いてきた。こういうところだけは似てるんだなと思いつつ、私はパジャマから部屋着に着替えることにした。

「あのな、一応これでも元男なんだぜ？警戒しろよな」

「……すみません」

前言撤回。彼に退室してもらってから着替えを始めた。

欲にまみれる

着替えを終了した彼女は、まっすぐにキッチンへといって手慣れた手付きで準備をしたかと思えば、火も包丁もなにも使わずに食卓へとついた。

「待て」

「なにか？」

俺は食パンをくわえる彼女の姿を見て頭を抱える。おいおい、まじかよ。嘘だと言ってくれ。

「なんだそれは」

「えつと……食パンと卵と牛乳ですけど」

「普通そこまでしたら、こう、料理の一つや二つしてみようなんて思わないか？」

「そ、そうなんですか？」

彼女はあろうことか、食パンを生で啜え、コップに卵を入れ、牛乳の小さいパックを注ぎ口をあけて豪快にラップ飲みしている。中学生女子にあるまじき行為であると思うのは俺の勘違いではないはずだ。というかそもそも生卵を飲むとか変なアスリートかなにかかよ！

「ああもう、キッチン借りるぞー！」

俺は我慢ならず食パンのあまりと卵を取り出して、牛乳をボウルに入れる。卵と牛乳を混ぜ合わせて作るのは卵液。つまりは即席フレンチトーストもどきである。

「食事なんて栄養がとればいいのに」

「馬鹿やろうー！」

思わずどなってしまふ。食事とは人生の大事なパーツだ。食事を疎かにするなんてありえない、少なくとも俺の中ではだ。

「いいから食え！食事は楽しむもんだぞー！」

「……」

大声を出したからか、彼女はまるで怯える子猫のように目を丸めて微動だにしない。しまったやりすぎたとは思ったがときすでに遅し。

「ばか……泣くなよ」

「な、泣いてなんかありません」

ゴシゴシと目元をこする彼女を見ないように背中を向けながら、フレンチトーストもどきの火加減を見る。卵に火が入り香ばしい匂いがしてきたころ、俺は戸棚を確認する。

「……皿は？」

「いつもはフライパンから直接」

「おいおい、嘘だろ」

「……？」

彼女はまるで俺が声を荒げる意味がわからないというように首をかしげている。食事が楽しくないなら何が楽しくて生きているんだ？ 三大欲求の一つだぞ？

「わかった。とりあえず今日はこれで我慢してくれ」

「我慢もなにも……」

「いいから」

「は、はい……」

彼女はおどおどしながらフォークを持って、フライパンに乗ったままのフレンチトーストもどきを口に含む。しばらくもぐもぐと咀嚼したあと、息をつくまもなく次のフレンチトーストにフォークを伸ばしている。どうやら気に入ってくれたようだ。まったく、お前は拾ってきたばかりの子猫か何かか？

「まったく、くたびれたOLじゃないんだからそんな無欲な生活なんてやめてしまえ」

「べつに欲がないわけじゃないです」

「じゃあもつと解放するんだな。擦り切れちまうぞ」

「私は大丈夫です」

「大丈夫なら俺は生まれてないだろ」

「それは……そうですね」

悩む時期ってやつなのか。まあ女子中学生って年頃はいろいろと多感な時期で大変なんだろう。あまり責め立てないでやるか。

だがしかし、この食生活はいただけくない。

「ふふふ、晩は楽しみにしているといい」

「えっ……今日もコンビニで買って済ませようと思ったんですけど」

「はっ？ゆるさないが？絶対に阻止するが？」

ドンと音を立てながら机を叩く。

「おいおい、有り金全部だしてみな」

「恐喝ですか」

「似たようなもんだ。俺の目の黒いうちはコンビニ弁当なんて許さねえからな」

「でもだからってお金を」

「いろいろ入用になるだろうが。ついでにいろいろと買ってきてやるからおとなしく金をよこせ」

「……それならいいんですけど」

疑うようにジト目で睨みつけながらも、彼女は俺に銀行の通帳を手渡す。聞き分けの良いガキは好きだよ。

「鍵はそこに置いておきますが、……お願いだから変なことしないでくださいよっ」

「わかってるわかってる。全部俺に任せておけ」

「それじゃあ……行ってきます」

「はいはい、いってらっしゃい」

適当に彼女を学校に送り出した俺はニヤリと笑う。これからは俺の時間だ。

とりあえず俺の分の日用品や食事関連は買い揃えよう。せっかく俺は暇なのだし、これからは何でもできる。ああ、そうなるとパソコンが欲しいな。予算にもよるけれどゲームが動くくらいのが欲しい。あとは……

ふと、ペラリと通帳をめくる。

「おいおいおい、まじかよまじかよ」

そこに刻まれていた額は、中学生の年頃の娘が持つには過剰すぎるほど大きかった。いや、これは中学生だなんて年齢は関係ない。個人で持つには明らかに異常な程の額がそこには収められていた。

「家でも建てたいのか？とてつもなく禁欲家だとか？」

そんなバカなことを考えながら、俺は服を着替える。ラインの出ないズボンに無地のTシャツ、そして何故かクローゼットの中に押し込められていた男物のキャップ。服のサイズはさすが瓜二つな体なだけあってピッタリである。そして帽子。これがあるおかげで、俺はかわいらしい顔を隠して性別その他もろもろをごまかすことができる。見たこともない帽子の持ち主と、それを大事に保管していた彼女に感謝である。

「そんなことでもいい。どうせ彼女が金庫の肥やしにしてた金なんだ。ばんばん使つてやろうじゃないか」

ああ夢が膨らむ。まるで「宝くじがあたったら」なんて空想が現実になったかのようだ。



変身つてもつとこうなんかあっただろ

「あーどれもこれも目移りしちゃうわ〜」

「随分と楽しそうだね」

「そりやもちろん。買い物で散財する瞬間って気持ちよくなえか？」

「まあ、そこは僕としてはどうでもいいんだけどね？」

どこにでもいそうな印象の薄い青年は苦笑する。

「どうして僕まで連れ出されているんだい？」

「そりや、荷物持ちだろ」

人間形態となった自称神の使いさんを連れて、俺はホームセンターへと来ていた。

||\*||\*||\*||\*||

「僕についてきて欲しい？」

犬のデフォルメされたぬいぐるみのような姿でふよふよ浮かぶソイツを捕まえたのは、今の俺の姿じゃ色々面倒なことがあるからだ。

「僕は神の使いだよ？君の指示を聞くわけがないだろう」

すまし顔でそういうやつに、俺は3本の指を突きつける。

「なんだい？その指は」

「3つだ」

「3つ？」

「お菓子、3つ買うことを許そう」

「ふむ、この僕に交渉ごとか」

ニタリと不気味な笑みを浮かべる。浮かべてはいるが今の姿がぬいぐるみだから怖くない。むしろ可愛い。

「僕は神の使いだよ？たかがお菓子3つくらいで——」

「値段制限なし」

「さあ、早く行こう。お菓子が売り切れてしまうよ」

随分と現金な神の使いもいたもんだ。

こうして俺と自称神の使いの人間形態さんは、まるで仲の良い兄妹のように振る舞いながら買い物に来たのであった。

「ねえ、君」

「なんだよ、何か文句でもあんのか？」

「いつまでそうしているつもりだい？」

「……さあな。もしかしたらもう2度と、元には戻れねえかもしれない」

「馬鹿なことを言わないでくれ。僕の魔法少女はどうするんだ」

「まあそうかつかせずに、まずは座れよ。ダメになるぞ」

「たかがクッションごときで何を言っているんだ。それより限定販売のお菓子が売り切れたらどうするんだい？」

俺はすくつと立ち上がり、うるさい奴をクッションに押し倒す。

「所詮は人族。この程度の心地よさでダメになるだなんて弱い！」

包み込まれるような柔らかかさの中に確かな硬さを備えたそれは、神の使いをすつぽりとおおいこむ。

「くくく、くはははー！」

「な、何がおかしい」

「顔、蕩けきつてるぜ。自称神の使いさんよおー！」

「ば、バカな。僕は神の使いだぞ！」

「口は回るようだが、体は正直だなあ」

「くつ……」

この寸劇はショップ店員から憐れみの目で見られるまで続いた。

そんなこんなを乗り越えながら、俺たちは必要なものだったりそこまで必要ないかもしれないけど俺が欲しいものだったりカートに乗せながら、ホームセンターを巡り巡った。

いや、買いすぎたな。これじゃあ神の使いが3人いても厳しいレベルだ。

「い、いらっしやいませ〜」

やたら額に汗を浮かべた女性店員のレジに行くと、震える手でバーコードを通していく。

なにかおかしい様子だったのでじつと目を見ると、目があった女性店員は取り繕うように営業スマイルを浮かべた。

嫌な予感というのだろうか。背筋にゾクリと走る感覚が、俺の足を動かした。

「ケタ、ケタ、ケタケタケタケタケタケタ」

営業スマイルを浮かべた頭がずるりと落ちる。

「なあ神の使いさんや」

「ああ、そうだね」

俺たちは2人揃ってゴクリと唾を飲み込む。

「俺、今日風呂一人で入れなきそう」

「そう、これは君を襲ったバケモノと……えっ？」

「ホラーとかお化け屋敷とか大の苦手なんだよ俺」

「待って？君もしかして」

「ああ、少し出た」

「ちがうそうじゃなーい！」

自称神の使いは俺を突き飛ばす。さつきまで俺がいたところは、頭の取れた胴体から伸びてきた触手のようなもので粉々に破壊された。

「そうだったまだ聞いてなかった！なんなんだよいったいこのバケモノは！」

抜けかけた腰にしっかりと力を入れて、次撃はなんとか自分の力で避ける。

「そうだね、説明しよう」

「ばっかそんな暇あるか！3行で言え！」

「・表世界に出てこない裏の世界の住人

・表世界の人間好物、ニンゲンクウ

・たまに波長ずれて裏世界に行ってしまう人間がいる」

「簡潔でありがたいこつたあ！」

てかやばい死ぬ死ぬ。こちとら元一般男性の現TS美少女やぞ。

バケモノ相手に戦えるはずが……

……いや待て。俺が魔法少女と瓜二つということは、つまり変身できたりなんたりできるのでは？

「うおお！やってやらあ！」

「急にどうしたんだい！頭でも打ったのかい」

「知るかー！うおー！」

なんか叫んだらいける気がしてきた。

「へん……しん！」

そう叫ぶと、急に足元に魔法陣が生成される。次第に強くなる光に目を細めれば、体を覆っていくナニカを感じる。

光が収まりようやく目を開ければ、ガラスに反射したそこには痴女がいた。

「……、お前らの神って変態？」

「そんなわけないだろう！変身は自らの理想の姿になる魔法さ！つまりはそのニチアサで敵の女幹部キャラで出てきそうな姿こそが君の理想ということさ！」

「馬鹿やろう！こんな姿でニチアサに出られるか！」

いや、そういうえばそんなのいた気もするけれど現実的に考えればやべえ格好だったんだなあれ。まあそれはともかく。

「これで対等に渡り合えるわけだ」

ふふ、拳が鳴るぜ。前世の上司への恨みとともにぶち飛ばしてやる。

「喰らえ！必殺パンチ！」

叫びながら助走をつけ、できるだけ高く飛び上がる。放物線の頂点に達し体重分を上乗せして拳を繰り出す。

「漏らした恨み!!」

ペチン

「そしてこれは濡れたパンツの分!!」

ペチン

「そしてこれは上司の……」

振りかぶった拳を俺はスツと下げる。

「あのさ」

「なんだい？」

「もしかして俺って変身しただけか？」

「これは僕の推論だけどね？」

自称神の使いはいつのまにかかかっていたメガネの位置をなおす。きらりと光を反射するレンズがうざい。

「僕の魔法少女は裏世界の住人に特効のある力を持っている。そして君はその反転だ。つまりは君は表世界の住人に特効のある力を持っているのではないかな？」

「長い。簡潔に」

「君、裏世界ではただの中学生女子くらいの力しかないよ」

「最高だな」

触手がずるりと腰のあたりに巻きついてくる。服という防備のないお腹は、そのヌメヌメしたようなそれでいて毛虫のようなイヤな感覚がダイレクトに伝わってくる。

「おいおい、死んだわ俺」

「何を言ってるんだい？」

自称神の使いは余裕そうに笑ってやがる。後で表世界に帰ったら拳の実験台にしてやると心から誓う。

「僕の魔法少女は、正義のヒーローだよ」

突如上から、とてつもないスピードで何かが落ちてくる。家具か？

照明か？はたまた天井か？否、どれも違う。

正義の魔法少女だ。

## 表裏と正義

俺の目の前に現れた彼女は、フルオーケストラがバックで流れてうなほど綺麗なヒーロー着地をキメた。膝に悪いからやめるように後で助言しておこう。

「待たせてごめん！正義の魔法少女ジュスティヌ、悪い奴らは許さない！」

ふりふりのスカートををはためかせながら、決めポーズをして彼女は叫ぶ。

「ジュスティヌ！彼はヌメヌメしてるから気をつけて！」

「任せて神の使いさん！」

今朝の丁寧な口調とはうってかわって、彼女は自信いっぱい笑みを浮かべながらファイティングポーズをとる。それに応えるように、触手は俺をぺっとはじき出して戦闘態勢に入った。

いや、俺が掴まれた意味よ。粘液みたいなのも触られた感触ものこつて最悪だ。しかも頭もぶつけてたんこぶができてる。許せねえ。

「お兄さんは下がっててください！」

「言われなくてもそうするよ」

まったくただの買い物にきただけなのに最悪な気分だ。年下の女の子にへこへこしながら距離をとる。あーもうヌメヌメがとれねえ。早く帰ってシャワーが浴びたい。

「なあ神の使いさんや」

「なんだい？」

「裏世界で起きたことって現実ではどうなるんだ？」

「ふむ、余裕もできたことだし説明しておこうか」

俺たちは少女とバケモノの戦闘音をBGMにしなが、ホームセンターの展示のソファに腰掛ける。あ、座り心地いいな、これも買おう。なんなら俺のベッドとして内定をあげても良いくらいだ。

「裏世界は表と似て非なる世界。一枚のコインというのがわかりやすいたとえかな」

「じゃあ、裏世界でこんなことをしたらどうなるんだ？」

俺は財布に入ってたレシートをちぎり捨てる。

「それはどうさ？」

天使の使い野郎の手元が歪む。そこには、ちぎったはずのレシートが映っている。

「干渉しない？」

「まあだいたいそんなところさ。でも2つの世界の歪みが大きすぎると……世界が修正しようとして力を働かせる」

「大きすぎるってどんくらいだ？」

ドゴンと大きな音をたてて壁が崩れる。みれば魔法少女がべとべとになりながらも、触手を投げ飛ばしたあとだった。

「あのくらいは大丈夫だよ。ただ建物全体が崩れるくらいだとダメだね」

「へえ、都合がいいようにできてんだな」

「そりゃ僕は神の使いだからね。神なんてご都合主義の塊のもとでそれくらいの保証はされているさ」

「まあそれもそうか」

しかし神か。行事ごとのみのエンジョイ勢だった俺にはよくわからないが、まあ魂のうんぬんカンヌンができるってんだから実在するのだろう。

せめてこう、もっといい感じにして欲しかったけれど。主に変身周りとか変身のあたりとかそこらへんを。

「しっかし……ほんとに強いな」

「今回は彼女も苦戦しているほうだよ」

「へえ、あれでか？」

先程からほぼ一方的にぶん殴ってるようにしか見えない。正義の魔法少女と聞いたときはニチアサの時間帯にありそうなアレを思い浮かべていたが、今は彼女が国旗の印刷されたマントを羽織っていてもおかしくないように見える。ていうか魔法要素はどこにいった。

「人間ってのは理解の範疇を超えたことを『魔法』って言葉で片付けてきたんだよ」

「人の思考をさも当然のように読むな。ていうかもっとこう、手からビームでたりなんだからあつただろ」

「僕も魔法少女をこのカタチに作った神様の思考はわからないんだ」  
ファンシーな戦闘を期待していたのに、いざ現実を見れば拳で敵を黙らせるだけ。がっかりしてしまった俺はどこがおかしいだろうか。  
「……っ!?!危ない!」

突然神の使い野郎が叫ぶと、魔法少女が大きく横に飛ぶ。空振った敵の触手は、床にあたった部分を粉々にした。

「おいおい、大丈夫なのかよ!」

「おかしい……。やはり手遅れだったかな」

「手遅れって何が」

「彼女のことさ。魔法力がここ最近下がってきていてね。君の存在のおかげで回復は早まるはずだったんだが、時間が足りなかったみたいだ」

「俺の存在が?」

「コインの表と裏のように人間にも表と裏があるだろうか?」

神の使い野郎はどこからともなくコインを取り出し、手の上でくるくると回す。手先器用っすね自慢すか?おっ?

「君は彼女の裏の部分を抽出、具現化させた器なのさ。つまり今彼女に残っているのは——」

「表の部分のみってことか」

「そう。正義の心こそが彼女の魔法力の源だからね。純粹であればあるほど、力も強くなるという寸法さ」

「でも元は1人の人間だったのにそれを分けちまって壊れないものなのか?」

「一般人ならそうだろうね」

「それじゃあ——」

「違うさ」

神の使い野郎の姿が変わっていく。最初に見たときのように、ぬいぐるみみたいな現実味のない姿だ。

【彼女は一般人とは違う。だから選ばれたのさ】



「ふーん」

俺にはただの一生懸命な少女のようにしか見えないがな。

【人間に頼ることになるのは僕らだって想定外だったんだよ】

「そりやどういう意味だ？」

【それは……っと、どうやら決着がつくようだよ】

目を向けてみれば、完全にがら空きになったボディに魔法少女の拳が突き刺さっているところだった。完全に沈黙しているが、しかし魔法少女は念を入れるためか拳を振りかぶっている。

「おいおい、ありや敵が死んじまうぞー！」

【ん？】

何を言っているんだという顔をしている神の使い野郎をおいて、俺は魔法少女に駆け寄る。

「待てー！」

「お兄さん？下がっていきってくださいって言いましたよね」

「なあもういいだろ。こいつはもう動けねえ」

「敵ですよ？」

「敵だからって殺していいわけじゃないだろ」

魔法少女はパチパチとまばたきを二度三度繰り返した。

「何を言っているんですか。敵を完膚なきまでに倒し尽くするのが正義の魔法少女でしょう？」

そういつて首をかしげる少女の目には淀みは一切なく、まるで水源のすぐ近くの水のように透き通った純粹な光だけが宿っていた。

## そのカタチ

なるほどこれが正義か

最初に考えついたのはそんなことだった。

なんですんなりと飲み込めたか、それは簡単だ。

俺だったら絶対にそうは思わないし、そう信じて行動することもない。そんな俺が悪側面だというなら、この正義のカタチにも納得がいくというものだ。

【急にどうしたんだい！】

「神の使いさん、お兄さんが急に割って入ってきて」

【もう、邪魔はしないでくれよ】

「これが……」

問おうとして、しかし何も疑問に感じていない二人の表情を見てやめる。諦めた。ここで二人を説き伏せようだなんて、俺の性に合わない。

【とりあえず止めを頼むよ、ジャステイヌ】

「はい、わかりました」

魔法少女は、まるでスキップでもしてるように軽やかに、立ちふさがった俺の横を通りすぎていく。

「今度は良い子に生まれてくるんだよ！」

返事の声があがるよりも先に、鈍い破裂音が室内に響く。見たら吐いてしまいそうだから、視界に入らないようにする。

「あの……大丈夫ですか？」

「ああ、俺は大丈夫だよ」

突然集まってきた光の塊からできたタオルをうけとって、ヌメヌメした粘液をぬぐう。まったく汚れ損だったな今回は。

「しっかし、これ本当に大丈夫なのか？」

「ええ、神の使いさんが全部後片付けしてくれますから。私たちはもう帰っておきましょう」

「帰るってどこに？」

「表の世界にですよ」

魔法少女ちゃんが光に包まれたかと思うと、次の瞬間にはただの女子中学生に戻っていた。いや、変身解除してどうするんだそーいや。解除したい解除したい。

つと、俺にも光がまとわりついてくる。うまくいったか……？

「あつお兄さんダメっ！」

「へっ？」

彼女の警告は一足遅かった。光が霧散したあとには、一糸まとわぬすっぽんぽんとなった少女の姿した中身おっさんがホームセンターに立っているという悲惨な事件がおきていた。幸いまだ裏世界だから見られてないはず。そうであってくれないと二度目の死を迎えてしまいそうだからそうであってくれ。

「ちゃんと服を生成しないとそうなっちゃうんです」

「ごめんごめん。そこまでは都合よくできてないのね」

「あの、早く服着てください」

「えっ？」

「あなたの裸は私とほぼ同じなんですよ！早く服を魔法で作ってくださいよー！」

「ま……ほう……？いや、使い方を知らないが」

「……、そうでした。はい、どうぞ」

さっきのタオルと同じようにどこからともなく現れた服は、そりや彼女と同じ寸法なのだからそうなのだが、ピッタリのサイズだった。しっかり色気に欠けるな。中学生ならもう少し着飾り始めてもいいだろうに。

せつかく女の体になったんだし、今後は服なんかも考えてみるか。えっパンツとかブラ？一日で慣れたわ。

「何か変なことを考えてます？」

「ううん……素材は良いと思うんだけどな」

「えっ何です？」

「いや、なんでもないよ。それよりどうやって表の世界に戻るんだ？」

「魔法ですよ」

「いやだから、使い方を知らんのだが」

「はあ……今回だけですよ?」

そう言うのと少女は俺に抱きついてくる。顔なんてほぼくつついて  
いるも同然だ。なんだずいぶんと大胆じゃないか。

「違いますよ?ただ密着しておかないと失敗したときに悲惨なことに  
なるので」

「ちなみにだけどうなるんだ?」

「表と裏の世界に半身ずつ分かれます、物理的に」  
「ヒエ」

そりゃ困るぜ。お願いだから失敗しないでくれよ。

「あの、そんな強く抱きつかなくても大丈夫ですからその、痛いです」

「ああごめんごめん。んで、魔法だっけか」

「といっても簡単ですよ」

一瞬、重力が逆転したかのような浮遊感を感じる。そして無意識に  
まばたきをした後、もうすでにそこは壁も床もきれいなままの店内  
だった。

「すごいな。これ周りの人にはどう見えるんだ?」

「元からそうであったかのように記憶が改ざんされてます。都合がい  
いように、違和感を感じないようにです」

「うわあそこは便利い」

「便利じゃありませんよ。魔法で実現させるわけですから」

「それも魔法なのね。さすが魔法だぜ」

果たして俺が魔法を使うときはくるのだろうか。できればそんな  
面倒そうな技を習得しなくても済むような人生を送りたいのだが  
……まあ無理だろうな。さっきのバケモノも、明らかに俺を意識して  
狙いにきていた。

「というか学校は大丈夫なのか?」

「はい。もとから保健室登校なので」

「それは大丈夫と言うのか……」

「ちゃんと自分で勉強してますし、テストでちゃんと結果を出して  
れば問題ないですよ」

「へえ、そんなもんなんだな」

何も考えずに授業に寝に行つてた俺にはわからない世界だ。

「でも流石に学校にはいなきやいけないんで戻りますね。お兄さんは……まだ買い物があるようですよし」

「まあな。帰りを楽しみにしておくよ。口座から減つた額に驚かないでくれよ?」

「どうせ自分じゃ使わないからいいですよ、使い切つても」

その言葉に嘘偽りが含まれてるようには感じなかった。それではと出口へと歩いていく彼女を見送りながら考える。もしかしなくても、欲求関連が全部俺に偏つてるのか? 物欲も金銭欲もないような言い方だった。

しかしそうか、『正義』で『表』であるはずの彼女がそうなら、俺のやるべきことは決まつてる。

俺は、彼女の無意識に抱えて抑え込んできた欲つてもんを全部解放させてやる。神の使いの思惑なんて知つたものか。俺は、俺の思うように、この人生を生きてやる。

## 私の日常は変化する

「あら、桃木さん。トイレ長かったけど大丈夫？」

「はい、先生」

私は養護教諭にそう返してから、行く前と同様に机に座り、参考書を広げる。保健室は教室と違ってエアコンがはいつており、心地よい空気が流れている。私が借りている机はメンタルケアにも使われるところなので、雑音も少なくて良い。

「頑張るのね。でも無茶はしちやダメよ？」

「ありがとうございます。でも今日は調子が良いので」

いつもより集中力がある気がする。それに、バケモノと戦ったあとだというのに疲労感もそこまでない。

「……、教室に通う気はまだない？」

「……」

「いや、忘れて。それより定期試験が近いんだったわね。私今から職員室に行くけれどなにか聞いてきた方が良いことはある？」

「ありがとうございます先生。でも大丈夫です。テスト範囲もわかってますし」

「真面目でなによりね。それじゃあ、もし誰か来たら言伝をお願いね」  
養護教諭はそう言うと、何やら書類を複数まとめてから保健室から出ていった。これが私の日常だ。一日の大半を保健室で過ごし、たまにトイレに行くフリをしてバケモノを倒す。両親が遠い外国に、私を日本に残したまま行ってしまったという特殊な事情が、こんな状況が長々と続くことを許していた。

「……、勉強進めない」と

あるのはテストで点をとっておこうという打算と、暇な時間をどうにか過ごすための模索だ。じゃなければわざわざ嫌いな科目の勉強までしない。まあ好きな科目っていうのもないけれど。

鐘がなり下校の時間になる。基本的に部活に入らなければいけないうちの学校は、放課後から余計に騒がしくなる。

「あら、もう帰るのね。気をつけてね」

「先生、さようなら」

「はい、さようなら」

養護教諭に挨拶してから、帰路につく。そこまで家は学校から離れてないので、歩きでいつも通っている。

鍵を差し込むと、いつもとは違い鍵がスツと回る。今朝鍵をかけたかと思っただけで、そういえばお兄さんがいたと思い出して玄関をくぐる。

「あっおかえり」

「……？」

どうやら目が疲れているらしい。バケモノとも戦ったあとだし、気が付かないうちに幻覚を見てしまうほどに疲労が溜まっていたようである。

「ご飯にする？お風呂にする？それとも……なんてな。おかえり」

「あつえつと……お兄さん？」

「ん、なんだ？」

「あの、その服とエプロンは？」

「ああ、これか？」

お兄さんはくるくると全体をこちらに見せつけてくる。短パンと無地のパーカー、その上から可愛らしくもおとなしいエプロンをしている少女がそこにはいた。

「その服、どこで？」

「そりゃ魔法でな、とは言いたかったんだが普通に買い物どきに買ってきたんだよ」

「……もしかして」

私は出迎えてくれた彼の横を通り過ぎてリビングに急ぐ。ドアを開け放った先には、まだ片付けきれない買い物袋の山が、隅の方にひっそりと置かれていた。

「どれだけお金を使ったんですか」

「だって使っただけでいいって君がいったじゃないか」

「遠慮とかはないんですね……」

「もしかして困った？」

「いえ、もともと使い所がなかったお金なんで別にいいんですけど……お兄さんの常識を少し疑うというか」

まるで自重しない態度に、珍しい人だという感想を得る。私だから遠慮して彼の1割も使わないだろうし、そもそもこんなに欲しい物もない。

「でもほら、馬子にも衣装というだろ？せつかくなんだからしつかり着飾らないとな」

「女物を着ることに抵抗はないんですか？もともとは男性だったのに」

「うーん、まあ人形遊びしてる気分だよ。MMOで女キャラ使うような感覚といえはいいかな」

「MMO？」

「ゲームだよ。パソコンでするような」

「よくわからないですけど、とりあえずメンタルのほうは問題なさそうで良かったです」

「えっナニソレ」

「ああ、聞いてないんですか？」

健全な精神は健全な肉体に宿るという言葉のように、魂は肉体からある程度影響をうける。神の使いさんは、「もしかすると拒否反応を起こすかもしれない」というような話を私にしてくれた。

「ええなにそれ……こっわ〜」

「無事なようですねによりです」

それより、先程から良い匂いがリビングに漂ってきている。台所のほうから流れてきているようだ。

「つと、腹へってるなら先にご飯にしようか。もうできてるから先に手をあらってこい」

そういつて機嫌よく台所へと向かう彼は、口調さえなければどこからどうみてもただの家事の得意な少女のようだった。

「今日はあまり時間がなかったから簡単にしか作れなかったけどな。」



明日からはもつと凝ったのも作ってやるよ」

「どうしてそこまでして料理をするんですか」

「ん？だって楽しくないか？」

料理はあまり自分ではしないし、調理実習などにもあまり参加していない。だから料理が楽しいというのは私にはわからない感覚だった。

「それに——」

食べ始めた私の顔をみながら、彼はにやにやと笑う。

「自分の料理を美味しそうに食べるやつを見るのは最高にいい気分なんだよ」

私があわてて顔を隠すと、彼はその笑みをより一層深めたのだった。

ちよちよいと

行儀よくごちそうさまでしたと手を合わせる少女を見て、俺はついつい口角があがってしまう。

そういえば他人に料理を振る舞うなんて、学生時代の男友達くらいしかなかった。そのときのスキルがまさかこんなカタチで役に立つ日がくるなんて、当時の俺はおろか、俺の友人含めて誰も想像できなかっただろう。

そういえば、あの子の友人の中にはまだ連絡をとりあっているやつらがいたはずだ。

ニュースで大々的に名前が乗っていたから、もしかすると俺の葬式に来てくれたやつもいたかもしれない。まあ、さすがに今の姿で会う気はないし、もしどこかですれ違ったとしても、相手が俺に気付ける確率はゼロである。

確率0%を期待しても意味がないので、俺はその思考を振り払うように皿洗いを始めた。

「ああ、そういえば」

「なんですか？」

「風呂も洗ってあるから先に入ってきていいぞ。たまにはお湯でも張ってゆつくりしてこい」

「……なんであまり湯船を使ってないって知ってるんですか？」

待て待て、そのジト目は一部界限ではご褒美かもしれないが俺にはそんな趣味はないぞ？

「見た目上は綺麗に見えても、よく見てみると汚れが残ってるもんなんだよ。そうだな、シャワーで流していてもスポンジ使って洗ったりはしてなかったろ？」

「はあ……なるほど」

一応は納得してくれたようでホッと安堵する。今の俺にやこしに住む場所がないからな。それにお金も彼女だよりだ。

あれ、もしかして今の俺ってヒモ男……？

いやいや、ちゃんと家事はやるつもりだからほら、専業主夫てきな

？それに今は少女の見た目だし、専業主婦でも通るといっか？

「では先に入ってきますね」

「俺は一度シャワー浴びてるから、気にせずゆっくりしてきてくれ」  
「シャワー？……っ！」

ガタリと物音がしたので振り向いてみると、机の角に足をぶつけたように涙目で悶絶している少女がいた。もしかしてドジっ子属性持ちか？あざといやつだ。

「つまりは……」

プルプルと震えながらも、少女は涙で潤んだ目で俺を睨みつけてくる。

「私の体……見たんですね？」

あれ、もしかしてそのプルプル震えてるのは羞恥だったりする？

||\*\*||\*\*||\*\*||

あのあと言葉巧みに言いくるめてから風呂に送り出して、なんとか場をしのいだ。まったく、勘のいいガキはいつもは好きだがああいうところではやめてほしいもんだね。

「ふう。皿洗いも終わりっつと」

エプロンをぬいでハンガーにかける。やはり良いエプロンだ。シンプルさの中にかわいさを忘れないデザイン。ちょうど中学生くらいの年頃に一番似合うものだ。

本当は俺の数倍は清纯さのある少女自身に着てほしいのだけれど、あの禁欲主義者が料理のために台所に立つ日は遠そうである。

「……、暇になったな」

今日の家事は一通り終わっている。とりあえず買ってきたものでも片付けるか、とリビングにまだ山積みにした買った買い物袋へと向かったときに、その事件は起きた。

「……なんかめんどいな」

そう、その事件とは、やる気がどこかへ行ってしまった事件である。ああ！めんどくさい！なんだかわからないがゴロゴロしながらス

スマホでもいいじっていたい!

諸君にもそんな瞬間はあるだろう。人にはやらなきゃならないことを目の前にしてやる気が行方不明になる瞬間があるもんだ。

そして、今の俺にはやらなきゃならない期限というものがない。どうせ明日も1日家にいる。つまりは片付けは明日でもできる。

そんな俺に、怠惰になりたいという感情を抑え込めるわけがなかった。食卓の椅子で即席のベッドをつくり、寝転がってはスマホで適当にネットサーフィンをし始めた。

「お兄さん」

「ん、えあつ?」

「お兄さん、起きてください」

「あ、ああ。いつのまにか俺寝ちやつてたか」

「そんなところで寝たら風邪引きますよ。お風呂、入ってきてください」

「ああ、サンキュー」

寝ぼけながらゴソゴソと買い物袋を漁り、着替えを取り出す。スマホが顔面横に落ちていたのを見ると、寝落ちしてしまっていたらしい。

「……なんだ?」

「いえ……」

「ん?怒らないから言ってみろよ」

先ほどから一挙一動じーつと見られている気がしたので聞いてみれば、少女はやたらと言い淀んでいた。

「あの、お兄さんは本当にお兄さんだったんですか?」

「どういうことだ?」

「いや、なんだか元からお姉さんだったのかなあなんて、いや失礼でしたよね。すみません」

なるほど、なんかよくわかんないけどまあほぼ確実に勘違いされている感じがする。

「なんでそう思ったんだ」

「だって……家事はできますし、こう女の子であることに慣れていているような」

「……へっ?」

「男の人つてもっとこう、家事が大雑把だったり、荒々しい雰囲気といえますかそういつたのがあるものだと思つて」

ふむ。まあ確かに言われてみれば、今の俺は女であることに慣れていている。急な環境変化にもかわらず、だ。そういつたところに違和感を覚えるのは、確かに性転換した俺の方のはずである。

しかし実際のところ、俺はすんなりとこの環境を受け入れているし、むしろ彼女のほうが疑問をもつてしまっている。

【それは僕から説明しよう】

「おまえ……生きていたのか」

リビングの扉を開け放ち現れたのは、自称神の使いである。

バケモノ退治後から姿を見せなかったので、存在を忘れかけていたのは内緒だ。

【忘れないでほしいなあ】

「いやスマンスマン。それで、なんでなんだ?」

【答えは簡単さ。いちいち違和感を覚えていては生活しづらいだろう?だからすこし頭の中身をちよちよいとね?】

「えっと、それ大丈夫なのか?」

【ただちに健康への影響は確認されてないよ】

余計に不安になってきたんだが……。

眠るときはね、こうなんというか救われてなきやダメなんだ

風呂でほっかほかにあったまったらあと、俺はとある事情で少女とO HANASHIしていた。

「だから、いいですって」

「いいじゃないか。それに俺は慣れてるから大丈夫だって」

「無理しないでください。それに体だって昔とは違うんですよ?」

「若いから余計に大丈夫だな」

「そうじゃなくてですね」

平行線の話し合い。その議題とは――

「だから私は気にしませんから一緒にベッドに寝てください」

「いいや、俺は毛布さえ貰えりや適当に寝るさ」

――俺の寝る場所についてである。

【君たち、仲が良いのはいいことだがほどほどにしてくれよ?僕も今日は大変な作業だったから疲れているんだ】

「すまん。だが本当にどうにかならんのか?こう魔法やら何やらで」

【僕はもうすっからかんさ。そして君は魔法を使えない。ジャスティーンは……そんな無駄なことをしなくてもいいと思ってるようだし】

「無駄ってあのなあ……」

まったく。貞操観念というものもないのかこの魔法少女は。

「何度でもいうが、俺の中身は男なんだぞ?」

「では私を襲いますか?」

「あと10年は経ってから言うんだな」

「なら大丈夫じゃないですか」

大丈夫じゃないと言おうとしていやでもそれだと襲うと公言していることになると思いとどまる。

やたらと押してくるな。彼女にしては逆に珍しい。

「なあ、もしかしてなんだが」

「はい」

「ただ単に俺と一緒に寝たいだけだったりする？」

「えっ違いま……コホン。ええ、実はそうなんですよ」

あからさまに気を遣われた……。やべえこれじゃ俺が変なやつみたいじゃないか。

「そもそもなんで魔法を出し渋るんだ。作れないのか？」

「あなたのベッド事情にさけるほど魔力に余裕がないので」

「でも神の使いの言い方からしてまだ残ってんだろ？」

ベッドに座る彼女が、ムスツとした顔で睨んでくる。

「私の魔法は悪を倒すためにあるんです。それ以外の理由でポンポン使えるほど世界は平和ではないんですよ」

「まあそりゃそうか」

偶然帰り道だった俺が襲われて死ぬくらいだ。しかも死の詳細は隠蔽されるし。

「わかってくれたなら結構です。早く寝ましょう」

「つたく、わかったよ」

質素なベッドに寝転がると、少女が電気を消してくれる。

「おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

隣でゴソゴソと動いていた塊は、すぐに寝息を立て始めた。心臓の音が聞こえてきそうなほど近距離な彼女は、あまりにも無防備だ。

「なんかなあ」

心にひっかかりがあったのを気のせいだと思い込むことにして、俺も瞼を閉じた。

||\*||\*||\*||\*||

夜中、ギシリとベッドが軋んだ音で目が覚める。その後の扉の開閉音と、隣にいたはずの彼女の体温を感じないことから、彼女がトイレにでも行ったのかと考えた。しかし、いつまでたっても帰ってこない。

さすがにおかしいと思った俺は、寝室から抜け出してみることにした。

「あれ、お兄さん。起こしちゃいましたか？」

リビングで電気もつけずに、彼女はただボーツと椅子に座っていた。正直ちびるかと思ったのはここだけの内緒だ。

「寝れないのか？」

「目が冴えてしまったので」

「何をしていた？」

「とくに何も」

そう淡々と答える様子は、まるで機械のようだった。

「まだ育ち盛りなんだから無理矢理にでも寝ろ？じやないと色々と育たないぞ」

「ははっ、そうですね」

そう言いながらも、彼女に寝室に戻る意思は見られない。

「しよがねえなあ」

俺は台所へと向かい、鍋を火にかける。冷蔵庫より取り出しますは牛乳。そして棚から砂糖も取り出す。

「また料理ですか？」

「料理ってほどの代物でもないさ」

寝れない夜はホットミルクと相場が決まってるんだ。彼女がカロリーがーだのなんだのうるさいやつじゃなくて助かる。

「ほれ、これ飲んで横になっとけ」

「牛乳と砂糖……？」

「ホットミルクも知らないのか」

「すみません」

「別に責める気はないんだがな」

俺も残りをすすって、それから鍋とカップを水につける。洗い物はまた明日でいい。

「ほら、寝室に戻るぞ」

「……はい」

澁々といった感じではあるものの、少女は俺の後に続いて寝室へと



戻ってきてくれた。

「ほら、しっかりと布団かぶって横になれ？」

「お兄さんは？」

「ああもう、わかってるよ」

俺も一緒にベッドに寝転がる。ベッドはそこまで広くないため、体の一部が密着してしまうのは許してほしい。俺だって流石にベッドから落ちて目覚めたくはないからな。

「お兄さん……」

「ん、なんだ？」

「お兄さんは私のことどう思いますか？」

どう思う、ときたか。そりゃ困る質問だ。容姿で言えば清純で可愛いとクラスで人気になりそうだなと思うし、魔法少女としてこの年齢から戦ってるのは尊敬する。ただし日常生活に関しては、まあその、言わんとすることは察してほしい。

「何を聞きたいんだ？」

「いえ……すみません、もう寝ますね」

「あ、ああ。おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

そう言っただけで少女は、話すのをやめてしまった。

その呼吸が寝息に変わるのを聞き届けてから、俺もちやんと寝直すために寝返りをうった。

## 私のおひる

目覚ましの音が鳴っているらしいことに、私は薄れた意識の中で気がつく。だんだん浮上していくような意識の覚醒を自覚しながら、私は瞼を開いた。

昨夜の一件ののちは、驚くほどぐっすりと眠れたようだ。どこことなく体の調子が良い気すらもする。

今日は久々に目覚ましに起こされた。普段は目覚ましが発する前に起きていたため、この無理矢理起こされる感覚はなかなか貴重である。

うんと背伸びをして、まだぼんやりとしている目を擦りながら寝室から出ると、リビングの方から懐かしさの混じった匂いが漂ってくる。

「おっ、起きたか。おはよう」

リビングとつながる台所、その匂いの元には、1人の少女がエプロンを付けて立っていた。

「……ママ？」

「おいおい、まだ寝ぼけてるのか？早く顔洗ってこい」

「……す、すみません」

もうしばらく会ってない母の面影を感じてしまい、失言をしてしまった。顔に熱が集中するのが触らなくてもわかる。

水で顔を洗えば、意識がはつきりとしてくる。昨晚のこともはつきりと思い出してくる。またあのホットミルクを飲みたいなど思っている自分を自覚して、また少し恥ずかしくなる。

「お兄さん、随分と張り切ってますね」

「おうよ、もちろんだ」

洗面所から戻ってきた私の前には、しっかりと一食分ある朝食が準備されていた。

良い艶の紅鮭に具沢山の味噌汁、そして小鉢には野菜を使った一品がある。ご飯も炊き立てでホカホカと湯気が立っており、まるでCM

か何かかと間違うような食卓になっていた。

「ほら、今日も学校に行くんだろ？遅刻しないように早く食えよ」

そう言っただけで私と瓜二つの少女は、いただきますと手を合わせる。私もそれに釣られるように食卓について、いただきますを言う。

「お兄さん……これ」

「ん？なにか変なものでも入ってたか？」

とりあえず味噌汁からと啜ったときだった。私はこの味に覚えがある気がした。

「いえ……、ただ懐かしい味がすると思って」

「そりゃよかった。流石の俺も味の調整に苦戦したからな」

そう笑う彼の様子は、どこか達成感を感じているようだった。

「味の調整ってどうやったんですか？」

「簡単さ」

彼はベーツと舌を出して見せる。

「この体の舌に一番馴染む味にしたのさ。いや、まさか味覚まで変化があるなんてな」

そうケラケラと笑う彼は、特に何かを含ませる意図もなく、ただ笑いたいから笑っているように見えた。

「ほら、あんまりぼんやりしないでさっさと食っちゃえよ。遅刻するぞ」

遅刻しても別に怒られないし、どうせ保健室にしか行かないのだが、なんとなく従っておきたくなくなった。

「ごちそうさまでした」

「おう、おそまつさまでした。食器はそのままでもいいぞ」

テキパキと自分の分と私の分両方を片付ける彼の姿を見ながら、私はまだ香ってくる匂いの元に目を惹きつけられていた。

「ん？何かまだあるのか？」

「あっいえ……」

なんだか最近自分がおかしい気がしながら、自室へと戻って登校の準備を始めたのだった。

「行ってきます」

「つとおいちよつと待ってくれ」

玄関で一声だけかけようとすると、バタバタとリビングから彼が出てくる。その手には参考書一冊しか入らなさそうな小さなバッグを持っていてる。

「ほら、どうせいつもは買ってるんだらうけど、今日からはこれ付きだ」

「……これは？」

「弁当だよ。あれ、もしかして給食がある感じか？」

「いえ……ないですけど」

「ならよかった。ほら、持ってけ。俺の味見による保証付きだ」

「……ありがとうございます」

彼が来てから初めてのことばかりだ。私はそのランチバッグを受け取って、再び扉を開ける。

「行ってきます」

「おう、いつてらっしやい」

こうやって挨拶をするのも、しばらくぶりであったなと思った。

※※※※※※※※※※

チャイムが鳴り、昼休みが来る。流石に昼休みは、校舎の喧騒が保健室まで届く。

「あら？今日は弁当持ってきてるのね」

「はい。えつと……最近一緒に住み始めた姉が持って行けとうるさくて」

彼との関係性は複雑だ。とりあえず先生には姉と言っておいて誤魔化すことにした。

「へえ、良いお姉さんね。それに安心したわ。あれでもあなたって確か一人っ子だったわよね？」

「あつその、姉といっても血の繋がりの遠いんです。年上で私の面倒を見てくれるのでそう呼んでいるだけで」

「なるほどね」

嘘は言っていない。お兄さんとは血の繋がりは果てしなく遠いし、お兄さんは年上である。

「あら、随分とおいしそうね。お姉さんは料理が上手なのね」

「そう……ですよね。とてもおいしいです」

お兄さんは不思議なことばかりだ。ただのサラリーマンだったと聞いているのに、どうしてここまで料理が上手いのだろうか。

「っと、おいしそうなお弁当を見てたら私もお腹が空いてきちゃったわ」

そう言っって先生もバッグから弁当箱を取り出す。

「先生は自分で作っているんですか？」

「いいえ、残念ながら私は台所に立つなど口酸っぱく言われてるから」

「言われてる？」

「ええ、彼女に」

「……？」

「じゃなかった、彼氏にね。もう口うるさいったらありやしないんだから」

そう憤るように言っってはいるが、先生はその彼氏さんが好きなんだろうなと感じる。

しかし彼氏と彼女を言い間違えたりするだろうか。少し腑に落ちないなと思っっていると、突然保健室の扉が開く。

「先生！怪我したんで絆創膏くださいー！」

「また？まったく、気をつけなさいといっつも言っっているでしょうに」

そう言っって先生は、その生徒の対応に行っってしまった。

私は普段は感じない寂しさというものを感じてしまっっている気がした。

一口弁当を食べ進める。やはり、お兄さんの料理はおいしい。

## 大人気

さてと……

魔法少女を学校へと見送った俺は、一息つくまもなく家事に取り掛かる。掃除洗濯その他洗い物全部だ。

昔から掃除は好きだ。なんというか、綺麗になった時の達成感が好きなのだ。俺が俺だった時の部屋？聞かないでくれよ。まあ……控えめに言ってゴミ屋敷だった。

じゃあなんで今はこんなにやる気があるかと言えば、年頃の同居人がいるからだろう。誰かのためと思えば、まあやってやらんでもないという気にもなるというものだ。

「しつかし……随分と殺風景な部屋だな」

リビングを見回しながら、俺はあごに手を当てて頭を悩ませる。

主張のない白色の家具。もちろんあるのは最低限。カーテンも無地、壁紙も無地の白から張り替えた形跡はない。

「ここらは手を加えてファンシーにしてもいいが……ここまで来るともういっそのことシンプルな部屋でまとめておいた方がいいな」

俺は買い物袋を漁り、ラグマットを取り出す。クリーム色のシンプルなものだ。この神様転生系の謎空間ばりの白い部屋にでも合う。やはりこの色にして正解だったか。ついでに既存のソファも、カバーをかけてマットな色に染め上げる。真っ白だった空間にアクセントが加わり、多少なりともオシャレを気にしている空間へと早変わりである。これが匠の技だよ。

「極めつけは、これだ」

テレビ台に小さな観葉植物風模型を置く。緑が入ることで、白が更に際立つ。

眩しいなとは思ったけど、さすがに今のこの身長で壁紙を張り替えたくはないし、わざわざ業者を呼ぶのも手間だったのでこれで妥協することにした。突然変えすぎても彼女も嫌だろうしな。

【おっと、随分と見栄えのある部屋に変わっているね】

「随分と遅いお目覚めだな」

「昨日の後処理はいつにも増して大変だったからね。今日が休みで助かったよ」

「神の使いには休みがあるのか……」

「言っておくけど大体の人には休日は存在するよ？」

「なん……だと……」

「君はなかったみたいだけれどね」

「だよなあ。よくよく考えなくても超絶ブラックじゃん。なんで辞めなかったんだ俺」

「さあ？神と本人のみぞ知る、だね」

「神さんはなんでも知ってるんだなあ」

個人個人の感情まで知識として持つてるなんて、脳の容量パンクしたりしないのだろうか。

そう不思議に思っていると神の使い野郎が台所へと向かっていくので待ったをかける。

「なんだい？僕はおなが空いたんだけれど」

「おまえって……何食うんだ？」

奴の見た目は、犬のような猫のようなその他小動物のような、そんな曖昧な姿のぬいぐるみである。

食べ物……ドッグフードかキャットフード？はたまたその他小動物用？まさか綿なんてことはないよな？

「なんだか失礼なことを考えてないかい？」

自称神の使いは、ホームセンターの時と同じ姿に変身してそう言った。

「食べ物を食べるならこの形態が一番なのさ」

「そういうもんなのか、便利にできてんなあ」

「なにせ僕も神のシステムの一部だからね」

「いやあご都合主義万歳だな」

「適応してくれたようで何よりだよ」

何が適応だ。納得がいくかこんなもん。ただし考え込んで無駄な時間を使うのも面倒なのでここまでにする。

「それで、僕を引き止めてなんだい？」

「ああ、座ってちよつと待ってろ」

「ま、まさか……僕の分もあるのかい？」

何言ってるんだこいつ。

「当たり前だろ」

「君……」

||\*||\*||\*||\*||

「いやぁおいしかったよ。ごちそうさま」

「おそまつさま。ほら片付けるから皿よこせ」

奪うように皿を流しに持っていき、スポンジを手取る。

「いやぁ。巻き込んでしまった僕が言うのもなんだが、こうなっ  
てしまったのが君で良かったよ」

「なんだ、嫌味か？」

「違うさ。こんなに美味しい料理が食べられるとは思わなかったから  
ね。嬉しい誤算だよ」

「そりやどーも」

「……君は将来、良いお嫁さんになるね」

「やめろや」

「なんなら僕の妻に欲しいくらいだ」

「……ロリコン？」

「ち、違うさ！僕の守備範囲は僕と同世代くらいだよ！」

「えっ、お前何歳なんだ」

「えっと……」

神の使い野郎は指を折りながら数え始める。それが片手5本全て  
折れ曲がった。

「ざつと5百年くらいかな」

「年増好きか」

「失礼な！これでも僕は若い方だよ！人間で言うなら……20歳前半  
さー！」



「まーそっか、種族が違うもんな。うんうん。そういう趣味も俺は否定しないぜ」

「だから……はあまったく。君を巻き込んだことを今までとは違う意味で後悔したよ」

「最高の褒め言葉をありがとう」

そうニシシと笑ってやると、神の使い野郎は大きいため息をついた。失礼な奴だ。

「それより、今日は一日家にいるのか？」

「いや、少し野暮用を片付けてこなきゃいけないくてね。準備をしたらすぐに出るよ」

「そうか。晩飯は？」

「うーんそうだね……」

神の使い野郎は悩んだあげくに、いい笑みを浮かべながら言い放つ。

「君の料理が食べたいから間に合うように帰ってくるよ」

ああ、もし俺がこの外見通りの乙女なら、見てくれだけはいいいいこのセリフにときめいたりできてたのかなあなんて思う。

「ったく、仕方ねえな。今日は唐揚げだ」

「本当かい？ならなおさらはやく用を済ませてくるよ」

「はいはい、んじゃさっさか行け」

俺は忙しいんだ。邪魔せずにさっさか出かけてこいや。

夢オチってさいてー、夢オチならね

ガチャリと玄関が開く音がして、俺は目を覚ます。届いたばかりのソファは格別の寝心地だった。スマホで時間を見れば、もう晩飯の準備を始めなきゃいけない頃合いだった。

「ただいませす。……あつ起こしちゃいましたか？」

「おかえり。ちようど起きなきゃいけない時間だったからいいよ」

「そうですか」

彼女はふと部屋を見回して、首を傾げた。

「どうかしたか？」

「いえ、なんだか目に優しくなったような気がして」

「まあ、ちよこちよこ変えたからな。このソファだって新しいものだし」

「そうなんですね。どおりで見覚えがないわけです」

「晩飯は何時ごろがいいとかあるか？」

「いえ、お兄さんの都合のいい時間で大丈夫ですよ」

「了解」

じゃあのんびり作り始めますかね。

「あ、あの……」

「ん？まだ何か？」

「これ、美味しかったです。ごちそうさまです」

そういつて差し出してきたのは、朝に持たせた弁当箱が入ったランチバッグだった。

「ああ、口にあったようでなによりだよ。苦手な食べ物とかも聞いてなかったし」

「基本的になんでも食べるので……」

嫌いな食べ物が弁当に入っていると午後のやる気が削がれるからな。わりと重要な問題だ。

「じゃあ逆に好きな食べ物はなんだ？」

「えつと……とくには……」

「えつじやあ……ハンバーグとかカレーとか」

ない？嘘だろ？

「美味しいとは思いますがけど……とくに好きというほどでは」

「……まじか」

嫌いなものがないというのは良いことだが、好きなものもないってどうなんだ？ちなみに俺は野菜全般が嫌いだし、牛肉が好物である。まあそんなことはおいておいて、だ。

「今度からもっといろいろ作ってみるか」

「はい、楽しみにしています。……お兄さんの料理はおいしいので」

「ん？なんだって？」

「いえ、なんでも」

「コホンと咳をしながらすました顔しているが、聞き間違えじゃなければ今俺の料理をおいしいと言ったか？まったくもうそんなこと言っても何もでないぞ。……今晚はデザートも追加しとくか。」

「ちなみに辛いものは？」

「○極ラーメンまでは余裕です」

「甘いものは？」

「砂糖をたまに舐めてました」

「そのまま？」

「はい」

うーん。思ってた数十倍は食生活がひどそうである。これはもう俺が正しい食生活をわからせてやるしかねえなあ。くくく、見ているよ。すぐにその顔をメシ顔にとろけさせてやるぜ。

「先に着替えてきますね」

「もう少し時間かかるからゆっくりしててもいいぞ」

「それじゃあ先に課題を済ませてきます」

そういつて自室に戻っていく姿は、まるで機械のようだった。課題を帰ってすぐにやるなんて……えらすぎんだろ。つたくなにから何まで俺とは違うんだな。

|| \*\* || \*\* || \*\* || \*\* ||

晩飯時、見計らったかのようなタイミングで帰ってきた神の使い野郎も含めて三人で食卓を囲むことになった。ここ数年、一緒のタイミングで集まって晩飯を食うなんて実家に帰ったときくらいだったからしみじみと心に沁みるものがある気がする。

晩飯が終わった後もしばらく自称神の使いの話を聞かされていた。本当によく口の回るやつだ。喉がカラツカラにならねえのかなと思いつつ俺と少女だけお茶を飲んでいた。

「あつそういえば風呂はもう洗ってるから入ってきてもいいぞ」

「いえ、まだ課題が残ってるので。お兄さんからどうぞ」

「ああ、わかったよ」

じゃあせっかくだし先に入るか。風呂すきなんだよなあ俺。こうお湯に浸かっていると安心する。前の職場じゃ温泉に行く余裕すらなかったし、魔法少女をなんとか説得して行けないかな。

「んじゃ先に入ってくるな」

着替えを持って脱衣所に行く。今日は外に出てないので楽な服装だった。ガバつと脱いでしまえば、発育が悪いとも言えない絶妙な少女の体が脱衣所の鏡に映る。

「……、悪くはないと思うんだけどな」

少女の裸体を見ても何も思わないのは、俺自身だからなのかそれとも別の理由か……。

「まあ、気にしても仕方ねえか」

風呂場に入って蛇口をひねる。いい感じの温度に手で調節してから、栓をする。お湯が溜まっていく間にシャワーで髪を洗えば時短になるだろうという魂胆である。普段ならゆつくりお湯に入ってから洗うんだが、さすがに後に待ってる人がいるとそうしようとは思わない。

「あの……」

扉の外で声が聞こえる。魔法少女の声だ。

「ん？なんだ？」

ちょうど髪を洗っているとところだった俺は手が離せず、ついでに扉の方に目をむけることもできなかった。

「ちよつと失礼しますね」

ガラガラと扉が開く音がする。

「ん？おいおい待って待って！」

「はあやっぱり……」

「いやため息つくなや。なに入つてきてんだよ濡れるぞ」

「私も脱いでるので大丈夫です」

「だ、大丈夫じゃねえだろ!? えっなんで？」

「昨夜と一緒に寝たときに気になったんですが、もしかしてちゃんと洗えてないんじゃないかと思ひまして」

「そんな理由で？」

「ええ。どうせ同じ体ですし、気にすることもないでしょう？ 女の子はお風呂にはいろいろな手間かけるんです。お兄さんは知らないでしょうから私が教えてあげますよ」

「ええ……まあ助かるけど」

「じゃあまずですね——」

という夢をみたのさ。ああ、夢だ、夢なんだよ。だからもう思い出させないでくれ。

夢だったということにさせてくれ。

そんなところ

お兄さんがお風呂に行くのを見届けながら、私はお茶をちびちびと飲む。

彼とそして神の使いさんの三人で食卓を囲むことになるなんて、数日前の私に言っても信じなかっただろう。そもそも神の使いさんとも食事のタイミングがあわなないことが多かったし、神の使いさんと同じ食事をとることもほぼなかった。

「ねえ、ジャステイヌ」

「……？何ですか」

「彼のことはどう思ってる？」

「えっ……？普通に良い人だと思いますけど。いろいろとやってきていますし」

「だよね。じゃあさ、僕からお願いがあるんだ」

神の使いさんは湯呑をコトリと置く。あらたまって何だろうか。

「彼のこと、任せても良いかい」

「任せるもなにも、お兄さんに私が頼めることはあってもその逆はないと思いますけどね」

「君は変に考えてるのかもしれないが、彼の中身は真つ当な成人男性さ。だから……多分お風呂でも……」

「別にいいんじゃないですか？もうお兄さんの体な訳ですし」

神の使いさんはヤレヤレと眉尻を下げながら首を振る。

「君の貞操観念はまあこの際つつこまないけれど、そう例えば髪の毛の洗い方一つまでもできないと言ってもいいんだよ、今の彼は」

「……。つまり教えてあげて欲しいということですか」

「彼は良くも悪くも成人男性だからね。思ってたよりも家事はできて、そこらへんの常識の下地は彼が男だったときのままなのさ」

昨晚のお兄さんを思い出す。たしかに、髪はしっかりと乾ききっていなかったし、化粧水もしっかりと付けられていなかった気がする。

「わかりました。任せてください」

「この類のことにに関して僕は無力だからね。頼んだよ」

なるほど、そういう意味の頼んだでしたら、私が頑張るしかないわけですね。

|| \* || \* || \* || \* ||

「あの……」

扉の外から声をかけてみる。

「ん？なんだ？」

お兄さんは、まさか私がこうするだろうとは思っていないはずだ。きつとコロコロと表情を変える彼なら、今回も面白い表情を見せてくれるのだろう。

「ちよつと失礼しますね」

ガラガラと扉を開く。

「ん？おいおい待って待って！」

髪を洗っていた最中らしく、目をつむったままのお兄さんは慌ててこちらに振り返った。

「はあやっぱり……」

「いやため息つくなや。なに入ってきてんだよ濡れるぞ」

案の定、お兄さんの髪の毛の洗い方は雑で、ダメダメであった。お兄さんがもともとお姉さんだった説なんて考えていた私がばかばかしく思えるほどである。

「私も脱いでるので大丈夫です」

「だ、大丈夫じゃねえだろ!? えっなんで？」

「昨夜に一緒に寝たときに気になったんですが、もしかしてちゃんと洗えてないんじゃないかと思ひまして」

「そんな理由で？」

「ええ。どうせ同じ体ですし、気にすることもないでしょう？女の子はお風呂にはいろいろ手間かけるんです。お兄さんは知らないでしょうから私が教えてあげますよ」

「ええ……まあ助かるけど」

「じゃあまずですね——」

もうシャンプーをつけてしまっているので、途中からではあるがお兄さんの頭に手をのばす。

「ゴシゴシと洗っちゃダメです。しっかりと泡立ててから、頭皮をマッサージするように洗うんです」

「あああ、いいな、気持ちいいわ」

結構ぐいぐいと力をいれているのだが、現実世界で非力な私ではマッサージになるくらいしか力が出ていないようである。少し悲しくなってしまうのはなぜだろうか。

「髪の毛どうしが擦れてしまふと痛む原因になるんですよ。お兄さんも今はもう女の子なんですから、髪の毛は命だと思ってください」  
「命ねえ……」

口ではなにかモゴモゴと言っているが、その顔は私のヘッドマッサージが心地よいのか少しとろけたような顔をしている。

「流しますよ」

「ああ、お願いするよ」

シャワーを出せば、熱いお湯が出てくる。

「熱すぎるお湯もNGです。えつと……このくらいの温度で洗ってください」

「ええ……熱いシャワー好きなんだけどな……」

「せめて髪の毛を洗うときくらいは我慢してください」

「うう……はい」

聞き分けがよくてなによりである。

「体は……特に言うことはないので自分で洗ってください」

「えつ」

「何ですか？もしかして洗ってほしいんですか」

「イエチガイマスジブンデアライマス」

「なんでカタコトなんですか」

先程からお兄さんの動きが、壊れたロボットののようにギクシャクしていて面白い。容姿は私と瓜二つなのに、中身が違うだけでこうも印象が変わるのかと、自分の姿を風呂場の鏡で眺める。

ん……んんっ……？



「お兄さん」

「ひゃ、ひゃい？」

「なんで目をつむってるんですか」

「いやだつて……見ちゃだめかなつて」

「自分の体と同じですよ。その体で欲情しないなら私を見ても大丈夫でしょう」

「ええ……そんなもんかな」

「まあそんなことよりですね」

そう、お兄さんがずっと目をつむったままなんて、そんなことなのである。

もつと重要なことがあるはずだ。

「もしかして、私よりあります……？」

「えっなにが……？」

すつとぼけるお兄さんを見て、少しイラつとした。

「失礼しますね」

私は思い切つて、お兄さんの後ろから胸周りに手を回す。

「ちよつなにすんだ！」

「やっぱり……」

「てかあたつてるあたつてる！」

「なんで……」

「どうして……」

「私より胸があるんですか……」

少しの差ではあるかもしれない。しかし、お兄さんは話では私と同じ体のはずなのである。話すと違う。よりにもよつて、その部分でお兄さんに負けるだなんて聞いていない。

「どうして……」

「わかんないけどさ、ほら、離してくれないか？その……さつきからお前の胸もあたつてんぞ」

「そこは気にしないので大丈夫です」

「お、おお。そうか」

この謎は持ち帰らせていただいて、あとで神の使いさんにご相談し

なければいけないと私は決意した。

## 魔法少女は堕とすもの

### 戦場

と聞いて皆は何が思い浮かぶだろうか。

世界大戦か、一部地域の紛争だろうか。はたまた某ゲームを思い浮かべる人もいるかもしれない。

そんな俺は今、とある戦場に身を置いていた。

争いは何も産まない

「ただいまより~~~~~」

そう、戦いとは、破壊なのだ。

「タイムセールを開催いたします!」

つまりこの戦場におけるソルジャーたちも

「お一人様3パックまで、限定タイムセールですよ~~~~!」

破壊を覚悟して来ているのだ。

「つしやおら行くぞ自称神の使い」

「なんで僕がこんなことを……」

神の使いの手を引きながら、俺は戦場へと突っ込む。

ふふ、きつとはたから見れば、お兄ちゃんの手を引いてせがむ妹なんかに見えてるんだろうな。そう、今から行く場所が主婦の戦場なればな。

「あつくそ押すな」

「ぐぐぐ、潰れる」

「腕曲がる腕曲がる」

「はあ、はあ」

「大丈夫かい？」

「まったく、これだからタイムセールは地獄だぜ」

「しかし、主婦ってのはなんでまたあんなに強いんだか。将来は絶対主婦コミュニティに入らずに生きていけるようになりてえや。」

「お金がカツカツなわけではないだろう？どうしてこんなことを」

「神の使い野郎もボロボロである。元から見た目が良いので、着崩したファッションみたいにキマっているのが恨めしい。」

「何言ってるんだよ……金は趣味に使うもんだ。こんなところで無駄に消費できっつかよ」

「趣味といっても僕も魔法少女も特にお金を使わないけれどね」

「マジかよ……枯れてんな」

「仕方がないだろう？休めるときはゆっくりしたい質なんだよ僕は」

「まあそういう生き方もあるか」

「もともと趣味なんて個人差があるもんだしな。」

「それはそうとしてあの魔法少女は墮とす」

「へっ？いや聞き間違いかな。なんて言っただい？」

「魔法少女を墮とす」

「……何に？」

「趣味で散財する喜びに」

「は？へ、へえ？」

「趣味での散財とはいっても、まずは魔法少女の趣味を開拓するところからなんだがな。まあ、とりあえず策は用意してある。」

「帰宅が楽しみだぜ」

「\* \* \* \* \*」

「それで、これは一体どういうことですか？」

「ふふふ、まあまあ」

俺は少女に、とあるスマホアプリをいれさせていた。廃課金で有名なゲームである。俺も昔どっぷりとハマリ、思い出したくもない金額を溶かした経歴と実績のあるものだ。

ふふふ、お前も課金沼に堕ちてしまえ。

「はあ、なるほど、こういうゲームですか」

「さすが若いな。飲み込みが早い」

魔法少女は驚異のスピードでチュートリアルをクリアし、記念すべき初ガチャへと到達する。

「えつと……これを引けばいいんですか？」

「ああ。ちなみにこのゲーム内であたりと呼ばれているのはコイツだ」

「なるほど、それでどのくらいの確率で出るんですか？」

「えつと確か……小数点……」

「1%もないんですか……地獄ですね」

「まあまあ、引いてみなつて」

「わかりました」

少女がゴクリと喉を鳴らして画面をタップする。

しかし、ここで驚くことが起きた。

「へえ、ゲームのガチャ画面つて初めて見ました。こんなに色とりどりなんですわね」

「なん……だと……？」

普段は青色ばかりと悪名高いこのゲームである。そんなはずが……ま、まさか確定演出？

「あつ出ちやいました」

「くあwせdrftggyふじこーp」

「お、お兄さん？」

嘘だろ……。俺なんて大枚叩いてこいつを手に入れた後、そのスマホごとバケモノに食われたつてのに。しかもパスワードは自宅の管理ソフトにしか保存していなかったため、おそらくアカウントは遺品整理と共に死滅しているだろう。

「い……」

「い？」

「いいや、まだだね」

そう。ソシヤゲとは、ただ環境キャラが1人いればいいというものではない。

「このキャラには必須級と呼ばれるコンピキャラがいるんだよ」

「なんてキャラですか？」

俺は自分のスマホでささっと調べて、キャラの立ち絵を出す。

「あつそれならさつき出ましたよ」

「なん……だと……？」

【やれやれ、想像通りなことになってるようだね】

「想像通りってどういうことだ？」

【彼女は魔法少女だよ？つまりは幸運値が】

「極振りか……ちくしょう」

まさか、まさかこんな、俺だけが悲しみを深めるだけになるなんて……。

「お兄さん、なんだかよくわからないですけど元気だしてください」

「う、うう……」

「あつなんだかメールみたいなの来てますね。記念でなにかもらえるみたいですよ」

「ああ、たぶんいろんな素材とかガチャ石とか……」

「なるほど、つまりはまだ回せるんですね」

「ま、待て！それ以上は！」

少女のスマホが鳴る。これは、先程も聞いたレア確定演出の音である。

「あつまた出ました。意外とよくでるもんなんですわね」

「んなわけあるかああ！」

ほぼキレかけてる俺を見て、少女はクスクスと笑う。

「んだよ、なにがおかしいんだ」

「いえその……ソシヤゲというものがなんなのかはわかりませんが」

少女は笑う口を手で隠す。

「お兄さんのそういう表情を見れるのは楽しいですね」  
あれ、もしかして別の沼に墮としちゃった？

## 幕間

「お兄さん」

「ん、なんだ？」

何故かまた一緒に入らされた風呂を終えたあと、台所で明日の弁当の準備をしているときだった。パジャマ姿の魔法少女が、珍しく台所へと入ってくる。

「あの……その……」  
「？」

言いづらそうである。いったい何だっただ。

「えっと……昨晚のホットミルクを今日も」

「ああ、いいよ。ちよつと待ってな」

そんなことなら早く言ってくればいいのに。まったくこれだから最近の若いもんは。なんてね。今はカラダ年齢一緒だし。

「ほら、できたぞ」

「ありがとうございます」

フーフーとしながらちびちびと飲んでいるのを見ると、こうなかにか小動物を飼っているような気分になる。いや待て俺、中学生女子相手にそれはさすがにマズイだろ。

「お兄さん」

「ん、なんだ」

「明日も、また作ってくれますか」

「このくらいだったら全然いいぞ。なんならもつとわがままになれ」  
ワシワシと頭を撫でる。俺にも妹がいればこんな感じだったのかな、なんて思った。

「じゃあお兄さん」

「ん、なんださっそくか」

「一緒に寝ましよう？ソファに毛布持ってきてるのはわかってるんですけど」

「まあ待て、あのソファはちようどベッドのよう寝やすいから大丈夫だっけ」



「……わがまま言ってもいいって……」

「んぐぐ、わ、わかったよ」

この後無茶苦茶抱き枕にされた。俺？家事の疲れで速攻で寝た。

※※※※※※※※

「桃木さん、最近顔色が良くなったわね」

「そうですか？」

私は自分の顔をペタペタと触る。特に昔と変わった様子はない。

「いや、変わったわね」

「どんなふうですか？」

「そうね……敢えて言うなら恋する乙女の顔になったわね」

「……？？？どういうことですか」

恋？私が？誰に？

「冗談よ。まあおそらく、そのお弁当を作ってくれてるお姉さんのおかげでしょうね」

「その件に関しては感謝してもしきれないです」

「仲が良いようですねによりだわ。たまにあるのよね、そういった特殊な家庭事情がストレスになる事例が」

「そんなことはないです」

お兄さんには楽しませてもらっている。そんなことはない。

「ねえ、今度紹介してくれない？」

「えっおに……姉をですか？」

「ええ。料理が上手だし、教えてもらいたいなと思ってね」

不可能である。もしお兄さんがくれば、私と瓜二つということで波乱が起きる。

「無理なのね、残念だわ……つと会議があるんだった。留守番お願いね」

そういつて先生はバタバタと保健室から出て行ってしまった。

もし突然学校に来るのがお兄さんになったとして、一体何人が気づけるのかな、なんて考えてしまった。

||\*||\*||\*||\*||

「へえ、あのジャスティーンがね」

少女は怪しい笑みを浮かべる。街で一番高い山、その鉄塔から見下ろす夜景は絶景の一言に尽きる。

「楽しくなってきたじゃないの」

「なにかあったんですか？」

「あら、神の使いさん。もう終わったの？」

「ええまあ。私は優秀なので」

「偉いわね」

素晴らしいながら少女は、猫のぬいぐるみの喉のあたりを撫でる。

「さて、帰りましょうか。お腹が空いたわ」

【そうですね】

二人は闇夜へと姿を消す。後には、元通りとなった山頂の展望台のみが残っていた。

## 魔法少女マシマシ

「ただいま……です」

「おかえり。晩飯できてるぞ」

「あつはい。すぐに着替えてきますね」

魔法少女の様子がおかしい。そう思ったのは俺の勘違いではなかった。

「バケモノが勝手に倒されてる?」

「はい。気配を察知して現場に急行しても、もうバケモノが倒されたあとなんです」

「そりや……いいことじゃないのか?」

【ところがどっこい、そういうわけにもいかないのさ】

神の使い野郎も気を揉んでいるようで、額を手で抑えていた。

「他の魔法少女って線はないのか? 神だっていっぱいいるんだし、お前のしらない神の使いがいるとか」

【それはすでに調査済みさ。確かに、この世の中には魔法少女がたくさんいる。だからこそ管理もお役所のようにしているんだ】

「お前が仕事に追われてるのはそれか」

【半分くらいはね】

「しかし魔法少女がたくさんか……。ほんとに俺が生きてた世界かよ」

「一般人には絶対にはれないように動いてますからね。基本的には目撃したが最後、ですから」

「俺が特例ってことか」

そう考えると俺は運がいいんだか悪いんだか。まあ仕事を辞めて主婦もどきをやりながら十分な金があるんだから、幸運だったってことにしよう。

「それで、その魔法少女はどんなやつかもわからないのか?」

【うーん、一言で表すならば……破壊型かな】

「破壊? そりやまた物騒だな」

【拳ですべて穿つよりかは魔法っぽい気もするけれどね】

「ははっ、一理ある」

「ちよつと神の使いさん！お兄さんも」

「まあまあ落ち着け魔法少女。んで、どうしてそんなに気を揉んでいるんだ？べつにバケモノを倒すのは悪いことではないだろ」

【無許可で倒しているのが問題なのさ。おかげでここ数日、僕は書類や会議に追われっぱなしだよ】

「かわいそうに……ビールでも飲むか？」

仕事が多くなつたとかその謎の魔法少女は許せんやつだな。

【気遣いはうれしいけれど遠慮しておくよ。このあとも書類が残ってるからね】

「……あとでコーヒーでも買ってきてやるよ」

なんともかわいそうな神の使いがいたもんである。

「神の使いがこうなってる理由はわかった。んでおまえの方はどうしてそんな腑に落ちないって表情をしてるんだ？」

魔法少女はただ疲れているといった表情でなく、そういった心に引つかかるなにかがありそうな顔をしている。

「それが……」

魔法少女は一通の手紙を取り出す。

「中身、みてもいいか？」

コクリと頷いたのを確認して、俺はその手紙を開く。

「こりやまた、随分やべえのが出てきたな」

その内容は、脅迫文のようなものであった。魔法少女の変身後の姿と、それから氏名住所電話番号。SNSのIDなんか書かれていいる。というか君SNSなんか使ってるのね。おじさんてつきりそういうのには疎いのかと思ってたよ。

「これらを学校で公開するねえ」

「私自身は別に良いのですが……、先生方にはいらぬ心配をかけてしましますし」

いやいや、少しは自分のことも気にしろよ。明らかに異常なまでの個人特定だ。内容が内容でなければ、警察にお世話になるレベルであ

る。

【問題は、その写真と個人情報なんだ】

「べつにカメラで撮ればいいだろ。個人情報だっているいろと手に入る手段はあるだろうし」

【はあ。君は僕が言ったことも忘れたのかい？】

自称神の使いは大きいため息をついた。

【裏の世界で起きたことを現実に持ってこれるのは魔法少女だけさ。ジャスティヌの裏の世界での姿を撮って、表で手紙にして送ってきただということは】

【別の魔法少女が犯人ってことか】

【もしくはそれに準ずる何かだね。そういう存在がいるとは信じたくもないけれど】

まあそりやそうか。こいつが知らないということは、神の意思の外にあるということだ。

【とりあえず事情はわかった。わかった上で聞くんだが——】

そう、俺にとってはこれが重要である。

【——俺にできることはあるか？】

【ないですわね】

【ないね】

【うん、いや、わかっていたけれども】

なんだか仲間はずれにされている気分になった。

※※※※※※※※

【ジャスティヌ……正義ねえ】

少女はバケモノを足で踏みながら写真をパシャリと撮る。バケモノは動かない。それは当たり前で、上半身が木っ端微塵に吹き飛んでいればたとえ裏世界といえど生物は生きれないのである。

【なんでこんな生ぬるいの？もつと壊しつくせばいいのに。ねえそうは思わない？神の使いさん】

【こんなものですよ、魔法少女なんて。むしろあなたが適合しすぎで

す」

「褒めてもなにも出ないわ」

【出してもらおうとは思ってませんよ】

ふよふよと浮かぶ猫のぬいぐるみを横目でみながら、少女はバケモノを踏み潰す。

力のはいつていないように見えたが、バケモノに足裏が触れた瞬間、その残骸は跡形もなく破壊しつくされた。

「後片付け、よろしくね。私はあっちでお茶でも飲んでるわ」

【任せてください】

少女はホコリをはらうように服を触る。光が集い、霧散する。そこには、隣町のお嬢様学校の制服を身にまとった少女がいた。

「魔法少女って大変ね。なにかあったかいものが飲みたい気分なんだけど」

キョロキョロと自販機を探せば、公園の端にあるのを見つける。

迷いなく進んでいた歩みが次第に遅くなり、自販機より数メートル手前で止まる。

「あら？」

少女はスマホを取り出し、件の魔法少女の写真を表示する。

「へえ、随分と似てるわね」

そこには……

「やっぱ缶コーヒーは微糖だよなあ」

魔法少女とそっくりの顔を持つ少女が、温かいコーヒー缶で手を温めている姿があった。

## 表と裏

「なあおっちゃん、すこしまけてくれない?」

「いいやダメだね。今日ばつかしは1円も値引かねえぞ」

くつ、いつもは優しいおっちゃんが今日はやたら手強い。うーん、いったい何が。

「嬢ちゃんに値引きしてたらロリコン疑惑が出たんだよ。まったくどうしてくれんだ」

「それは果たして俺のせいなのか?」

俺にしか値引きしないおっちゃんのほうが問題な気がする。

しかし困った。今日はぶ厚い豚肉をつかったトンカツと決めていたのに。予算をオーバーするのは俺の信条に反する。

「今日はトンカツだと思ったんだがなあ」

「そりゃいいじゃないか。いい肉で作るトンカツは格別だよなあ」

「そうそう。薄かったらなんだか残念感があるよな」

「ところでだな……」

俺はカードを切り出す。

「同じ豚肉つながりで豚キムチでも作ろうと思うんだよ。いい肉はねえかな」

「それならコレがおすすめだな。値段は張るが美味しいぞ?」

「うーん高すぎるな。でも食べたいなあ。うまい肉が食いてえよ。でも2つも買うと今月分超えちゃうんだな。どうにかならねえかなあ」

「この格ならあるぞ?」

「それじゃあ物足りないんだよな。さて」

仕方ないか。あのカードを切るしかなさそうだ。

「なあおっちゃん、これがわかるか?」

「なっ!そ、それは!」

「ああ、とうとうこいつを使うときが来ちゃったようだ」

俺がポケットから取り出したのは、この商店街共通クーポンである。商店街へビューザーにしか許されないその証は、俺の値引き交渉撤退宣言のようなものだった。

「ちつ、じゃあ3割引きな」

「あいよ。ちなみにな、おっちゃん」

「なんだまだあんのかよ」

俺はポケットから更に別のカードを取り出す。黄色い紙は商店街のスタンプカードそのものである。

「おいおい、嘘だろ」

中身をみたおっちゃんは、額に手を当てる。ふふふ、これが俺の特効コンボ――

「このカードは千円分の商品券となる！そしてこの効果は……他の割引券と併用不可と書かれていない！」

「くっ……お前がまさかここまでやるとはなあ……！」

「いいや、俺の負けみたいなものさ」

「ほら、新しいスタンプカードだぞ」

「あつ待ってくれ」

俺はいそいそとスマホをとりだす。ロックを解除してとあるアプリを起動すれば、先程の黄色い紙と同じマークのついた画面が出てくる。

「スタンプはコレにしてくれ」

「で、電子スタンプだと……！まさか」

「ああ、これで……今回の買い物でもう一回分、千円券が貰える」

「き、貴様あ……！」

「ケツケツケツ、次の買い物が楽しみだなあおっちゃん！じゃあな！」

俺はそそくさとその場を後にする。途中から主婦の目をひいてたから恥ずかしくなったのである。

「やべえ……はっずかしいわ」

肉屋のおっちゃんとは会話のテンポが合うのでたまにこうなる。あとで我に帰って恥ずかしくなるくらいならばやらなければいいだろうという話なのだが、こういざその場にいるとテンションがあがって後の祭りなのである。まあ話してる瞬間は楽しいのでヨシということ。

ちなみに、おっちゃんは後日ロリコン疑惑ははれたものの、少女と



やばいテンションで話す変な人として見られるようになったようである。R・I・P.

※※※※※※※※

「まったく肉屋のおっちゃん以外は気前がよかったな今日は」

買い物袋を両手に携えながら、俺は帰路についていた。

ここの角を右そして次を左に曲がる。そして二回右にまがり道なりをいった後に左。

そうすれば、普段とはまったく逆の路地へと出る。

「んで、こんないたいけな少女を追っかけまわしてどういう了見だ？」

「いたいけな少女は普通、私の尾行には気が付かないと思うけれどね」

曲がり角から出てきたのは、長身の女性だった。いや、どうやらまだ少女の年頃らしいな。制服を着ている。

「学生はまだ学校の時間だと思っただがな」

「残念ながら今日は午前までだったのよ。だから学校にはちゃんと通ってるわ」

嘘をついているようには見えない。しかし、明らかにただの変質者ではなさそうだ。なにより、余裕がありすぎる。

「ここは住宅地だぞ？ 大声を出せば何事かと見る大人はいるだろうし、大通りも近い。なによりここまで誘い込んだのは俺の方だ。大通りにすぐに駆け込める位置に俺はいる。」

「それで、あなた何者？」

「俺はただの主婦さ。こんな見てくれだけどな」

「ほんとね。まるで女子中学生みたい」

「そういうお前は何者なんだ。昼間っから見た目女子中学生を追っかけ回して」

「私ですか？ ただかわいいものが好きな女子中学生ですよ。制服着てるでしょうっ？」

「コスプレの可能性もあるし」

「それってえ私が老けて見えるってことですかあ？」

「冗談だよ」

「しっかしどうしましょうか」

「何がだよ」

「バレないように魔法をつかって気配を消していたんですけれどね。どうしてバレちゃったんでしよう？」

謎の少女の雰囲気がガラリと変わる。おしとやかさが消え、肌がひりつきそうなほどの視線を感じる。

光が少女を包み、霧散する。出てきた姿は、魔法少女というよりは巫女のような格好をした少女だった。

「ジャスティーンと同じ顔をしていながら真反対のような性格で、学校にも通ってなくて、でも魔法には耐性のあるあなたは一体何者？」

「世界が反転する。引きずり込まれると思ったが最後、世界は裏返った。」

## 戦闘中

世界が裏返ったとはいえ、両手にいっぱい戦利品を無造作に放り投げるわけにもいかずに俺はそつと路地の端に置く。割れないでくれよ卵ちゃん。

「まあ待て、そう早まるな」

「攻撃してみればあなたがどちらかわかるわ」

「どちらか？」

どちらって何と何のどちらだよ。俺は根っからの人間だよ。

「簡単よ。バケモノなら私の攻撃でダメージを受けるでしょうし、ただの魔法に敏感な人間ならダメージはないはずよ」

素晴らしいながら少女は右手になにやら青白いモヤを集めていつている。いや、螺〇丸かなにかで？てか確実にあたっちやまずいでしょ。

と、とりあえず変身しておくか……？

「あら、変身もできるのね。ますます興味が出てきたわ」

変身バンクなんて夢を見る間もなく、俺の衣装は普段着からやたら薄いものへと変わる。そんなに暑い季節でもないからもはや露出狂か痴女である。でもほら、こういう話ならば防御力と布面積では関係はないはずだから、きつとこの服にも意味があるかもしれない？

「それじゃあ、試しちゃいましょうか」

少女が手を前に伸ばすと、青い球がふよふよと動き始める。そしてその球体は俺の近くまでまっすぐ来て……

そつと横に避けた俺の側を通り過ぎていった。

「あつ追尾とかじゃないんだ」

後ろの壁へと青い球が着弾する。すると壁は大きな音をたてて崩れ去る。なるほどもしかやこいつが正体不明の破壊型魔法少女か。

となると厄介である。俺にはこの少女をしばらく理由もなければ力もない。正義の魔法少女が来るまで待つしかないか？せめて話がわかる神の使い野郎が来てくれなきゃ困るんだが。

「どうして……」

「ん？」

「どうして避けるのよ……」

「いやそりゃ避けるでしょ」

むしろ避けなきや失礼ってレベルの破壊力である。いやまじであれにあたつたらシャレにならんぞ。正直自分が相手の魔法のダメージをくらうかなんてわかったもんじゃないし。

「避けないでよ！」

こんどは両手で青い球を生成しはじめる少女を見て、俺は背中を見せる。さらば私の戦利品。貴様らはあとで表世界に戻れてから回収するぜ。

「避けるにきまつてんだろ！流石に木っ端微塵になって死ぬのは勘弁だ！」

「あんたが人間側なら問題ないからさっさとあたりなさいよ！」

「俺もよくわかってねえんだよ！」

またふよふよと飛んでくる青い球を、今度は走って逃げて避ける。

「避けるな逃げるな！」

「やだね！」

唐突に始まった逃走劇に、俺は久々の運動だなあなんて考えながら初めてこの体で全力疾走するのだった。

※※※※※※※※

はあ、はあ。若さってしゅごい……。

30分以上走りっぱなしなのにまだ疲れない。むしろ好調な気がするくらいである。これが若さか……ってそんなわけあるか！明らかに一般女子中学生の運動能力超えてるわこの体！

どういうことだ？元から鍛えているというより、魔法少女としての力の一環なのか？もしくは変身したおかげか？とにかく今は助かった。

今は近くの公園の遊具内に隠れているところだ。スマホを開けば、

すぐに向かいますと即返信がきたチャットアプリの画面が見える。あれから10分、まだ助けはこない。

「みつけた」

「つたく、マジかよ」

完全に息を潜めていたというのに、なんでバレたんだ。

「鼻が利く子がいて助かったわ」

そういつて、少女は青い塊を撫でていいる。その塊は犬のような耳と鼻をもつていた。

「いや、ずるくない?」

「これも私の力の一部よ」

「式神召喚とか、いつからここは和風ファンタジーになったんだよ」

急いで距離を取ろうとするが、青い犬に先回りされる。いや優秀だなおい!

「さて、もう今度は逃さないわよ」

青い球が少女の右手に生成される。逃げ道を塞ぐように、俺の周りをワンコロがぐるぐると回っている。万事休すか……。

「はいはい、降参だ。痛い嫌なんだよ」

「あら、潔いのね」

「無駄な苦労はしない主義なんでね」

両手をあげれば、ニヤニヤとしながら少女は近づいてくる。

あれ?待って?その青い球しまつて?

「私は面倒なやりとりはしない主義なの」

ちよつその青い球近づけないで!や、やめろい!

「安心して?さきつちよだけだから」

「どこで覚えた表現か知らんがその言い方は一番まずいやつうう!」

俺の左腕に青い球が触れる。

「いった……くはない……?」

痛みはなかった。痛みはなかったのだが……

「えっ、どういうこと……なの?」

俺の左腕は、まるでもとからそこになかったかのように消え去っていた。

「い、痛くはねえけどなんだこれ……断面とかどうなってんだろ……うわグロツ」

なんか綺麗に腕の断面図とか見えるところ漫画っぽいなんて思ってしまう。俺の中にもちやんと骨とかなんとかあったんだなど。

「なあ、どうしてくれんだこれ」

「そ、そんな……そんなつもりじゃ、私……」

「おい？大丈夫か？おい」

「だって魔法少女ならダメーじゃないはずでしょ、バケモノなら痛みでもがき苦しむはずなのに」

なにやらブツブツといってる少女のほうが深刻そうである。

「おい、ほら、まあなんか痛みないし大丈夫だって」

「私、人の腕を……」

「……ダメだこりゃ」

お手上げである。俺にやあどうしようもないです、これ。神の使いでもなんてもいいから早く来てくれねえかなあ。

そんなことを思っていると、公園の入り口のほうで足音がする。

「おつようやく来てくれたか魔法少女〜！」

そういつて笑顔で振り向いた俺の表情は――

「グルルル」

――バケモノのせいで一気に凍りついたのだった。

さんじゆうろっけい

公園にのっそりと歩いて入ってきたバケモノは、まず俺を見る。そして俺のすぐ側の少女を舐め回すように見たあと、次は俺のなくなった左腕の部分をじつくりと眺める。

バケモノの顔が、器用にもニヤリと気持ちの悪い笑みを浮かべた。まずいまずいまずいって。まて、とにかく落ち着くところからだ。クールになるんだ、俺。敵はたかが一人、それに比べてこっちは二人だ。

「おいそこの謎の少女X、ここは一つ共闘と行こうじゃないか?」

「私のせいで私のせいで私の——」

「あー、うん。俺コレしってる。ダメなやつだ」

俺にできることは、もう何もない。できればこの手段はとつときたかったんだがな。いやしつかし、俺の尊敬する人物もやった手法だ。やるつきやねえ。

「ふふふ、バケモノめ。そう余裕ぶっこいてると死ぬぜ」

俺は立ち上がって右手を握りしめる。バケモノは何言ってるんだこいつ、という顔でこっちを見た。

「俺にはこの技がある。こいつを出さざるをえなくなったのは……残念だが、まあ誇ってもいいぞ」

俺は地面にしゃがみこみ、右手を地面につく。そして前傾姿勢をとり、足を軽く伸ばす。

そう、いわゆるクラウチングスタートの姿勢だ。

「ははは、見ているだけでいいのか。……遅いな!」

俺は全速力でスタートを切る。足のバネを活かしたスタートは、俺を一気にトップスピードまでおしあげてくれる。

「……ガウ?」

そう、俺は、バケモノから全速力で逃亡した。置いていった少女? 知らん! もともとは俺を襲ってきたやつだ。俺より頭のいい人も言つてた! なんとかかかんとか逃げるになんとか! やべえ忘れた!

「あばよバケモノ! あの世で会おう!」

俺は一目散に公園から出ていく。そして近くのたまたま鍵の空いた家に潜り込んで、俺はとりあえず一息をついた。

さあ、作戦開始だ。

※※※※※※※※※※

少女の方へと向きなおったバケモノは、仕方がないと言わんばかりに大きくあくびをする。少女は心ここにあらずで、バケモノに注意を向けていない。

「なんで……人間じゃないのにバケモノでもないなんて、知らない知らない。私は、私は」

「グルルルル」

バケモノには、この魔法少女の心内がわからぬ。しかし、自分の使命はしっかりと認識していた。

襲い、破壊し、そして喰らう

それこそがバケモノの存在意義であり、彼を動かすチカラであった。

バケモノは一步一步と少女へと近づく。少女が動く様子はない。ただブツブツと言葉を話すのみで、動く気配はない。

しめた、とバケモノは口角を上げる。人間を喰うと元気になるのだから、魔法少女を喰えばもっと元気になるのでは、なんて考えが頭をよぎっていた。

バケモノが少女に手を伸ばす。

グチャリ

しかし触れる前に、後頭部になにか変な感触がした。手でなぞってみれば、それは殻と中身である。一般的な、にわたりの、卵が、後頭部に当たっていた。

「どうだ、俺の魂の叫びスペシャルく食べ物への恨みを載せてくのは味は？」



そこには、一人の少女が立っていた。

バケモノには、大好物がまた戻ってきてくれたようにしか見えなかった。

「ほらほら、どうだ？旨いだろう？このメーカーの卵はなあ！高くて俺には手が出せなかつた高級なやつなんだ。裏世界じゃなきやふつわふわのオムライスにしてやってたところなのになあ」

バケモノはその大きな図体を、より早く動くために4足歩行へと進化させる。

「えつちよつ、聞いてないんだけど？」

「オマエウマソウ。オレサマオマエマルカジリ」

「言語機能まで進化しやがった！まずいつて！さすがにそれはやばいつて！」

飛びかかるように走りだしたバケモノから、その荒い口調の少女は逃げる。その立派な逃げ足は、なぜかしらないが進化したバケモノすらも圧倒していた。しかし、一向に反撃の手にはでない。

「反撃する手段が俺にあるわけねえだろ！つたく誰でもいい！早く助けてくれ!!!」

「私のお兄さんに何をしてるんですか？」

それは上からやってきた。音もなく。ただし着地の衝撃でバケモノの右腕を破壊しながら。

「オマエ、ナニモノ」

「はあ、喋るバケモノですか。神の使いさんも不在ですし面倒ですね。そういういながら、上から落ちてきた魔法少女は拳を構える。

「とりあえず、なぐります。少し漏らしかけてるお兄さんの分も」

「いや、それは言わんで良い」

「冗談のつもりだったんですが……」

「ならなおさら言わんでいい！」

「帰ったらお風呂が先ですね……」

顔を真っ赤にしながら声を荒げる少女と、反転したかのような、で

も顔のパーツ自体は同じのような少女がその場にはいた。

バケモノは混乱した。

「グルルア！」

「うるさいですね」

魔法少女の渾身グーパンチ。バケモノの左半身は吹き飛んだ。

「あれ、意外と脆い……?」

敵を排除。ワンショットキル。

「うーん、よくわからないけどもう一発うっておきましょう」

バケモノは消し飛んだ。

「終わりました。大丈夫ですか、お兄さん？」

「た、助かった……」

「間に合ったようだなによりです」

正義の魔法少女はにっこりと笑う。

「それで、お兄さんの腕をそんなふうにしたのはどこの誰ですか？」

あっコレやべえかも、という顔をしながら、逃げ回っていた方の少女はタラリと汗を流した。

まずはお茶でも一杯

「ほらほら、見たとおりだよ？バケモノに襲われてさあ。いやまじで来てくれて助かったよ」

「お兄さんの呼ぶ声が聞こえたので早めに来ました。すこし腕を見てもっ…」

「おっああグロいけど大丈夫か？」

「慣れてますので」

少女は俺の左腕のち切れた部分を撫でる。神経を直接なぞられているかのようなゾワゾワとした感覚を我慢しながら、ちらりと少女の姿を見る。いつもどおりの変身後の姿だったが、髪の毛が荒れてる。ずいぶんと急いで来たのだろう。

「あーこれはダメですね」

「えっダメ？」

「私には治せません。完全に消失してるので回復魔法も無駄ですね」

「マジかー」

隻腕つていろいろと不便そうなんだから嫌なんだが……。

「ちなみに神の使いさんが来れば治せます」

「そっかー」

あいつには今日、一切れ多くトンカツを入れてやろう。

「それにしても……綺麗な断面ですね。まるで事象ごと消し去られたような感じですよ」

「だよな。でも全然痛くないんだぜ？」

「おかしいですね。裏の世界でも痛覚はなくならないはずなんです」

「おまえさんでもわからないか。じゃあ本格的に神の使い野郎待ちだな……」

「それで」

魔法少女は笑みを浮かべる。

「誰にやられたんですか？」

「バケモノに食いちぎられたんだよ」

「それにしても断面が綺麗ですね。しかも、痛覚がないのもおかしいです」

あれ、これってもしかして魔法少女結構怒ってる？やばい？

「お願いします、お兄さん。早く認めてください。その魔法少女らしき巫女服さんがやったって」

「おいおい、そんなこと言っていないだろ？」

「はい。実際に私がその場を見たわけでもないですし。だからお願いします。被害者であるお兄さんの口から言ってください」

「言ったらどうするつもりだ？」

「そうですね……残念ながら表と裏の世界を行き来できる魔法少女に對しては、私の拳は通らないので……」

そうなのか。この裏の世界では魔法少女どうしのフレンドリーファイアは禁じられているらしい。よかつた血なまぐさい少女たちの殴り合いなんてなかったんや。

「……そうですね。昔読んだ本にたしか拷問術が乗ってました。まあ聞き出したことではないのでやるだけですが」

「あの……正義の魔法少女さん……？」

「私側であるお兄さんを害する存在は悪ですから」

その理論ってつまり、悪に對してする行為はすべて正義の行為であるということか？少し不安な考え方だな。

「とりあえず、言ってください。あの謎の魔法少女にやられたと」

「なるほど……とりあえず事情はわかった」

ならば俺が言うべき言葉はひとつである。

「俺はバケモノにやられた、以上。これ以上同じことを聞くならばもれなく本日のトンカツが一切消えます」

「……、まあいいでしょう。そういうことにしておきます」

魔法少女はジト目でこつちを睨んでくる。一部層には需要があるかもしれないけど俺の趣味じゃないからやめなさい。

「おいおい、どこに行くんだ？」

「危害を加える気はもうありませんよ」

コツコツと音を立てながら謎の魔法少女へと向かう正義の魔法少

女は、まあこう頼もしくもあるんだが、拳を握りしめていてコワイのである。言ったことは守るはずだから実際にその拳は使わないにしても、バケモノを吹き飛ばす拳である。どうしてこんな物理特化なんだうちの正義の魔法少女は。

「あなた、どこの所属ですか？」

「……、ジャスティーヌ様？」

「ええ、私はジャスティーヌで間違いありませんが」

謎の魔法少女は俺と正義の魔法少女を交互に見る。そして全てを悟ったかのように顔から表情が抜け落ち、涙を流しながら手を組む。

「ああ、私は今から殺されるのですね。ジャスティーヌ様に殺されるなら本望です」

ナニヲイツテルンダコイツハ。ていうか知り合いかよ正義の魔法少女さんよお！

「いや、私は知らないです」

目を丸くしながらこっちを見てくる魔法少女は、これまた複雑なことをいい始めた。

「いや、ちよつと待て。どういうことだ？何があってこうなったんだ？」

混乱してきた。

「とりあえず、あなたはどこの所属ですか」

「所属……？」

謎の魔法少女は首をかしげている。

「担当地域とかですよ」

「担当……？」

「もしかして説明をうけてないんですか？」

「説明……？」

魔法少女どうして話が噛み合っていない気がする。大丈夫かコレ。

「……お兄さん、思った以上に話が複雑になってきそうです」

「んー、じゃあ仕方ないな。先にお茶にしよう」

「ちなみにお兄さんがこのまま帰っちゃうと腕が戻らなくなります」

「ダメじゃん」

どうせなら家で茶でも飲みながらと思ったが……、腕が治らないのは困る。

「あつ変身も解かないくださいね？念の為に」

「りようかい。いやあ面倒だな」

あつやばい。切断面を触るのがクセになりそう。こうゾワゾワつとくる感じが。こうかさぶたとかイジつちやうときあるよね。痛いってわかってるのにこうついやってしまうやつ。

「仕方ないし、自販機でなにか買ってくるわ。希望はあるか？」

「いえ特には」

「その謎の少女Xさんは」

「わ、私……？別にいらな——」

「了解、キュウリソーダな」

「りよ、緑茶でお願いします」

飲み物まで和風なのかい。キャラブレしねえな。

何も考えずに自販機まで一人歩いて気づく。あの場を二人きりにしてしまつたと。

そんなことより

「あれ、桃木さん？」

「あつ先生。お手洗いに行つてきます」

「はい」

私は急ぎ足でトイレの方へと向かう。先生には悪いが、今日はこのまま戻つてこないかもしれないのでちやつかり荷物も持ってきた。

「お兄さん……。急がなきゃ」

手に握られたスマホには、お兄さんからのSOSが届いていた。まだ状況はわからないけれど、とにかく急ぐためにトイレに駆け込んだまま、世界を反転させる。

「変身……」

神の使いさん曰く、あまり緊急時以外に変身するのはよくないらしい。この力はバケモノを倒す力であつて、私利私欲のために使うのは悪だからだ。

だけど、お兄さんがピンチというなら、緊急事態だろう。あとで説明すれば、神の使いさんも納得してくれるだろう。

魔法少女の姿になれば、走るスピードも上がる。表の世界ではもやしつ子な私でも、裏の世界ならば陸上競技世界覇者にすらなれる。それが私の理想の自分。何にも、誰にも負けない体。この力があるからこそ、私は正義の魔法少女を堂々と名乗れる。

「……っ！バケモノの気配!？」

先を急いでるときに限つて、嫌に強い気配を感じる。仕方がない……か。

私は街で一番高い建物を思い浮かべる。目を閉じ、開けば、次の瞬間には思い浮かべた光景が目の前に広がつていた。瞬間移動できる魔法は、変身解除したあとにひどく疲れるのであまり使いたくはない。

「よし……」

魔法は願いを叶える万能の力だ。だから、自分の願いが叶うと強く信じるのが大事である。でも、空を飛ぶときはいつも不安を心に抱

いてしまう私は弱い。

「でもやるしかない」

ビルの屋上から、街を見渡す。裏の世界は日中の表に比べて静かだ。だが一部だけ、やたら騒がしい場所がある。

「反撃する手段が俺にあるわけねえだろ！ ったく誰でもいい！ 早く助けてくれ!!!」

「見つけた」

私は屋上から、飛び降りた。

||\*||\*||\*||\*||

なんやかんやあつてバケモノを倒した私は、これまたなんやかんやあつて自販機に向かうお兄さんを見送ることになった。

「それで……」

「ひっ」

「いや、そんなに怯えないでくださいよ」

私より少し年上らしき女性は、その顔を真っ青にしていた。よくわからないけれど、この巫女服の女性は、魔法を使えるらしい。そして状況から察するに、お兄さんの腕をやったのもこの女性だろう。

「とりあえず落ち着いてください。神の使いさんが来るまではとりあえず何もしませんから」

女性はコクコクと頷いている。

「一応、魔法少女なんですよね」

「え、ええ……そう聞いているわ」

「聞いている……？ つまりはそっちにも神の使いさんみたいな存在が？」

「あなたにもいるの？」

明らかにおかしい。しかし嘘をついているようにも見えない。

もし本当に相手も神の使いならば、こちらの方の神の使いさんが把



握しているはずだ。

「それにしても……あなたのその魔法はいったい何ですか」

「簡単に言うなら……破壊ね」

「破壊ですか？」

「ええ。存在の破壊。存在の否定。そういつた魔法」

「こちらの神の使いさんが言っていた『破壊型』というのはあなたが間違いでなかったようである。

「ジャスティーナ様の魔法のように美しくはないですけど」

「……そのジャスティーナ様っていうの辞めてもらえませんか？それにあなた年上ですよね？」

「いえ、同い年ですわ。しかしジャスティーナ様というのが嫌なら何とお呼びすれば？」

「同い年……？にしては大人びすぎている。中学生らしさをまったく感じさせないのは果たして魔法少女に変身しているからか、それとも元からののか。」

「桃木でいいです」

「わかりました、桃木さん」

「容姿だけでも年上な人からの敬語がはずれないのは、なんだかムズムズする。」

「桃木さんだって敬語のままでしょう？」

「これは元からだ。誰に対しても敬語で接しているだけだ。」

「桃木さんが敬語をやめるのでしたら、私もやめます」

「……我慢します」

「仕方ないから現状で妥協しよう。私がムズムズする他は被害ないわけだし。様づけが外れただけでマシと思うことにした。」

「ほら、お茶買ってきたぞ」

「お兄さんが帰ってきた。右手にはよくみるお茶のペットボトルが三本抱えている。」

「そーいや大丈夫だったか。うっかり忘れて二人きりにしちゃったが」

「特になにもしてませんよ」

お兄さんがそう耳打ちしてきたので、私は少し呆れながら返す。少しは信頼してほしいものだ。私は一度言ったことは曲げない。彼女が誰であれ、今のところは危害を加える気はない。

「そりやよかった。ったく、今日は早めに帰りたいんだがなあ」

「今日もじゃないですか？」

「まあな。基本的に引きこもりたい性分なんでね」

素晴らしいながらもお兄さんは、ほぼ毎日のように買い物に出かけてくれている。お兄さんには感謝しかない。

「さてと、一つ聞かせてくれ。おまえさん、ストーカー？」

「えっ私？」

「だってこいつの名前を知ってるみたいだったし、容姿も把握してるようだったから」

「いやいや！違うわよ」

「違うのか、ほんとか？」

お兄さんの問いに、謎の魔法少女はコクコクと首を縦にふる。「なるほど……」

お兄さんは右手で顎を触りながら考える素振りを見せる。

「……ならばヨシ！以上！」

「えっ」

「えっ」

魔法少女と私は声が被る。

「お兄さん？良いんですかそれで」

「いいさ。どうせ悪意なんてあつてなかったようなもんだろうし。別に待ってりや治るんだろ？じゃあ俺は別にいいわ」

お兄さんは私が左腕を見たことに気づいたようで、ヘラヘラと笑ってそう言った。

「べつに」正義の魔法少女が見逃さないって言うんだったらなんともしろよ。いや、俺は許すんだから俺のほうが悪なのかな？まあどっちが善か悪かなんてどうでもいい」

お兄さんは一度言葉を区切る。

「そんなことより、今日の晩飯が遅くなることのほうが問題だ。今日の買い物は激戦だったから疲れてるんだ、早く寝たいんだよ俺は」  
いつものように、自分の都合を優先するように振る舞う。お兄さんはやはり、こんなときでもお兄さんだった。

これでいいのさ

「そうそう、汚れにはアルカリ性と酸性があっただな——」  
俺たちがお茶を飲みながら、雑談に励んでいる時だった。

【ジャスティーンヌ！その子から離れるんだ！】

「神の使いさん!？」

神の使いがとんでもないスピードで飛んできたかと思うと、俺たちと少女との間に割って入ってきた。

「おお、おつかれ。茶でも飲むか？俺の飲みかけだけど」

【遠慮しておくよ。それより——その腕はどうしたんだい？】

「ん？いや、これはバケモノにだな」

【嘘だね。この子からやられたんだろう】

有無を言わさないように、神の使いは断定してきた。

「あの、神の使いさん？いったいなにが」

【この子は……君たちと関わっちゃいけない側の存在なんだ】

「でも魔法少女ですよ？あちらにも神の使いさんがいると聞きました」

【その件に関しては……後で説明するよ】

神の使いの目線で、謎の少女はゆっくりと後ろに下がる。敵意は見えないあたり、神の使い野郎が言うようなヤバい存在には見えない。

【説明する必要はありません】

突然、謎の少女のすぐ横の空間が歪む。そこからのつそりと出てきたのは、これまた神の使いと似たぬいぐるみみたいな奴だった。

【はじめまして、正義の魔法少女ジャスティーンヌ】

しかし魔法少女はキツと睨みつけるだけである。何かを感じ取っているのかもしれない。俺？何もわからん。

【そんなに敵意を剥き出しにしないでくれませんか？】

「あなた一体何者ですか？神の使いさんと同じようで、でもバケモノの気配も混じっています」

【さすがはバケモノ退治のプロですね。彼女のように誤魔化しは効きませんか】

神の使いもどきの体が、まるで粘土のようにグネグネと歪む。そして泡立ちながらその体積を増やしていき、まるでバケモノのような姿に――

【ジャスティヌ、Go】

「はい」

【ぐ、ぐわー！！！！】

泡立った粘土は、正義の魔法少女による拳で粉々に粉碎された。

【何てやつ……！形態変化中に攻撃するなんて！それでも正義の魔法少女か！！】

【ふふふ、君にはわからないかもしれないが……僕たちが、僕たちこそが正義なのさ】

【卑怯だ！！】

「それは君が言えることかい？」

グネグネとまだ蠢いている粘土を、神の使い野郎は人間形態になって踏みつける。

「十分な説明もなしに人を利用した挙句に、僕らの身内にまで傷つけたんだ。自分でなく他人に手を下させる君のほうが卑怯じゃないか」

【私は悪ですよ。卑怯な手を使ってナンボってものです】

うん、わかる。やっぱ姑息さつてあるよな悪役って。

「昔の君はもっと素直だったのに」

【知った風な口をきかないでください！】

「えっちよつと待て待て」

「なんだい？今忙しいんだけど」

「お前ら知り合いなの？」

「まあそうだね。この際だから説明しよう」

神の使いはようやく、粘土から足を離した。

「こいつは僕の同期。元、神の使いさ。数年前から行方をくらましていたけれど、まさかバケモノの力と融合していたなんてね」

「じゃあつまり……俺も、魔法少女も、その少女も、お前らの因縁に巻き込まれたってことか？」

「まあ、そうだね」

「ちなみにどんな因縁があるんだ」

「こいつは……こいつは私のキャリアを傷つけた！あなたがいなければ私は今頃――」

「あれは君が勝手に自爆しただけだろう？僕のせいにはしないでくれよ」

ちよつ待てや。つまりはくだらん2人間のキャリア競争に俺たちは巻き込まれたってことか？俺の腕はそんなどうでもいいことのために吹き飛んだってか

「ふふふ、許せねえや」

「……お兄さん？」

「お前らに取っっちゃ大事な問題かもだが、それで他人を巻き込んでい理由にはなんねえよなあ……？」

俺はようやく形の整ってきた粘土に指を指す。

「お前は絶対に許さねえ」

少しカツコつけてみた俺には、魔法少女からのよくわからん眼差しと神の使い野郎からの困惑の眼差しが突き刺さっていた。

「ちよつと待ってくださいお兄さん。神の使いさん、バケモノの形ってことはつまり悪ですよね？」

「そうだね。バケモノと融合した時点であいつは悪だ。だからジャスティーヌ、あいつをやっちゃってくれ」

「いや待て待て」

俺はそのまま殴り殺してしまいそうな2人を止める。

「俺にいい案がある」

※※※※※※※※

帰りに肉屋でさらに一枚の肉をゲットした俺は、料理に取り掛かる。揚げ物に必要なのは事前準備だ。揚げ物は揚げたてに限る。そんな誰でもわかるようなことを実際に一人でやり遂げるのは難しい。

しかし、そう！しかし今日の俺には助っ人がいる。

「よ、よろしくお願ひしますわ」

謎の少女X。俺より幾分か成長の早い彼女が、俺の隣でエプロンを身につけて立っていた。

さてと、始めますか。俺は油の中に箸先をつける。こうすると泡の出方で温度がわかるのだ。

「よし、じゃあ始めますか」

飛び跳ねて火傷しては困るので俺はまくっていた両袖を下ろす。ちなみに左腕は表の世界に帰ってくるときに何事もなかったかのようには治った。神の使いが何かしたらしいが俺にはよくわからないのでスルー。

「そ、その……」

「ん？なんだ」

手伝ってくれてる少女がビクビクと震えてるので、俺はトンカツを揚げる手を止めずに聞く。

「すみません、でしたわ。まさかあんなことになるなんて」

「何言ってるんだよ。お前は何もしてないだろ？それともウチの魔法少女からパンチ喰らいたいのか？」

「いや、魔法少女どうしは危害を加えられないわ」

「……ま、まあ俺は魔法少女じゃないからな！」

ちなみに、この少女には俺の自身について話している。俺っ子ぶってる痛いやつと思われるのも嫌なんでね。

「ほら、一枚目ができるぞ皿をとってくれ」

ふむ、なかなかの出来なきもする。一枚目が冷めないうちに仕上げたいので、速攻で二枚目に取り掛かる。料理にはスピードが不可欠だ。

「本当にこれでよかったのかしら」

「ん？何がだ？」

俺は片手に最後の皿を、そしてもう片方の手にエサ皿を持って食卓へと運ぶ。

「いえ、当の被害者がこれでいいのなら、いいのかしら」

不思議な言い方をするなあと思いつつながら、俺はエサをねだる猫――

元、神の使い兼バケモノ——を撫でてあげた。

「くくく、いずれはこの状況を打破してみせる……そのためにはとにかく生き続けねば——ああああ撫でられるの気もっちっいいいっ」

心の声が俺にだけ聞こえてるってことはしばらく黙っていきましょうと思う。



## 俺の朝

朝日が差し込んできて俺は目を覚ます。カーテンをわざと開けて寝ているので、朝日で自然に目が覚めるというちよつとしたテクニクだ。今の季節の日の出の時間はわりとちよつどいいので、ここ最近はずつとこれで起きています。

「……またか」

起き上がろうとすると、腰に回されている腕が邪魔をする。

寒くなってきたからか、ここ数日よく抱きつかれながら寝てる。俺は別に寝付けば数時間ながあつても起きない人なので構わないのだが、こようぬいぐるみやだきまくらの扱いを受けるのはいささか不満である。

ちなみにベッドはマットレスから掛け布団にいたるまで凝りに凝りまくったカスタム仕様である。寝心地は最高級に良い。寝具には金をかけるとばつちやが言つてたからな。

「う……んん……」

つとやべえ。もぞもぞとしてたら起こしちまいそうだ。俺はそつと腰に回つてる手を振りほどいて、布団をかけなおす。うーんと唸つてるのは急に寒く感じたのか。

「まだ早いんだからな寝てな」

ベッドから抜け出した俺はぐいつと背伸びをする。これをしてようやく体が起きる。

寝室の扉をそつと閉じてから台所に向かう。

リビングへと入れば、すでに一人？一匹？が新聞を広げていた。

「やおおはよう」

「常々思つてたんだが……お前いつ寝てるんだ？」

「僕は特に睡眠を必要としないからね。基本的にはずつと起きたままなのさ」

「へえ。不便な体だな」

「不便？そう言われるのは初めてだよ」

「そうか？まあいいや。コーヒー淹れるけどいるか？」

【ではありがたくださいよ】

冷凍庫を開けば、密閉容器に入ったコーヒー豆が出てくる。こうしてると風味が長持ちすると聞いて試しているが、正直素人の舌じゃあよくわからない。

【いい香りだ】

分かる人にはわかるらしい。俺にはさっぱりだ。この体になってから鼻詰まりとかしてないから匂いがわからないわけじゃないと思うんだがなあ……。

コーヒーを一杯飲んでから、俺の朝は始まる。むしろコーヒーを飲まないと始めないタイプとも言う。

「さてと……さすがにそろそろ取り掛かるか」

飲み終わったコーヒーカップを回収し、台所へと向かう。エプロンをつければ、俺の戦闘準備が完了する。弁当箱を2つ用意し、下の段にご飯をつめる。そう2つである。

朝は忙しい。弁当の用意もしながら朝ごはんも用意しなきゃいけないからだ。俺の味噌汁はこだわりの味。毎日しっかりと作りこみ汁をとる。どうしてそこまで凝るか？趣味だ。

「ふう。あとは……冷食でもいれとくか」

冷食は主婦の味方である。まあ俺は主婦ではないけれど。弁当のおかずとして完成されているのが多くあり、種類も豊富だ。そしてなにより、おいしい。確定された美味しさってのは弁当を作る側も食べる側もうれしいもんだ。

にゃーん

おっとこいつを忘れちゃいけない。先日の1件以来住んでいるも一人……いや一匹の家族だ。猫用の餌と水を補充してやれば、ガツと食べ始める。猫になってからはそんな態度すらもかわいく見えるのでずい。

【くそっ地べたの皿で食わせるなんて……！絶対に許しません、覚えておくことです！】

中身は相変わらずだけどな。

「お兄さん、おはようございます」

「ああ、おはよう」

大体の準備ができたところに、魔法少女は起きてくる。最近はぐっすりと眠れているようで何よりだ。空調による温度管理や照度管理、寝る前の風呂や食事の時間まで俺が握ってるようなもんだから、あたりまえとも言えるんだがな。

「これ、作つといたからよろしくな」

「はい、わかりました」

俺は食卓にランチバッグを2つ置く。一つはいつものように魔法少女なので、もうひとつは先日少女Xのものだ。なぜ俺が作っているかと言えば、特に理由はない。正直、一人分でも二人分でもあまり手間が変わらなかつたり、むしろ楽になったりするものもある。偶然にも魔法少女の通学路とかぶっていたため、俺が率先して引き受けたのだ。

ちなみにこれまた偶然なのか必然なのか、少女Xも両親とは別居中らしい。もはやここまでくると、魔法少女の必要条件になっているよ  
うな気もしてくる。

「ああそれと」

「はい、なんででしょう」

「今日の晩飯はすき焼きにしようと思うんだが、どうだろうか」

「わかりました、楽しみです」

【僕も楽しみだ。早めに帰ってくるよ】

「ああ、任せとけ」

俺の家直伝の超絶美味なすき焼きをお見舞いしてやろうじゃないか。

## 私の夜

お兄さん特製のトンカツを食べた夜、私は今日もお兄さんと一緒にベッドに寝ていた。私の寝具が酷すぎるからと、新しく買ってきた自分用のものを試せと言われたのである。

ならばお兄さんはどうするのかと言えば、ソファで寝るとか言うので無理やり一緒にベッドで寝てもらおうことにした。強く頼み込めばお兄さんは断らないので、今回もそれを使った。

お兄さんが同じ布団にしていると、寝心地が良い。腕を腰に回せばすっぽりと収まってしまうので、人間大の湯たんぽのようで冷えてきた最近の夜には快適なのだ。

「なあ、一つ聞いていいか？」

「なんででしょうか」

「俺って中身は一応は成人男性なわけよ」

「はい、そうですね」

「そんなやつと一緒にベッドで寝てこうなんか嫌悪感とかないの？」

「いえ、特には」

変なことを聞く。それに中身はどうであれ、今は私と同じ中学生くらいの女子である。男性特有の匂いなどもないし、気にすることなんてない。

「いや、そうじゃなくてだな……。まあいいや、おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

お兄さんは私に背中を向ける。そつと腰に手をまわせば、一度びくつとしたあと、すぐに規則的な呼吸に落ち着いた。

どうやら、眠ったようだ。

寝ているときのお兄さんは不用心だ。基本的には何をしても起きることはない。

だからギュツと腰に回した手に力をいれて、背中に顔を埋めても、お兄さんは気が付かない。

なんとなく思い出したのは、小さい頃にお気に入りだったうさぎのぬいぐるみだ。確か小学生低学年までは毎日一緒に寝ていた。たし

か汚くなって……確か捨てたんだっけ。いや、もしかしたらタンヌの中にしまっているかもしれない。

「まったく……私のほうが不安になりますよ」

そつとお兄さんの左腕に手を添わせる。お兄さんは優しいし、自分に対してはわりと適当な部分がある。今回だって、勘違いのようなもので害されたというのに、治るとわかった瞬間にすぐに敵を許した。私なら絶対に敵を許さないだろう。やはり私とお兄さんは違うのかもしれない。

許すというのは良いことのように思うかもしれない。しかし、それは正義ではない。正義とは、この世を害する悪を許してはいけないのだ。

「絶対に私の手の届くところにいてくださいね。じゃないと……私はお兄さんを救えない」

普通の物語なら、きっと私のような立ち位置の少女が主人公になるのであろう。仲間や敵との交流を通して人間的に強くなっていく。そんなサクセスストーリーだって書ける。

だけど、それじゃ大事なものは守れない。

私は、私を守りたい。私の体を、精神を、そして正義を、守りたい。

「寝れないのか？」

「……っ!?!お兄さん起きてたんですか？」

不覚だ。まさか起きているお兄さんに抱きついていたなんて。

「まあ、たぬきの寝入りは得意分野だからな」

「お兄さん……」

お兄さんはこちらに振り向く。顔と顔とが向かい合い、お兄さんの吐息を感じる。

「まあ俺をどうしようが、元はお前の体なわけだし、好きにするといいよ。俺は昼にでも寝れるからな」

「いえ、何もしませんよ。それに今日は慣れない魔法を使って疲れたのですぐに眠れそうです」

「ならいいや、おやすみ」

そういいながらお兄さんは、こちらを向いたまま寝息を立て始め

た。さすがの私も、目の前に顔があつて眠れる気はしなかった。

「……もう」

私はお兄さんの胸あたりに顔をうずめて、腰に抱きつく手に力を入れた。

しかし、その力はすぐに弱まった。その先を私は覚えていない。なぜなら、いつもとは違い、私もすぐに寝入ってしまったからだ。

最近頑張りすぎてね？

「うん、ダメだな」

「何がですか？」

「いや、俺の話だ」

ここ数日を振り返って見れば、多少頑張りすぎた気がする。毎日のように家事をしてるし、だからといって趣味を疎かにしているわけじゃない。ちなみに今はオンライン対戦ゲームに熱が入ってる。

「というわけで」

「どういうわけですか」

「いいんだよ。とにかく……俺は明日は何もしない！」

「……はい？」

「明日は俺の休日にする」

「休日ってお兄さん仕事も学校もないじゃないですか」

「いや、それは確かに事実なんだが言い方考えよ？何気ない言葉で傷つく人だっているんだぜ？」

「そうなんですか？よくわかりませんが……すみません」

うん、ちよつとダメージを受けたがちゃんと謝ってくれたのでよしとする。いやまあ俺はこうやって仕事も学校もないのが仕事みたいなどころあるからさ？いいんだけどさ？なんかだか成人男性のメンタルの方にくるものがあつたんだよね。

「というわけで明日は朝起きないし昼も購買かなにかで買ってくれ」

「わかりました。夜はどうするんですか？」

「罪を犯す」

「罪……ですか？」

やべ、正義センサーに引つかかったか？

「いや、そんなセンサーないですけど」

「ナチュラルに心読まないでくれる？」

「顔にわかりやすく書いてあつたので」

新しい体だから表情筋の制御できてねえのかな。そんなに表に感情が出るタイプじゃなかったんだけどなあ。まだまだ慣れないこと

だらけだ。

「お兄さんは明日、家事などをせずに何をするんですか？」

「何もしない」

「えっ？」

「だから何もしない。好きな時間に起きて、適当に飯だけをすませて、スマホでも見ながらごろごろしながら過ごす」

「な、なるほど……？」

「晩飯はもう考えてある。風呂も正直一日くらい洗わなくても水でさつと流せばいい。洗濯だってこの量ならなんとかなる。アイロンは……さすがにやんねえとかな」

「あっじやあ私がやります」

「なっ……できるのか!？」

「お兄さんが来るまでずっと自分でしてたわけですが」

「てつきりクリーニング店とかそういうサービ스에頼んでるのかと」

魔法少女はそつと目をそらした。

「……ないです」

「えっなんだって？」

「たまにしか頼んでないです」

「ま、いいんじゃないやね？毎晩アイロンかけるの大変だし」

「でもお兄さんは毎晩私の分まで」

「そりや俺にとっちゃそれが仕事みたいなもんだからな、気にすんな」

「はい。それじゃあ……ごちそうさまでした」

魔法少女は手を合わせてそう言うと、食器を片付け始める。ちゃんとして流しに置いてくれるので、洗い物が楽だ。魔法少女まじ良い子。

「それじゃあお兄さん……あの」

「ああ、風呂入るか」

ここ最近はずつかり湯船に浸かるのが習慣になってしまった。

二人と一匹なら水道代はどっこいどっこいかと最初は思っていたのだが、髪を洗うときにシャワーを使わないと魔法少女に怒られてしまうので毎日が予算オーバーである。残り湯を洗い物なり洗濯なりに使ってはいるものの、なんだかこう貧乏性な俺がちくちくと刺して



くるのだ。

まあ貧乏性俺くんより魔法少女ちゃんのほうが影響力が大きいのは仕方がないね。さすがの俺も、あんな破壊力のある拳の持ち主の機嫌は伺うのである。それに今現在は家主でもあるわけだからな。

「着替えとつてきな。俺はもう持つてきてるから」

「はい……」

ちようど音楽が鳴り、電子音声でお風呂がわきましたとアナウンスされる。ナイスタイミングだ。

というかふる自動つて便利すぎるだろ……。俺氏驚愕なんだが。実家はおろか、前の体で住んでいたマンションにもなかったぞ。まあ駅から近いってだけの格安マンションで選んだから設備は仕方ないってのもあるかもしれんがな。

「先に入っとくな」

「はい、すぐ行きますね」

今日はなんの入浴剤をいれようかななんて考えながら、俺は洗いたてのタオルを手に風呂場へと向かった。

これが罪の味……

「ん……ふわああ、朝か……」

のっそりと起き上がって目をこする。しばらくパチパチとまばたきをして、スマホを確認する。

「朝って言うよりは昼な時間帯だな」

久しぶりにここまでぐっすりと長く寝た気がする。別にいつも睡眠時間が短いとかそういうことは一切ないのだが、やっぱりこう目覚ましとかで起きるのではなく自然と目が覚めるまで寝るとなると満足感が段違いなのである。

「さてと、何しますかね」

魔法少女はちゃんと出かけたようで、朝ごはん用にと買っておいしたパンが一切れなくなっていた。

俺はとりあえずお湯を沸かして、インスタントのポタージュを飲む。やばい、体がポカポカしてなんだかまた寝れそうだ。

いや、休むって決めたし寝てもいいな。

「よし、寝よう」

俺はもう一度布団にもぐりこみ、目を閉じる。そこからの日差しでの相乗効果もあって、次第に思考がとろけてくる。

「あゝここがホームだ」

やはりベッドの上が一番落ち着く。適当にWebサイトを眺めていれば、いつの間にか二度目の眠りにについていた。

次に目が覚めたのは、夕方だった。小腹は空いているものの、もう少しすれば魔法少女が帰ってくるであろう時間帯。晩飯に備えて我慢しつつ、ときとうにテレビをつける。

「くっそ……なんでこういう時間帯に限って飯テロ番組なんだよ……」

まだゴールデンタイム手前の時間帯。番組表を見ても面白そうな

番組はない。仕方なくテレビを消し、ソファで寝転がりながらスマホをいじる。

しばらく電子書籍版の漫画なんかをめくっていると、チャットアプリに通知がくる。魔法少女からの、もうすぐ帰るとの連絡だ。んじやそろそろ頼むか……。

俺はスマホを操作し、奥底に眠らせていたアプリを開く。てきとうに目についたものを自分の胃袋と相談しながらポチポチと押し、住所と名前を打ち込む。

ふふふ、これは罪の味がするぜえ。

※※※※※※※※※※

「ただいまです。……お兄さんこれは？」

「グッドタイミングだ」

俺は食卓で組んだ手の上に顎を乗せながら、グラサン越しに少女を見つめる。ふふふ、やはりこの罪を知らなかったようだ。

「お兄さん？」

「……だ」

「はい……？」

「これはデリバリーという文化だ」

俺は食卓に並んでいる箱たちを開ける。そこには、先程のアプリで注文したピザたちが並んでいる。サイドメニューのチキンやポテト、サラダなんかもある。

「でもお兄さん、ピザとか作ってましたよね」

「確かに、ピザもどきは作った」

「案外オーブントースターで作れるもんだからな。だがそうじゃない。い。」

「ちゃんとしたピザを、自宅で、そして自分はなんの労力も支払わずに食べる。これが罪の味だ」

「罪……ですか。やはりお兄さんは変わった人ですね」

「ばつきやろう。他人の飯を食うのが俺が一番好きなんだよ」

「は、はあ。そうなんですか」

「それにデリバリーピザは店としてやってる以上、ある程度の味は保証されてるからな。なによりピザってのはカロリーの暴力だ。カロリーは美味しい、人間はそう感じるようにできちまつてるのさ……」

「お兄さん、よくその理論で太りませんね……」

「おっと今日に限ってはそのワードは禁句だぞ？」

やめろ。デリバリーピザを食べるときはこうなんというか救われなくてなきやダメなんだよ。だからそのワードで現実に戻さないでくれ。

「そういえば体重計、使いました？」

「やめだやめ！せっかくのピザが冷めちゃうだろ、早く食べよう！」

けっして体重を気にするなんてことをしていた日々を思い出したわけではない。断じて、ない。

||\*\*||\*\*||\*\*||

ふう、と息を吐いて手を温める。まだ冬服を出すには早いけれど、バイトの都合上バイクにのる私には手袋は必須だった。しかしその手袋は本日お休みしており、今はきつと部屋の中でびしょ濡れのまま干されている。

「えつと……○○番地の桃木……ここか」

住宅地はこの時間だからか、美味しそうな匂いがどの家庭からも漂ってくる。しかし私はバイト中。この世知辛い世の中では間食する暇すらない。

ピンポーン

インターホンを鳴らせば、はいいと可愛らしい声が聞こえる。

「ご注文ありがとうございます。○?ピザのお届けに参りました」

『ちよつとまってな〜』

しばらく待っていれば、バタバタと足音が止み、扉が開く。

「桃木さんのお宅でお間違いないでしょうか？」

「はい」

「お会計が〇〇円になります」

「じゃあ一万円から」

財布からピツと出す福沢さんは、なんとなく受取人の少女には似つかわしくない気がした。

「こちらお釣りでございます。それでは商品ですね」

保温バッグからとりだせば、香ばしいピザの香りが鼻腔をくすぐる。

「ありがとう」

「ご利用ありがとうございました。またのご利用をお待ちしております」

少女相手でも客は客。マニュアル通りではあるものの私はしっかりと礼をする。

「あっお姉さん少し待ってて」

「……はい？」

少女はあわててパタパタと家の中に入っていくと、少しして戻ってくる。

「はい、バイクだと寒いだろう？さっき開けたばつかだからまだしばらくは持つと思うから」

そういつて手渡されたのは、カイロだった。まだじんわりと熱くなってきた頃合いで、かじかみそうだった手に温かさが染み渡る。

「んじゃ、ありがとな」

そういつて少女は家に戻っていつてしまった

「桃木……さんね」

なんとなく救われたような気がして、私の頭の中にその名字がとどまったまま、店への帰路についた。

## 唐揚げ食べたい

「あの……困るんだが」

俺は今、二人組の男に路地裏に連れ込まれていた。両手を掴まれて、道も塞がれている。

「いいじゃんいいじゃん」

「俺たち暇してんだよ」

くそつ、急いでるからって人通りの少ない道に入ったのは失敗だった。いわゆるナンパというやつだろうか。にしては少し強引な感じである。つてか俺の現在の見た目は中学生だぞ？犯罪だ犯罪！

「残念ながら俺は暇じゃないんだ」

「へえ、俺なんて言うんだ」

「俺たちがちゃんとした言葉遣いってのを教えてやんねえとなあ」

キモイキモイキモイ。まじかよ本当にこんな人種がいるのかよ。

俺はゾワゾワと鳥肌が立ってるのを自覚しながら、目の前のチャラ男その1をにらみつける。

「急ぎの用事があるんだけど」

「なんだ？男か？」

「もつといいこと教えてやるよ」

ふーん、なるほどそつちは引く気はないと……？仕方ない通報を……あつ俺手首掴まれてるからスマホ取り出せないじゃん。

……もしかして詰んだ？

||\*||\*||\*||\*||

「くつ殺せ……！」

その人影はうなだれながら、そう言った。

「もう嫌だ。家に帰らせてくれ。もう、もうコレ以上は無理だ」

その声はか細く、震えていた。もうその人物にプライドなどというものが存在しないということが顕著に現れている。

「いいや、ダメだね」

その声の主は、無慈悲に、口角を上げてそう返した。

「四暗刻、役満だ」

コトリと音を立てて、麻雀牌が倒れる。

「嘘だあ」

クククツ、年季が違うぜ坊やどもめ。いったい俺がどれだけ麻雀にかけてきたか知らないからこんなことになるんだ。おっと現金は賭けてないから安心してくれよ？

「さてと、両方ともマイナスまで吹っ飛んだわけだが、どう落とし前をつけてくれるんだ？」

「ひっひい！」

「お助けえ！」

そういつて男二人組は、部屋から飛び出していつてしまった。逃げ足が早い奴らだ。

「ああもう、こんな時間か。ちくしょうタイムセールのがしたな」

思った以上に熱中してしまった。久しぶりの麻雀だったからな。スーパーによりつつ、今晚の献立を考える。久々に魚を食べたい気分だな。みりん干しに豚汁の組み合わせとか、食欲がそそられる。

「ああくそう、スーパーの前に移動販売車が構えるのは卑怯だろ……」

今日は唐揚げ屋さん、その香ばしい油の匂いでスーパーの入り口を行き交う客の足に鈍化のデバフをかけている。

「くっこんなのになに負けてたまるか……」

俺は鋼の意思を持って、唐揚げ屋さんをスルーして店内へと入る。やりとげた俺はその達成感で完全に忘れてしまっていた。

入り口であるということは、出口であるということに。

「嬢ちゃん、今なら鶏皮の唐揚げもオマケしちゃうけどどうだい！」

「あっそれじゃあ軟骨ともも肉を一つずつ♪」

||\*\*||\*\*||\*\*||

「ということがあったんだ」

「……どこからツツコめばいいんですか」

おいおい魔法少女。そんな問題児を諭そうとする新任教師みたいな顔しないでくれよ。それともそんなに晩飯がみりん干しから唐揚げ盛り合わせに変わったのが嫌だったのか……？

「いえ、唐揚げは別にいいんですが」

「あつそうなんだ」

「お兄さん、今自分が変身しなければただの非力な女子であることを忘れてませんか？何ですか男二人組に絡まれるだなんて」

「あつはい……ごめんなさい」

「わかればいいんです、まったくもう」

仁王立ちする魔法少女に、俺は正座させられていた。

「……？」

「ん、なんだ？」

魔法少女は足がしびれて動けない俺に突然近づいてくる。そしてしばらく鼻をすんすんと言わせたあと、珍しく嫌そうな表情を表に出した。

「お兄さん、タバコ臭いです」

「えっ……？」

そういや麻雀しに入った部屋には吸い殻があった。たぶんそこで匂いが移ったのだろう。

「自由にしているとはいえ流石にどうかと思います」

「いや待て、そのなんだ、吸ってるわけじゃないぞ？」

「……」

「なんで疑いの目をかける!? いつておくが昔も吸ってなかったぞ」

「へえ、意外ですね」

まあタバコ代を別の費用にあててたからな。オタ活とか食費とか。

「それより、先にお風呂にしませんか？その匂いのままというのもどうかと思えますし」

まあいいか、唐揚げは温め直せばいいしな。

「ほら、早く脱いでください」

「ちよつ待て、なんだよいきなり」

「本当に何もされてないか確認させてください」



「おいおい、俺を疑ってるのか？」

「お兄さんは……そういうときに限って嘘をつくので」

「なんだそりや。そんなことはないだろ」

「自覚してないならいいです。私は着替えとってきますね」

そういつて魔法少女は自分の部屋へと行ってしまった。

思ってたよりも心配させてしまったらしい。今度からはあまりこういう話は言わないようにしよう。変に心配かけても嫌だからな。

「しかし、どうしようかなあ」

俺はそつとパーカーの袖をまくる。そこには、手首を掴まれたときについた痕がまだ残っていた。風呂となると隠せやしなないし、絶対に問い詰められるよな……。

このあとめちやくちや怒られた。

## 世界観の不一致

「いや……なんかこう、忘れてたといえれば忘れてたよね」

【なにがだい？】

「そういえばこんな世界観だったなって」

小声でそうつぶやくと、ため息をついた。

俺は今、裏返った世界に今度はゲーセンでの戦利品を両手に持って立っていた。小声なのは、バケモノから逃げてる最中だからだ。

「なんか専業主夫してる気分だったから忘れてたぜ」

【まあ平和だったのはいいことだよ】

「しつかし……遅いな」

【遅いね】

いままではすぐに来ていたジャスティーンが、なぜかまだ助けに来てくれてない。一応連絡はくれたが、既読すらつかないからなにか立って込んでいるのかもしれない。

「……っ！足音だ」

息を殺しつつも、物陰からそつと顔だけ路地にだす。のっそりのっそりと、バケモノがこちらへと歩いてきていた。

「なあ神の使いさんや」

【なんだい？あまり喋らない方がいいと思うけど】

「確認したいんだが、裏の世界に来れるのって魔法少女だけだよな？」

【いや、一般人でも巻き込まれてしまうことがあるよ】

「ちくしょう……」

俺は再び路地に目を向ける。バケモノはたしかに歩いてきているのだが、さらにその間に、男二人組が這いつくばっていた。足は怪我しており、その獲物の無力化を確信しているバケモノが気色悪い笑みを浮かべている。

「モブ二人組……」

都合の悪いことに、その男二人組とは先日麻雀卓を囲んだ二人だった。なんかこう、名前も知らないふたりだけれど、一度関わりを持つてしまうとただ見逃すわけにもいかないというものである。

「なあ、どうにかならないのか？」

「バケモノをどうこうする力は僕にはないよ。もちろん君にもね」

「使えねえ野郎だな……」

まあ仕方ないか。こいつは後処理担当であって、現場は魔法少女の独壇場だ。つたく魔法少女はなに道草を食ってるんだ。

「なあ、確かバケモノにとっては俺のほうがうまそうなんだよな」

【魔法少女の特性も持ち合わせた君なら、そりや彼らにとっては美味しいだろうね】

「……仕方ねえか」

【まさか囮になるつもりかい！そんな関わりのないやつらのために？】

「ばかやろう……一度でも顔合わせた連中に目の前で死なれると、目覚めが悪くなんだよ」

俺は静かに変身し、物陰から出ていく。

「おいバケモノ！そんな腐った生肉なんかより俺のほうが美味しそうだろ！」

「ぐるるうあ」

正直いってかなり怖い。俺だってバケモノに対抗できる手段はないのだ。でもやらなきゃいけない。正義の魔法少女が来るまでの時間稼ぎしか、俺にできることはない。

「あのときの魔法少女！」

「いけない！俺らなんか気にせずに逃げろ！」

「あはは、てめえらは黙ってな。神の使い野郎、こいつらは任せませ」  
【くれぐれも死なないうでくれよ？君がいなきゃジャスティーヌが戦えなくなる】

ふよふよと浮かんでいる神の使い野郎が、なんともまあ不思議な力でモブ二人組を浮かして路地裏へとひっぱっていく。それも魔法なのかあとで教えてもらえないだろうか。移動が楽になりそうだ。

「さて、ようやく二人きりだな」

「ぐるるるる」

バケモノがファイティングポーズをとる。俺もそれにつられて拳

を構える。

静寂が二人の間に流れる。

でも、俺がとる戦法はただ一つである。

「ぐるる……ぐあ？」

ふふふ、困惑しているな。

「捕まえられるもんなら捕まえてみな！」

今日も今日とて、いつもどおり逃げ一筋である。

突然のことで困惑しているのか、バケモノは止まっている。今のうちに距離を稼げそうだと後ろを振り返り、俺は絶望する。

バケモノは手を地面につけていた。否、それは手ではない。バケモノは元から、4足歩行の生物だったようだ。

「……っ！」

よだれがダラダラと出ている口から、鋭く尖った牙が見える。

さすがの俺も、やべえと冷や汗を流した。

||\*||\*||\*||\*||

「……バケモノ？」

いつもどおり保健室で自習していた私は、覚えのある気配にさっと身構える。どうやら街にまた、バケモノが出現したようだ。

「先生、お手洗いに行ってください」

「は〜い」

私はトイレに駆け込み、そして世界を反転させた。そして学校の屋上へとすぐに上がる。

「よし、バケモノの気配が……っ？多すぎる」

普段は1つしか感じないバケモノが、今日は3体もいる。

チャットアプリの通知で私は我に帰る。通知は2件だった。

一つはいつぞやの破壊型魔法少女から。一体は引き受けるのと。そしてもう一通は……お兄さんからのSOSだった。

またかと思った私を許してほしい。あの人は巻き込まれないと気がすまないのだろうか。

「急がないと……」

テレポートの魔法を使うために意識を集中させて、そしてすぐにその場を飛び退く。

「ぐるるうう」

「こんなときにー！」

バケモノの攻撃を避けて、カウンターで一発叩き込む。威力は十分のようで、バケモノの片腕が吹き飛んだ。

「……嘘でしょ」

バケモノはニヤリと口を歪ませる。吹き飛んだはずの片腕が再生していくのを見ながら、私は唇を噛んだ。

神の使いさんから聞いたことがある。魔法少女を喰らったバケモノが、新たな能力を身につけることがあると。

「手こずりそう……お兄さん、待ってて」

無謀なことにはしないで欲しいと願いながら、私は拳を握り直した。

たぶん世界は俺の左腕に恨みがある

魔法少女に変身することで多少の恩恵は得られても、ただの一般人である俺には限界というものがある。

「はあ……はあ……さすがにタフすぎんだろ」

「ぐるるうあ」

さすがの俺も、もう30分以上走り回れば肩で息するようになる。しかも塀を乗り越えたり障害物で即席のバリケードを作ったりしているため、普通に走るよりも消耗が激しい。

「魔法少女はまだかよ」

【残念なお知らせだけどね】

「なんだよいきなり」

【ジャスティヌ、他のバケモノと戦ってしかも苦戦しているようなんだ】

「おいおい、マジかよ……」

あの正義の拳で苦戦なんて、永遠に回復するやつでも現れたのか？ピンチにピンチを重ねるな！コメディジャンルだろ！

「なあ、マジで実は秘められた力なんかあったりしない？」

【残念ながらないよ】

「つたくどうしろってんだよご都合主義の神様よお！」

再びバケモノが走り出したのを見て、俺も重い足を動かす。もう1週間分は走った気がする。なんなら一ヶ月運動しなくても良いくらいに動いた。

「そーいやあいつらは？」

【巻き込まれた彼らなら安全な場所に避難させてるよ】

「そりやなによりだ」

ふふふ、もし俺がコイツに喰われたら最期に話した人間はあいつらか。嫌だなあせめてもう少し関わり合いのあるやつがいい。肉屋のおっちゃんとかスーパーのレジのおばちゃんとかでいいからさ。

「ぐるるあー」

「あつつぶね!!!」

バケモノの鉤爪をなんとか避けて、汗を拭う。もはや運動後の汗なのか危機感による汗なのかもわからない。とにかく避けて逃げて時間を稼ぐしか、俺にできることはない。

「でも限界つてもんもあるんだよ……ちきしょう」

長く及ぶ逃走劇は、幕を閉じた。まるで先回りされたかのように誘導された袋小路で、俺ができることなどない。

「袋の中のネズミってか？ ったく俺は猫派なんだけどな」

よだれがダラダラでているバケモノは、自分の勝利を確信したようである。いただきますと言わんばかりに、大きな口を開けて飛びかかってくる。

万事休す

||\*||\*||\*||\*||

「おねがい……間に合って……！」

願いを叶える力を持つていうのに、私のこういう願いだけはいつも叶わないのだ。

「……っ！ お兄さんだめ、そっちは行き止まり！」

2つの気配が完全に静止した。バケモノと、それからお兄さんだ。

「間に合え……！」

一層足に力をいれる。もう瞬間移動する体力も空を飛ぶ力も残っていない。常人とは比べ物にならないほどの速さでも、間に合わないものはある。

「嘘でしょ……」

バケモノの気配とお兄さんの気配が、完全に重なった。

||\*||\*||\*||\*||

痛みが一定レベルを超えると熱さと認識するところかできいた。かくいう俺も今、そんな気分だ。噛みつかれた左腕が、まるで燃え上

がっているかのように自分の危機を脊髄を通して脳に警鐘を届けてくる。

「ぐつああ、日本にはなあ……良いことわざがあるんだよ」

驚愕した表情を浮かべるバケモノをみて、俺はにやりと笑う。目を見開いてくれるのでありがたい。

「窮鼠猫を噛むってなあー！」

俺は噛みつかれた、否、わざと噛みつかせた左腕を引き、その見開いたバケモノの目ん玉に尖った石を叩き込む。

「ぐぎやああああああ」

「痛いか？ふふふ、俺もいてえよ畜生め」

拾えたのはボロボロのコートくらいで、いくらその布切れで保護してもバケモノの牙の鋭さと顎の強さはやすやすと貫通してきた。そのくらいは想定内だ。というか、痛みで意識を失わなかった俺を誰か褒めてほしい。

バケモノは未だに痛みに呻いている。ふふふ、ざまあ見やがれ。

「あとは……頼んだぜ……」

さつきまでの熱さが嘘のように、今は寒い。足元からは水たまりの音がするし、目も霞んできた。

力が入らなくなった俺を、誰かが優しく抱きとめる。まったく、正義だなどこまでも。

「遅れて……ごめんなさい」

「あやまる暇があったらさつきとやっつけてこい、早く風呂に入りた  
い」

「……はい」

なんとか、間に合ったみたいだ。

||\*\*||\*\*||\*\*||\*\*||

「神の使いさん……」

【ごめんよジャステイーヌ。僕には何もできなくて】  
「いいんです。それより彼を」



【ああ、任せてくれ。彼の治療も僕の領分だ】

「お願いします」

私は抱きかかえたお兄さんをそっと地面におろす。表の世界なら失血死してもおかしくないほど、彼は血で汚れていた。

「さて、バケモノさん」

私は深呼吸をする。

今の私はどこまでも冷静だった。冷静に、正義を、自分の思い描く正義を執行する。

「お話、しましょうか」

せめて苦しませずに

それが今回の私の正義。

||\*||\*||\*||\*||

いや、死ぬかと思ったわ。ていうかほぼ死にかけてたよね、俺。

でも見てください、この左腕！まるで新品でしょう？まあ聞きかじったところによると新品という表現は間違っていないらしい。魔法少女の左腕をトレースして再生成したもので、今までの俺の左腕とは一味違う。いや、味は確かめてないけどな。

先日の結末から言えば、魔法少女が3体中の2体を殲滅して騒動は終了したらしい。

1体は俺に噛み付いてきたやつだな。あのあとワンパンで終わらせたらしいのだが、俺は気を失っていたので実際には見れなかった。

ちなみに俺のところにくる前の1体は、どうやら本当に再生型だったようで、曰く粉微塵にして土とミックスして埋めてきたらしい。これは神の使い野郎が後片付けが面倒だったと愚痴っていたので、おやつサーターアンダギーを一個おまけしておいた。

というわけであなんとか終えた一騒動は、これで終わり。いつもの日常にもどる——

——と思っていた時期が私にもありました。

【ジャスティーンヌさん。またバケモノが】

「……うん、わかった。すぐに行く」

あのあと1週間、神の使い野郎が魔法少女に敬語だったのは何故だったんだろうか。

その理由を知らぬまま、俺は膝の上の猫をなでながらお菓子に手をのばすのであった。

## 深夜のラーメンは罪だよ

ブルリと震えて、目を覚ます。最近やたら冷えてきたせいだろうか  
と体を起こしてみれば、そうではなかった。

「つたくまた夜ふかしか？」

いつも体が触れ合うほどの距離にいる魔法少女はいつのまにか抜け出している。廊下の電気はついていない。しかし、その微かに残っているぬくもりは、魔法少女が抜け出してからそれほど時間が経っていないことを表していた。

「ううっ寒い、そろそろ暖房器具も考えないとな」

エアコンをつけっぱなしで寝ると翌朝悲惨だからな。エアコンに頼るとしても、別の対処法で乾燥を防がないと喉が死滅する。

スリッパを履いて上からパーカーを羽織れば、多少は寒さがマシになった。

階段を降りれば、カチャカチャとなにかをしている音がする。以前はただぼーっとしていただけだったはずだ。何をしているのか気になってそつと扉を開ける。

「……お兄さん？」

「バレたか」

後ろに目でもついているのか？音は立てなかったはずなんだが。

「心配がしたので」

「お前は戦闘民族か何かで？あといつものように心を読むな」

「すみません顔にかいてあったので」

そろそろ俺の表情筋はポーカーフェイスを身に着けてほしいな。表情がころころ変わるのを楽しめるのは見ている側であって、自分だとさえそうでも嬉しくないんだよ。

「それで、こんな真夜中に何をしてんだ」

時刻は丑三つ時。草木も眠るとは外の静寂のことを言うんだろう。車の音すらたまにしかない。

「それが……」

「腹へったのか？」

「そうみたいです」

謎の物音の正体は、戸棚や冷蔵庫を漁る音だったようだ。晩飯は十分な量があったはずだが……これが育ち盛り食い盛り……？

「どのくらい腹が空いてる？」

「えっと……ほんのすこしです」

魔法少女はそう言いながらそつと顔をそむけた。

「なるほどなるほど。で、本音は」

「……結構」

「あいや了解」

この体になつてからは控えてたアレ、きつと食い時があるとしたら今だろう。

食卓から椅子を持ってきて、普段は開けない戸棚を開ける。

「カップ麺ですか？」

「ああ、そうだ。この時間帯に食べるカップ麺はいいぞ。まあ太るから日常化しちやいけないけどな」

深夜ラーメン。この文字列だけでよだれが出てくる。なんで深夜帯の麺類ってこんなにも魅力的なんだろうな。やはり不健康は美味しい。いままで健康(?)な生活をおくってきた魔法少女には、適度な毒だろう。

「あの……カップ麺は初めてで」

「なるほど。いい機会だ、調理を教えてやる」

「……はい」

「まずはエプロンをしようか」

俺のと色違いのエプロンを、袋からとりだす。いずれは魔法少女にも台所に通ってもらおうつもりで買って置いてよかった。

「つけました。おそろいですね」

「エプロンよし。じゃあまずやかんに水をいれよう。俺の分もあるから多めにな」

本当は電気ケトルとかあると楽なんだが、多人数暮らしの日常遣いだと多めに沸かせるやかんが便利なんだなこれが。

「いれました」

「じゃあ次は火にかけよう。おっとガスコンロの使い方は教えたほうがいいか?」

「さすがにそれくらいはできます」

3度くらいカチカチとして火がつく。こんなガス火でも見てて落ち着くのは俺だけだろうか。いや今はそれはいい、重要な話ではない。

数分待てばピーピーとやかんの笛がなる。

「よし、じゃあパッケージを開けろ」

「えつと……全部あけていいんですか?」

「いやまて、半分だ」

「わかりました」

魔法少女は几帳面にきっかり半分をはかつて開ける。料理は科学とはいうけれど薬品調合でもなんでもないんだからそこらへんはアバウトでいいよ。

「んでお湯をいれます」

「はい」

こぼさないように、そして火傷しないように気をつけながら、2つのカップ麺容器にお湯を注ぐ。

「そしたら蓋を閉じて三分待つ。箸かなんかで抑えとこう」

「すこし隙間あいてますけど」

「いいんだよそれで」

本当に何も知らねえな。てっきりカップ麺とかを常用してるのかわかと思ったが、一度も食べたことがないとはな。

「三分立ちましたよ」

「じゃあ蓋を開けます」

「はい」

俺は蓋をはがされたカップ麺の容器を、食卓に持っていく。魔法少女も戸惑いながら、自分の分も持ってくる。

「あの、お兄さん次は?」

「食べます」

「えつ?」

「完成です。食べます。以上です。コングラッチュレーション」

「お、終わりですか？」

「もちろん、これで終わりだ。あとは食べるだけだぜ」

手を合わせてから麺をすすする。くうう、冷えた体に温かい麺がしみるぜ。

「い、いただきます」

ズルズルと麺をすすする手が止まっていけないのを見るに、どうやら気に入ったらしい。いやカップ麺を気に入られてもそれはそれで心配ではあるんだがな。

「ぐちそうさん」

「ぐちそうさまでした」

どうやら満足したらしい。まあ育ち盛りとはいえカップ麺をたべりや十分だろう。

「うまいだろ、この時間のラーメンは」

「はい、想像以上に」

「ま、しばらくはさせないけどな」

「わかってます。毎晩起きてしまうのも困りますし」

そりやそうだ。せつかく最近はぐっすり寝れているようなのに、こんな空腹だなんて理由で起きてしまっていてはよくない。晩飯をもう少し考え直してみるか？でも一回の食事の量は増やせないしな……。

「まあ対処法はてきとうに考えておくよ。んじや、寝るぞ」

「洗い物は」

「いいから寝るぞ。とりあえず水につけておけばなんとかなるから」

「……はい」

せつかくカップ麺であつたまつた体を冷やすわけにもいくまい。すこし匂いが気になるけれど、早めに布団に入るに限る。

「くれぐれもいうけどこれを日常化するなよ？」

「わかってます。時々の楽しみ程度、ですよね」

「んだよ、わかってんじやねえか」

それでいいんだよ。時たまに程度の息抜きで。

「トイレいつてくるから先に行つててくれ」

「はい、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

魔法少女が寢室に向かったのを見て俺はトイレへと向かう。

【少し、いいかい？】

後ろから急に声をかけられたのは、そのときだった。

「……トイレいつてきてからでもいいか？」

【そうだね、そつちを先にしておいたほうがいいかも知れない】

どうやら長話になるらしい。俺は徹夜の覚悟を決めつつ、危機を訴えかけてくる膀胱を救いに行く戦いへと先に赴いた。

## 長話はコーヒーの後に

ドリツパーに豆をセットし、お湯が沸くのを待つ。適温のお湯こそ、美味しいコーヒーを淹れるコツだ。

円を描くようにそつとお湯を垂らし、すぐに注ぐのを止める。蒸らしの工程は香りを楽しむむ上でも重要な手順である。

お湯を入れすぎتهはいけない。そして、最後の一滴をカップに落とすしてもいけない。

そういった努力の末に、美味しいコーヒーは出来上がる。

【コーヒーはありがたいんだけど、そろそろ本題に入ってもいいかな】

【ああすまんすまん。つい力を入れてしまった】

【君の淹れるコーヒーは美味しいから力入れて欲しいけど、今は別の話があるからね】

【んで、なんだよ。その話つてのは】

【まずこの件に関しては他言無用で頼むよ。当事者のジャスティーンにもね】

【魔法少女にも……?】

なぜ俺にしか話さないんだ? 当事者つてどういうことだ? 出てくる疑問はたくさんあれど、とりあえず話に耳を傾ける。

【まずバケモノが最近、異常なほどに強くなってきているのはわかるかい?】

【そーいや話したり四足歩行したり、再生するやつもいるんだっけか】

【言語能力や歩行の仕方は特に影響はないんだ】

【問題は能力の方だな。再生能力持ちなんて強すぎるだろ】

【ああ、おそらくジャスティーンじゃなかったら危なかっただろうね】

【あの破壊系魔法少女ならどうだ?】

【無理さ。アレは事象を捻じ曲げるタイプだからね。相手との実力差が開いてないと、あの力は役に立たない。もちろん普通のバケモノなら十分対処しきれるんだけどね】

【なるほど。んでそのバケモノが強くなっている原因は?】

【ここからは僕ら……神の使いを名乗る者たちの考察なんだけど】



そういうと神の使い野郎はコーヒーに手をつける。猫舌でも安全な温度のそれを啜って言葉を続ける。

【おそらくジャスティーヌと君、そして破壊系魔法少女の存在が原因なんだ】

「どういうことだ？」

正義の魔法少女や破壊系魔法少女に加えて……俺の存在？

【パワーバランスさ。世の中は都合よくできていてね、善悪のバランスは一定なのさ】

「つてなると、魔法少女が集まりすぎたから比例的に敵も強さを増してるってことか？」

【そう。君は悪というには物足りないからね】

「そりやすみませんね」

【おつと悪気はないんだ。それに不埒な輩と魔法少女とを接触させる方が危険だ】

まあ俺が悪かと言われると、ただ欲望に素直なだけでそこまででもないとなるよな。

【安心してほしいのは、君という存在はシステム的にはちゃんと機能しているんだ】

「ずいぶんな言われようだな」

【言葉の綾だ、スルーしてくれ。そして問題は……そもそもジャスティーヌ自身にそこまで悪の要素がなかったことなんだ】

「んで、その薄いままの部分で反転している存在が俺って話だったよな」

【そう。だから君たちには善悪のグレーな部分が多いんだよ】

「まあ、そりやそうだろうな」

一人の人間を善悪のどちらか片方だけで表現するのは無理だろう。俺だって生きてる間に悪いことをしたことはあるし、善いことだってしてきた。

【もちろんジャスティーヌも一緒だった】

「だった……？」

【善くないこと。もしくは善悪の区別がつかないこと。その一部が

……彼女にとっては善いことになってきたということだよ」  
「どういうことだ」

「君という存在さ。多少悪いことでも、君と一緒になら」彼女にとっては善いことになってしまったんだ」

「それだけ懐かれていますってなると嬉しいな。だが、嬉しいって感情だけで話を終わらせちゃいけない。」

「俺は消えた方がいいのか？」

「とんでもない。しかしこのままでもダメなんだ」

「バケモノが強くなるからか？」

「それだけじゃないさ」

神の使いは深くため息をついて黙り込む。悩んでいるようだ。

「いいから言えよ。魔法少女のサポートは俺の領分だ」

「……、このままではジャスティヌが正義の魔法少女でなくなってしまう」

「そりゃー大事なわけだ」

正義の魔法少女が消えてしまえば、神とやらからしたら大きな損失だろう。バケモノは強くなり、魔法少女の戦力は弱くなる。そしてら被害も大きくなるのは明らかだ。

「でも、なんで俺に話すんだ」

「……すまないね」

「俺にできることはあんのか？」

「ないよ。君にはどうしようもないことだ。そして、僕ら神の使い側でもどうしようもないことなんだ」

「おいおい、いつものご都合主義はどうした」

「それでどうにもならないから困っているんだよ」

沈黙。緊張感なくコーヒを啜る音だけが食卓に響く。

「じゃあどうするんだよ」

「ジャスティヌが自覚するまで、放っておく……」

「でもバケモノは強くなっていつてゐるんだろ？」

「きつと、苦戦するだろうね」

「苦戦するじゃ……ねえだろ。死んだらどうするんだ」

コーヒーカップをコトリと置いて、神の使い野郎はまたもや沈黙した。

「なるほど、その時のためのこの体か」

ほぼ同じ容姿、裏世界に行ける身体。

力の側面が中の人格によって変化するのならば、この身体に魔法少女の中身が入ればきつと第二の正義のヒーローだ。

【すまない】

「謝んなよ。そもそも、その提案はお前のじゃねえだろ」

すくなくともこいつがそんなことを発案する性格には思えない。

【怒らないんだね】

「まあ、俺にとつて都合が良すぎたからな。むしろ納得がいったさ」

もしもの時のバックアップ、その日までの飯の魂って扱いなのだろう。だから俺だけにこの話をしてくれた。それが神の使い野郎の良心だろう。

「つともうこんな時間か。俺は朝と弁当の用意を始めるよ」

台所に立ってエプロンを着る。久々に弁当も凝ってみるか。ほぼ徹夜で時間もあるしな。

「ニヤーン」

「起きたのか。水を変えるから待て待て」

早く変えろと言わんばかりに水の器を持ってきた猫をあやしつつ、蛇口を捻り洗い物から始めることにした。

## 新たな気配

「おはようございます、お兄さん」

「ん、ああおはよう」

ソファで死にかけていた。今日は昼寝が捗りそうだな、すごく眠いや。

「あのあと寝なかつたんですか？」

「ああ、神の使い野郎と話し込んでしまったな」

「何を話してたんですか？」

「んー、男同士の内緒話ってところかな」

「……？」

魔法少女が首を傾げるので変なことを言ったかどつい顔が動く。

「神の使いさんは男なんでしょうか」

言われてみれば、そうだ。

たしかに人間形態は青年の見た目をしているが、果たしてオスメスのどちらかという区分ができるものなのだろうか。どちらでもない、もしくはどちらでもあるっていうのも考えられる。

「この謎を追求すべく、我々はアマゾンの奥地へと旅立った」

【待ちなよ、勝手に変なところまで行かないでくれ。安心してくれよ。

僕は生物学上で言えば男だよ】

「ちえつつまんねえな」

【お望みなら女性の姿にも慣れるけど、女所帯のほうが良かったかい？】

「……イエイマノママデオネガイシマス」

なんか気苦労が多くなりそうなので丁重に断っておいた。変なストレスをかけられてもこまるからな。

「ほら、遅れるぞ。はやく支度してこい」

「はい……」

魔法少女は少し悩んだそぶりをみせたが、すぐに顔を洗いに洗面所へと向かっていった。

まあ嘘は話していないしいいか。俺の朝ごはんの準備をしなけれ

ば。

「行つてきます」

「おう。気をつけてな」

玄関で魔法少女を見送れば、俺の時間が始まる。と言つても今日は、睡眠不足の解消から始めなきやいけないのでそれほど時間があるわけでもないけれどな。

※※※※※※

最近おかしい。とくにここ数日だ。バケモノが強くなつていたりお兄さんの様子がおかしかったりもあるけれど、一番おかしいのは私の体だ。

「桃木さん？具合でも悪いの？」

「いえ、お腹が空いてきただけです」

「あら、朝ごはんは？」

「ちゃんと食べました」

「育ちざかりだものねえ」

お兄さんにこのことを言つても、同じ言葉が返ってきた。でも自分の体は私が一番知つている。もともと最低限しか食事をしない私の胃は、むしろ少食気味で、ましてやこんな腹ペこキヤラのようにすぐにお腹が空くような体ではないはずだ。

「空腹を感じるのの良いことよ。最近の若い子はダイエットだーって絶食しちゃうケースだつてあるのよ」

「そうなんですか」

「今や大問題よ？中高の頃なんてそこまで気にしなくてもいいのにねえ。むしろちゃんと食べないと育つところも育たなくなっちゃうわ」

「……？」

「身長とか……胸とかね？」

「なるほど」

つまり空腹を感じている間は可能性があると。お兄さんも同じなのだろうか。いや、アレ以上育たないでもらいたい。別に嫉妬しているわけではないが、ずっと女として生きてきた手前、越され続けるのはなんだか気にかかる。

「でももちろん、食べすぎはダメよ。生活リズムもくずれるからね。夜食なんでもってのほかよ」

ギクリとする。昨晚の出来事を思い出した。真夜中に二人で食べたカップ麺は、とても美味しく感じた。それこそ、夜食が常態化してしまう気持ちができるほどに。

「まあこんな言ってる私もたまにはするんだけどね。やっぱり美味しいものは美味しいし」

「美味しいですよ。でも私も強く言われてるのでたまにしかしません」

「あら、お姉さんに？本当に仲が良いのね」

「ええ、まあ」

良いといえば良い方なのだろう。少なくとも嫌われてはないと思う。じゃないとここまで世話してもらえないだろう。お兄さんには与えられてばかりだ。何か返せるものがあるといいのだが、『金もらってるからな』なんて言っついても断られる。あれ、やっぱり嫌われているのだろうか。距離感がよくわからなくなってきた。

「……、お手洗いに行つてきます」

「はーい」

保健室から出て廊下の空気を吸えば、少しは落ち着いてくる。

しかし落ち着いている場合ではない。またバケモノの気配を感じたからだ。最近は頻度が高い気がする。バケモノ自体の強さもあり、油断はできない。

「変身……」

世界が裏返る。気配は遠くはない。走っていけば間に合うだろう。幸い、巻き込まれたらしき気配はない。方向を見定めてあるき始めた私は、すぐに足を止めた。

「へえ、君が正義の魔法少女か」

廊下の先、そこには私と同じ学校の制服を着た少女が立っていた。

「あなた、何者？」

気配が一切しない。まるでそこに存在しないかのように。しかし、たしかにそこにいる。視覚情報に嘘偽りがなければ、たしかに目の前にいるはずだ。

「まあまあ、今日は顔合わせのつもりだからさ。そう怖い顔しないでよね」

ヘラヘラと笑う顔は、どこかお兄さんに似ていた。

「怪しい人に口で尋ねたのが間違いでした」

私は拳を握り、構える。

「その体に直接聞くことにします」

この拳が効かなければコツチ側、そうでなければアツチ側。

「怖いねえ。ま、今日は立ち寄っただけだからさ。ここに長居しすぎても問題だし、ここらへんでお暇させてもらうとするよ」

そういうと目の前の少女はかき消えた。まるで霧が晴れたかのよう  
うに。

そしてそれと同時に感じる庄。バケモノがすぐ近くまで来ている  
ことをすぐに察知する。

「神の使いさんに報告しないと」

心どこかここにあらざる状態のまま、私は引き寄せられるかのよう  
にバケモノの方へと向かっていった。

## 帰宅

睡眠不足も解消し、ソファで寝っ転がったまま携帯ゲームをしていると扉が開く音がする。壁にかかった時計を見れば、意外と遅い時間だ。またバケモノでも出て遅くなったのかと思いつながら玄関へと向かう。

「おかえり」

「……ただいま」

「飯はいつもどおりの時間でいいか?」

「はい」

靴を脱いで上がってこようとするのを、俺は立ちふさがって止める。

「なんですか……?」

「うーん」

普段の俺は、鼻詰まりが酷くてコーヒーの香りすら楽しめないタイプの人間だ。体が変わっても、鼻が鈍感なのは変わらなかった。

でも、この不便な鼻は、都合の悪いことにこういうときばかりはよく効くのだ。

「誰だお前」

「……っ」

「俺ってばこういうときばかりは鼻が効くんだよ。んで、何が目的だ」

目の前の存在は魔法少女の姿のまま、ヘラヘラと笑う。まるで作り物のような笑いは、俺を不愉快にさせるばかりだ。

「少し下見さ。ああ、安心してほしい。今日のところは君にも、そして大事な魔法少女にも手を出すつもりはないさ」

「今日は?」

「またいざれ会うことになるからさ。そのときにどうなっているかはわからないけれど」

「なんで俺たちに敵対するような真似をする」

「うーん、それが理だからかな」



「理？ふざけるなよ」

「おお怖い怖い。でも君にどうこうする力はないだろう？今後も状況に流されるだけさ」

そのとおりだ。きつとこいつが敵対したとしても、戦うのは正義の魔法少女のほうだろう。だから謎である。どうしてこいつは俺の前に、しかも魔法少女の姿で現れた？

「おっと、長居しすぎちゃまずいんだった。それじゃあお暇させてもらうよ」

「おい待て！まだ聞きたいことが……クソ、消えちまった」

まるで魔法のように姿は消えてなくなった。イヤな匂いも、元からなかったかのようにしない。

「あれ、お兄さん。玄関で立ってどうしたんですか？」

「ん、ああおかえり」

「はい、ただいまです」

どうやら本物のおかえりのようだ。助かった、まじであのまま戦闘突入とかシヤレにならないからな。

「……どうかしましたか？」

「ん、いや。なんでもねえよ。晩ごはんはいつもより少し遅い時間にするぞ」

「はい、わかりました」

靴を脱いでそそくさと脇を通り抜けていく魔法少女の腕をとる。

ああもうまったく、何してんだ。

「その怪我、どうした」

「何のことですか……？」

俺は制服のシャツを握って下着ごと裾をめくる。

そこには、明らかに人ではない何かから殴られた痣がついた腹部があった。

「おい、なんだこれは」

「……」

「まったく、怪我すんのは元気の証拠ってもういけど、もう少し大事にし

ろや」

お前になんかあると俺も困るし、多分街の人も困るんだよ。そこらへん自覚してほしい。

「わからないんです……わからないんですが……」

魔法少女はうつむいていた顔を上げ、こちらを見つめてくる。

「私……弱くなってしまったかもです」

深刻そうにそう告げる魔法少女の顔には、不安の色が濃く出ていた。

「とりあえず処置すんど。多分今日は神の使い野郎の帰りも遅いだろうしな」

「……はい」

無理やり手を引いて食卓の椅子に座らせる。

「少し触るぞ」

「えっ……ひやうっ」

まだ患部が熱を持つてるな。とりあえず冷やしておくか。

「それで、何があったんだ」

「攻撃をくらってしまつて」

「珍しいな。んで、一発もらつたくらいで弱くなつたつて？」

「……」

「まあ、普段無傷ですんでる方がおかしかつたんだよ。今回は戒めと思つて、気を引き締めるきっかけにでもしな」

「……はい」

ああくそ、言葉のチョイスをミスつたかな。こういう人を慰めるのつて苦手なんだよちくしょう。

「変に吐き気があったり熱っぽかったりはしないよな？」

「はい、そこは大丈夫です」

「ならよかつた。つたく、あのバケモノから攻撃くらつて痣程度つても十分に強いけどな」

人間離れにも程がある。まあそれが魔法少女としての力なんだろうが。

「少し横になつておきますね」

「ああ、わかった。眠り込むなよ？晩飯の時間には降りてきてくれ」  
「はい、わかりました」

そういつて寝室へと向かっていく魔法少女を見届ける。  
しかし、バケモノの攻撃で痣か。

いや待てよ。現実世界に残る痣？たしか裏の世界で起こったことはほぼ表の世界にはフィードバックされないはずでは？それこそ、建物全体が崩壊するような規模でなければ表の世界に影響はなかったはずだ。

だというのに、実際に痣という目に見える形で現れている。一発ぶん殴られた程度かと思っていたが、そうではないかもしれない。

「つたく、しくじったな」

頭をガシガシとかきながら台所へと向かう。なんであれ、時間は過ぎる。時間が過ぎれば腹は空く。だから俺は晩飯をつくる準備にとりかかる。

「ちくしょう」

俺にできることといえばこれくらいだった。

『でも君にどうこうする力はないだろう？』

あいつの言葉が頭の中をぐるぐると回る。

「これくらいしかできねえさ。でも必要なことなんだよ」

己の無力さに嘆くことなんていくらでもできる。だから今わざわざする必要はない。今は美味しい晩飯を作ってやることぐらいしか、できない。

## 鼓動

バケモノが強くなってきているというのは薄々感づいていたから、それほど驚きではなかった。問題は、私が弱くなってきていることだ。今日の戦闘での被弾は、決して油断が原因じゃなかった。ましてや、その直前にあった謎の人物のせいにもできない。

仕留めたと思った。手応えも感じた。戦った感じだとバケモノの強さはいつもどおりだった。

なのに、私の渾身の拳を受けてなおバケモノは立ち、反撃へと転じた。攻撃のために無防備になっていた私は初撃で吹き飛び、追加の二撃目で穴が空いた。普通なら即死だろう。魔法少女というだけでも生死は怪しい。私がその後にはバケモノを倒すまで戦えたのは、あちら側の世界とこちら側の世界の狭間に自分を置いたからだ。そのせいで、こちら側に戻ってきてても消えぬ傷跡がお兄さんに見つかった。

「どうして……」

疑問を口に出しても、出てくる答えは唯一つ。お兄さんの存在だ。不具合なのか、それとも予定調和なのか。怖くて神の使いさんには聞けない。

もし、自分が魔法少女の力を失ったらどうなるのだろうか。もし一般人のような生活に戻れるというのなら、それも良いかもしれない。けれどそうなった場合、お兄さんや神の使いさんとはお別れになってしまうのだろうか。

「おーい、晩ごはんだぞ〜！」

考えていても仕方がないのかもしれない。部屋まで届く匂いを感じ、私は食卓まで急いだ。

※※※※※※※※※※

「この世の理、か」

誰もいない公園で、少女はほくそ笑む。

「まったく、嫌な役回りだよ。でも、仕方のないことなんだ」

少女が地面に手をかざせば、土の下からバケモノが出てくる。バケモノは犬のように少女の手に顔をこすりつけた。

「ほら、お食べ。君も、歯車の仲間入りさ」

そういつてバケモノに差し出したのは、未だ動き続ける心臓である。否、未だ動き続けているのではなく、動かし続けさせられているという表現が適切だ。

「自分の作ったシステムを忘れるだなんて、神様も随分と馬鹿なのか。それとも、ただ単純に昔すぎて覚えていないのか」

心臓を喰らいつくしたバケモノは、空高くへと飛び上がっていく。

「まったく、なにが『自浄作用』だ。魔法少女の手がないと成り立たない、不完全なシステムじゃないか」

愚痴を漏らす少女の目の前に、突如として別の少女が現れる。

「……何のつもり？」

「いえ、知り合いにちよつかいをかけてる人がいるって聞いたので」

「へえ、破壊特化の珍しい能力持ちか。しかも神の使いを連れていないときた」

「……っ。やはり危険ですね。あなたはここで私が——」

「いい餌が自ら来てくれて感心だよ」

一面が血飛沫で染まるのに、それほど時間はかからなかった。

||\*\*||\*\*||\*\*||

「うおっびつくりした」

魔法少女を見送った後の訪問者に、俺は思わず声を上げてしまった。いつぞやの魔法少女さんである。

「あの、お兄さん。実は……」

「……長くなりそうなら家の中でどうだ？」

「お邪魔します」

最近は嫌な予感があたりすぎており、そろそろ占い師にでもなろうかと思ってきたところである。まあ冗談だが。

「それで、どうして学校サボってまでうちん？」

「実は……先日、変な少女が訪ねてきましたよね」

「ああ、たしかに。ただ危害は加えられなかったぞ?」

「ええ。ですが、明らかに怪しかったので後をつけていたところ……」  
「どうした? 言いにくいことか」

突然言葉が詰まった彼女が心配になり、顔を覗き込む。明らかに様子がおかしい。

「触らせたほうが早いですかね」

「ん? な、なにを」

彼女はおもむろに俺の手を握ると、自分の胸に押し当てた。しかし、柔らかい反発を堪能するまもなく、背筋に冷たいものが走る。

「心臓が?」

「はい……やられちゃいました」

軽く笑う彼女の話によれば、一瞬で心臓をえぐり取られたらしい。いそいでこちら側の世界に戻り逃げることで難を逃れたものの、敵に心臓を取られたままということらしい。

「……これからどうするんだ?」

「ははっどうしましょうか。そもそも私って、死人なんでしょうか」

「まあ待て」

落ち着かせるために、俺は彼女の肩に手を置く。

「どういう原理かは俺はわからんが、まだこちら側ではちゃんとお前は生きてる。だからそんなことを考えるな」

「だって私……私……私……」

こっちの胸に顔を埋めて静かに泣く彼女は、普段とは全く違う。まあそれも当然か。あまりの出来事で俺に至っては状況がいまいち飲み込めてない。

ガチャリ

「すみませんお兄さん、忘れ物を——失礼、すぐに出ていきます」

「待て魔法少女! 絶対誤解してる!」

「お邪魔しました。あれ、私の家ですよね(ここ)」

「そうだ、だから何の問題もないぞ!」

「では同居人が女を連れ込んで泣かせていたとしても……?」

「じ、事情が事情だから問題はないぞ!だからまずは話を聞け!」

「でも遅刻しちやいますし……、わかりました」

かばんを置いた魔法少女は、俺たちの対面のソファに座りこむ。どうやら、並ならぬ事情だと察してくれたらしい。

「……もう一度話せるか?」

「はい……実は」

魔法少女は頻繁に相槌をうつっていたが、俺は二回目だというのにさっぱりだったのであった。

## だが断る

再び魔法少女を学校に見送ってから、俺はリビングで頭を抱えていた。とにかく異常事態ということだけは俺のちっぽけな頭でも理解している。しかし、対抗策なんかが出てくるわけもない。

タバコを模した菓子をかじりながら、窓越しに外を見る。まるで悩みなんでなさそうな快晴に、腹が立ちそうだ。洗濯日和であることは否定できないので、さつとシーツ類を洗濯機にかける。

「ああちくしょう、考えてても仕方ないってわかってんのになあ」

先日謎の少女が言ったとおり、俺がなにかしら直接解決できる問題ではない。だが、目の前にこうも大きく壁が立ちはだかっているのに、無視しろというほうが無理な話だ。

「はあ。まったく、謎の少女Aさんが突然尋ねてきて答えをくれたらいいのに」

「呼んだ？」

「……」

俺は一度目を閉じ、深呼吸をする。まさか白昼夢を見るほど疲れが溜まっているとは。これはTHE・何もしない日を増やす必要があるかもしれない。

「あれ？おーい？もしもーし」

せっかくだから布団も干してしまおう。数分日光に当てただけでも全然ちがうもんだ。ああもうこうなったら面倒で後回しにした手洗いの衣類もやってしまおう。忙しくなってきたぞー。

「そろそろ怒るよ？」

「……俺の見たる幻想ではない？」

「ちゃんというよ。呼ばれたからせっかくだけ出てきてあげたのに」

俺や魔法少女と瓜二つの存在が、目の前でニコニコと話しかけてくる。

「おい、お前敵側だろ。何軽く出てきちゃってんの」

「やだなー。敵じゃないよ」

「そうやって信じると思っているのか？」



「じゃあ言い直すよ。今のところ君に危害を加える気はないよ」  
「俺に？」

「もちろん魔法少女と直接対決なんてのも、もつてのほかだね」  
とにかく今はその言葉を信じることにする。まあ、もし敵対されても俺には抵抗するような能力はないがな。

「何しにきた？」

「呼んだのはそっちだよ。何を聞きたいの？」

「……お前の目的とか」

「あー、うん。まあ、システムの破壊かな」

「システム？」

「魔法少女とバケモノというシステムをね」

「そりゃ彼女らが装置だとか言いたいのか？」

「察しがいいね」

システムだと？あんな無垢な少女に託しておいてシステムだって？

「昔、神とかいうものは自分らの想定外にならないよう、発展しすぎないように、自浄機関を作り上げた。彼らは発展しすぎた人間社会から一定数間引くことで、人間たちが神を超えないようにしたんだ」

「神が？でも確か魔法少女も」

「そう、そこが問題なんだよ」

謎の少女は頭を手で抑えて、困ってますというジェスチャーをした。

「神は自分の作ったものを忘れたのか、それとも気まぐれか、その自浄機関を押さえつける装置をつくりあげた」

「その装置ってのが魔法少女ってことか？」

「そのとおり。自浄機関の制御は装置の存在によって暴走し、無差別・無期限に人を間引き始めた。そこからは勢力同士による戦争の始まりだ。終わることがない、ね」

つまりはなんだ。神つてのが悪いって話なのか？俺も、魔法少女も、神の采配とやらでその戦争に巻き込まれた装置だど？

「そんなの……ありかよ……」

「だから破壊する。そんな不完全なもの、修復するより1から、いやゼ口から作り直したほうが良い」

「それがお前の主張か」

「どう？協力してくれる？」

俺は顎をさすってしばらく考える。そして考えをまとめ、口に出す。

「お前、友達がいらないタイプだろ」

「……へっ？」

「人との付き合いを長く細く続けるのが苦手なタイプだ。友達だったという人種は多くいるのに、今も友達って言えるほどの仲の人がいないタイプだ」

「そ、そんなことない！」

「いいや、俺にはわかるね」

「……！」

「そしてお前の問への答えも、NOだ」

睨みつけてくる少女に肩をすくめてみせる。

「俺が協力すると思ったか？俺が思い通りにいかないならすべて再構築してしまえと言うような悪役に見えるか？」

「じゃあこのままで良いっていうの!？」

「俺にはわからんさ。どうせ、賛同したところで俺にできることもないだろうしな。だが、間違えたからってすべて壊しきって最初からだなんて、そんな考えには俺は賛同しない」

「でも、もうどうしようもないくらいにシステムは壊れてるんだって」

「……じゃあ一つ聞くが、お前の案だと俺はどうなるんだ？」

「……わからない。神さまがどう作ってるのかはわからないから」

「じゃあ俺じゃなく、一緒に住んでる魔法少女は？」

「……」

「ああ、そういえば。つい最近、知り合いの魔法少女が不幸になったのもあったな。あれをやったの、お前だろ？」

「どうしてわかったの？」

「最近の周りの変化と言えばお前だからだよ」

何も話さなくなってしまう少女を横目に、洗濯物を干し始める。長話でシワになっちゃ困るからな。しわくちゃな洗濯物ほど心が落ち込むものはないね。いや、火をかけすぎて焦がしたカレーも同じくらいだな。

「仕方がないの」

「なんだって？」

「誰かが犠牲にならないといけない。私はもう、覚悟を決めた。ただ、私だけじゃ足りない」

「なるほどな。お前が何を考えているのかは分かった」

「必要なことなの。だから協力して」

いままでの態度はどこへやら、目の前の少女は深く頭を下げる。

考えてみればそうだ。うちの魔法少女と同じ歳くらいであろう少女が、世界の理に立ち向かおうとしている。犠牲の算段に自分を入れてまでだ。それに至るまでの覚悟、それは年頃の娘1人が抱えきれられないようなものでないことは確かだ。

……俺の答えは決まった。

「嫌だね。協力してなんてやるもんか」

それはずるいつて

「私がまだ理性のあるうちに、理由を聞いてもいいかな？」

「そうだな。何の理由も無しに断るってのもよくねえ」

俺は洗濯物を片付けてから、もう一度少女に向き直る。

「俺はわがままでいい加減な人間だ。だから、お前がこれまでどんな物語を抱えてきたのかも、今背負おうとしているかも無視して言う」

そりやねえだろつて話だが、俺はこれでいい。これが俺だ。

「俺はな、物語のエンディングはハッピーエンドじゃねえと許せねえ性格なんだ。しかもただのハッピーエンドじゃねえ。たとえ道理がなかりうと、ご都合主義の産物だろうと、登場人物全員が大団円で終わるようなエンディングだ。バッドエンディングだとか、1方面から見たハッピーエンドとかは駄目だ。トゥルーエンドにだって、俺にはそれほど価値を感じない。だから、お前の言う『犠牲の伴うエンディング』は断じて拒否する」

「物語と現実の区別もつかないの？」

「ついてるさ。ついてるからこそ言うんだ。俺は圧倒的ハッピーエンド至上主義者だ。例え今日絶望があらうと、明日涙を流そうと、それがハッピーエンドのための布石なら俺は喜んでその試練をうけるだろうな」

「相談した人を間違えたみたい」

「いまさら気がついたのか？まったく、最近の年頃の娘は俺をなんだと思ってるんだか」

頼りがいがある大人にでも見えてんのか？今の外見はただの少女だし、中身だってまともな人間じゃねえよ。

「それじゃあ貴方にはここで消えてもらう」

「ま、そうなるだろうな。予想通りの展開で助かるよ」

「なにを」

不意について俺は、手に持った洗濯物を少女の顔に投げつける。そして出来た一瞬の隙を付き、少女を壁に押さえつける。

「な！離して！」

「どうどう。まあそう興奮すんなよ」

「ここも想定通りで良かった。きっと元魔法少女とかなんだろう。こっちの世界での力はそれほどでもないらしい。」

「さあどうする謎の少女さん。このままうちの魔法少女が帰ってくるまで取っ組み合いするか?」

「……呆れた」

「へっ?」

「この程度で勝ったつもり?」

世界が反転していく。

|| \* || \* || \* || \* ||

ちくしように、しくじったな。

簡易的に変身しながら、裏返った世界で俺はそうぼやく。

「はあ、はあ。ようやくこれで対等」

謎の少女さんは、これまた見覚えのある衣装で俺の前に立つ。

「変身後の姿まで一緒かよ」

うちの魔法少女と色違いの衣装は、どこか闇を感じさせる。

「そりゃ脳内レベルで姿を借りているんだもの」

「そんで、俺と殴り合いか?」

「えっ?魔法少女なんだから魔法使うよ」

「えっ」

「えっ?」

魔法……そんなものもあるのか。いやあるか。うちの魔法少女が拳で殴りに行くものだから感覚が麻痺してた。

「しっかし、どうすつかねえ……。俺は戦う方法知らないわけだけど」

「なんっ!で!当たらないっ!のっ!」

「いやあ、だって予備動作見えるし」

なんともまあテンプレートな魔法攻撃は、残念ながらゲームで予備動作見てからの回避を練習していた俺には丸見えの軌道だった。

「ああもう……だから自分で戦うのは嫌なんだよ」

「おいっ！何をする気だ！」

俺の声を聞かずに、謎の少女は手を前にかざす。すると床が盛り上がり、目の前にバケモノが現れる。

「敵側勢力じゃないか！」

「私にとってはかわいいペットだよ」

「見た目はそっくりなのに感性は魔法少女の方がマシだなっ！」

物理攻撃はアカン。てかバケモノの攻撃って流石の俺でも避けるの大変なんだよ。しかも狭い室内と来た。面倒ここに極まれり、だな。

「へえ、意外と粘るね」

「そりやもう何度も襲われてるからっ！なあ！」

アニメとかでみる戦闘中にしゃべる描写。あれって非現実的だな！息が乱れるわ！

「じゃあ、そろそろ終わらせようか」

謎の少女が何かをつぶやくと、バケモノの動きが急に止まった。

「やっちゃえ」

「えっ」

バケモノが大きな口を開けたと思うと、直感的に俺は横に飛び退いた。

突如として鳴り響く轟音、崩壊の音。

「おいおい、嘘だろ」

室内が、室外になりやがった。反転した後の世界とはいえ、俺が背中を向けていた壁がボロボロに崩れ去ってしまった。

「プレス攻撃はするいつて」

「戦いにずるも何もないでしょ？」

「ぐうの音もでねえな」

ちくしょう、こんなときだというのに魔法少女はまだ現れねえ。正義の味方は遅れて登場するものだったか!?まじで早く来てくれ、さもなくばお前の慕う兄さんがこの壁のように穴だらけになっちまう。

「さて、次をはやく撃って」

バケモノが口をあけ、もう一度俺を捉えた、その瞬間だった。

「お、お兄さん。さっきすごい音が——」

「おいバカ！避けるー！」

神様とやら。確かに魔法少女を呼んだが、だからといって力を失ってしまった方を呼ばなくてもいいだろ……。元破壊の魔法少女は、状況を何も理解できない様子で扉をあけてしまった。

バケモノは、すぐにブレスを発射できる状態のまま、新しい敵の方へと振り向いた。

## 神に一つ

「このくそつたれ……」

俺は一重にバケモノをにらみつける。しかしバケモノは何の感情も浮かべぬ瞳のまま、再び俺へと口を開く。

息を呑む音が聞こえた。

「避けるって……言っただろ」

涙の流れる顔を、そつと撫でる。

「%△#?.%◎&@□!」

どうやら、さっきのブレスで耳までやられちゃったらしい。

「そう喚くな。どうせ聞こえねえしな」

俺は構えたまま静止してるバケモノから、その近くに浮かぶ謎の少女へと視線を移す。

「まるで理解できねえって顔してんな。でも、お前には一生をかけても理解できないさ」

俺は残った腕で体を起こして口を開く。

「お前の負けさ、謎の少女。お前が信じる神にでも祈りな」

ああ、痛みという概念がこの世界になくて良かった。さもなくて俺はどつくにシヨック死していただろうから。

「□&○%\$■☆▽\*」

「だから今、俺耳聞こえないんだって」

瀕死の状態で俺は、目の前に立つ背中にそう返す。

どこかで戦ってきた後なのだろう。あちこちに傷が見える。そこからここまで来るのにどれほどのスピードで飛んだのか、服はボロボロだ。しかし、ただの少女であるはずの背中は随分と大きく見えた。「つたく、正義ってのはこういうのでいいんだよこういうので」

俺は、その背中にすべてを預けて目を閉じた。聞こえるのは殺戮の音。大きな獣の叫ぶ声。そして……甲高い子供の声で叫ぶ誰かだ。

そして数分もすれば、静けさがおとずれる。

「いますぐ神の使いさんを呼びますからね、待っててください」

「あれ、聞こえるようになってきたや」



「というか、よく意識を保てますね、お兄さん」

「そりやもう、見ない感じないように心がけてるからな」

この世界での怪我は現実世界に持ち越されない。そのセオリーを知ってるからこそ、下半身が吹き飛んでいても会話ができる。

「遅くなってすみません」

「なに、間に合ったから良いさ。世の中結果論だ」

もう少し遅れていたら……なんて考えたくもない。決死の思いで一度、元魔法少女ちゃんを救ったつてのに、二度目でもろとも消し飛ばされるところだった。

「というか、なーにが弱くなってるじゃ。圧倒してたじゃねえか」

「それが……私にもよくわからないんです。でもなんだか、力が自分のものになったような感覚がします」

うちの魔法少女弱体しまくってるとか聞いたから、俺めっちゃ焦ってたんだぞ。俺を守ってくれるのは魔法少女だけなんだからな。

「まあ、よくわからん覚醒イベントが起きたつてなら、それでいいや」  
「お兄さんは相変わらずですね」

「そりやもう、俺は思うがままに生きてるからな」

大穴が開いた家で、俺と魔法少女はそう笑いあった。

※※※※※※※※※※

「つてことがあったんだよ。なあ、どう思うよ」

【……】

「なあなあ、黙ってないでよくなんとか言おうぜ神の使いさんよお」  
グリグリとしてみても、何の反応もない。もしやただのぬいぐるみに成り果ててしまったのか……？

【失礼な。僕は至って真剣だよ】

【真剣ねえ。まあ治療してくれた恩くらいは返すけどよ】

【今日の晩ごはんも美味しいね。さすがだよ】

今日の献立は焼き鮭と味噌汁。心と体に沁み入るTHE和食つてやつだ。小鉢にほうれん草のおひたしも忘れていない。

「お口にあつたようで何より。それはそうとだな……」

俺は、思いに思っていたことを話す。

【神に会いたい?】

「ああ、そろそろ流石にな」

【まったく、会いたいわって言って会える存在だと思うのかい?】

「まあ、そりやそうだな。確かにそうだ」

少し考えてみればわかることだ。もともとダメもとの相談だしな。

【と僕も言いたいんだけどね。実は呼び出しがかかってるんだ】

「呼び出し?俺に?神の野郎から?」

【僕は反対だったんだけどね。でも僕には拒否権はないからね】

そういうと神の使いは箸を置き、俺の腕に手を置く。

【ちよつと痛いかもだけど、我慢してね】

「えっ?」

そう疑問の声を上げたが最後、俺の脳みそはまるで荒波に揺られているかのようにぐちゃぐちゃにかき混ぜられた。

||\*||\*||\*||\*||

「うっ……おえええ」

【大丈夫かい?】

「これが大丈夫に見えるか?なんだよ今のは」

「それが人間の限界を超えたときの感覚だよ」

「ん、誰だ?」

そう言つてえづいていた顔をあげると、そこにはいかにもな服を着た一人の女性が立っていた。しかし、理解できたのは目の前の存在が神らしき女性というところまでで、顔の造形や細かなボデイラインなど、その他全くのことは脳が拒否して理解することができなかった。

「やあ。君にとっては初めましてだね。私が神だ」

「随分とおもしろえ自己紹介だな。まあ初めまして」

挨拶だけは返しつつも、俺はここに来た目的を忘れずに頭で繰り返す。

「まあまあ。はやる気持ちもわからなくもないが、まずはお茶でも一杯どうだい？」

「あいにくとここに来たときの体調不良のせいで口にもものを入れる気にはなれないんでな」

「そうか、実に残念だ」

本当に目の前の存在が神なのか、今でも疑問である。しかし、脳みそのどこかが、ここに来てからずっと警鐘を鳴らしていた。自分がここにふさわしくない人物であると、頭の中に言葉が溢れる。

「それで、そっちの呼び出して神の使いの野郎に聞いたんだが、何用だ？」

「随分とマイペースな人間だね、君は」

「使い野郎に聞いてないのか？俺はこういう人間だって」

「まあいいさ。この際だから君の態度も赦そう」

早く目の前の超常的存在から離れて家に帰りたいと叫ぶ足を抑えながら、俺はどこからともなく用意された椅子に座る。

「さて、本題に入ろうか」

「できるかぎり簡潔に頼むぜ」

「じゃあ直接的に言おう。君の役割は終わった。おめでとう、君は自由だ」

パチパチと拍手する神の顔は、軽く笑っているようだった。

「随分と唐突じゃねえか」

「それはそう。だって私たちもこのタイミングとは思わなかったからね」

神はどうして役目が終わるかを、つらつらと説明し始めた。

つまりはこういうことらしい。

魔法少女が不安定だからこそ俺の存在が必要とされていたが、ここ最近により一層不安定に陥るばかりで廃棄する気でいた。しかし、先日突如として魔法少女は完全な安定状態へとなった。だからお役御免。そして原因不明ではあるものの安定状態になるまで支えた功績により、処分はやめて放流。

「まるで便利な道具かなにかみたいだな」

「私にとって、自らが創り出した君の存在は道具と同じさ」

「神らしいクソみたいな発言ありがとよ」

「感謝の言葉だけ受け取っておこう」

神様というものは、どうやらこれくらいの罵倒では気にも留めないらしい。随分と寛容なこと。

「じゃあ俺からも一ついいかな」

俺は椅子から立ち上がり、神の側へと歩いていく。持ってきてくれ、俺のガクガクブルブルの足よ。

「なんだい？急に近づいて」

きよとんとする神に、俺は最大限の力で拳を叩き込む。ボディなんてヤワなことは言わず、顔面に、得意の右フックを叩き込む。

「すまねえ、一つじゃなくて一発の間違いだったわ」

「君ねえ。あまりにも命知らずじゃないかい？私は神だよ」

俺の拳は、たしかに神の頬を捉えていた。しかし、神にあたった瞬間、その勢いはどこかへと消え去ってしまった。今は、ただ俺が神のほっぺをグーの拳で押してるだけだった。

「いや、どうせこんなもんだと思っただし、いいんだよこれで」

神なんて殴ったらどんな天罰があるかわかったもんじゃやない。でも、一発でいいから俺は殴りつけてやりたかった。

「まあ、君が満足したのならそれで良いけど」

「むしろ、こんな無礼をしてもお赦しになる神に感謝ってやつだ」

「久々だね。その感謝という言葉を直接向けられたのは」

「かわいそうな職業なことだ」

「君と私は似たもの同士だろうか？」

「どういうことだ？」

「どちらも、生まれながらに存在の意味が用意された者同士ってことさ」

「確かに……そうかも知れねえな」

今の俺の体は、目的のために用意されたただの器だ。

「でも、決定的に違う点がある」

「聞いてもいいかな」

「俺は、『俺』という意識は、けっして舞台のために用意された存在じゃないってことだ」

それだけ言い残すと、俺は端の方に控えていた神の使いの方へと歩み寄る。

はやく帰ろう。まだ夕食は途中なのだから。

||\*||\*||\*||\*||

「用意された存在じゃない……か」

あの人間はやはり面白い。久々に覗く人間界で、こんなにも愉しい出来事に相まみえるとは嬉しい誤算だった。

「しかもあの男。神に殴りかかるとはね」

私に攻撃をしようとする人間がいるなど、思ってもみなかった。

「しかし、どうして私は殴られたのだ？」

ダメージこそなかったものの、私は頭を悩ませていた。そして、あの男がダメージがなかったことがわかっていても満足そうな笑みを浮かべている理由など、私の頭脳をしても考えつかなかった。

「まったく、気まぐれで拾ってみれば、じつに興味深い人間だ。この人間が死ぬまで、地球を眺めてみてもいいかもしれない」

そうして私は、久しぶりに地球へと目を向けたのだった。

そこにある、壊れきった歯車で出来た自浄機関を見つけるまで、人間の感覚でもそう時間はかからなかった。

## 覚醒

「ああもう、急いでるときに限って!」

目の前のバケモノに拳を叩き込むと、壁に埋まって動かなくなる。どうやらようやく止めを刺せたようだ。

「はあ、はあ……」

特に何の能力もないバケモノ相手にも、ここまで苦戦するようになってしまった。すでに傷だらけの体を見ないようにしながら、再び空へと舞い戻る。

急がないといけない。なにせ、バケモノとは違う異様な存在が、私の家にいることを感じるのだ。もちろん、力を失ってしまった彼女と、それからお兄さんも一緒だ。

「お願い、間に合って」

前だけを見ていたからだろうか。私は横から急接近するバケモノに反応が遅れた。

「くっ……!」

致命傷は避けたものの、衝撃を殺しきれずに地面へと転がり落ちる。

「邪魔を……しないで!」

ただのバケモノが、どれほど驚異であったかを私は始めて実感した。今の私では、前までのように完封することはできない。

もし自分が魔法少女の力を失ったら……

考えるまでもない。何もできずにバケモノに喰われてしまうだろう。それほどまでに、力のない人とバケモノとは差があるのだ。

「はあ……はあ……っ!なんで……」

家の近くの存在が、さらに増えた。バケモノのものと酷似しているが、ただのバケモノとは思えないほど強大な存在感。今の弱り傷ついた私では、対峙することもためらいそうになる敵。

「と、とにかくいかないと……」

勝てるかわからない。そもそも、消耗しすぎた。逃げたい。死に行くのはゴメンだ。

それでも、私の足は前に動いてしまっていた。理性が拒んだとしても、本能的に、足は前へ前へと、だんだん早まっていくな。

涙を堪えて、痛む傷を無視して、地面を踏み、空へと飛び上がる。障害物が目の前になれば、目的地はもうすぐだ。

遠目に家を捉えた、その瞬間だった。

閃光

そして衝撃波

発生源は私の家だ。壁の一面が完全に崩れ落ち、発生源があらわになる。

バケモノ、明らかに頭部が異常発達している。口を崩れた壁の方へ向けていたことから、このバケモノのブレス攻撃によつて家が崩れたのだと理解する。

謎の少女。私と同じ容姿をした謎の少女。まるでお兄さんの好きなゲームで出てくる2Pカラーのようだ。不満げに浮かぶ彼女は、まだ遠くにいる私をすでに捉えていた。

力を失った元魔法少女。目を見開き、涙を流し、しかし目の前のバケモノに何もできずにいる。力がなければ、私達魔法少女は餌ではない。彼女も、そのことを理解して動けずにいる。

そして、お兄さん。元魔法少女に抱きつくような姿勢で倒れている。目は虚ろで、でもいつものあの軽い笑顔だけは、失っていない。ただ、下半身からすべては跡形もなく消え去っている。焦げ付いた服の様子から、それがバケモノのブレスによるものだというのは想像に難くない。

私。何も考えずに地面を蹴った私。力の差なんて関係ない。今までの消耗なんて関係ない。大事な命が途切れかけている。目の前で大事なものが失われようとしている。私なら、まだ戦える。恐怖なんて感じている暇はない。理性も本能も、関係ない。

私が、お兄さんを救う。いままで私がそうしてもらったように。

気がついたら、バケモノはピクリとも動かず倒れ伏し、謎の少女の胸ぐらを掴んで壁に押し付けている私が出た。

傷の痛みがないと思えば、元からそうであったかのように傷は存在せず、

消耗を感じないどころか、溢れてしまいそうな力が拳に宿っていた。

「ふふ、どうやら私の負け……か」

謎の少女は、観念したかのようにそう項垂れる。

「さあ、殺せよ魔法少女。私はそっち側の存在じゃないのだから」

今なら、この不思議な少女が相手でも負ける気がしない。この拳を叩き込めば、二度と口をきけないようにできる。

「……？何を考えているの」

だが、私はそつと謎の少女を下ろした。そして背中を向ける。

「どういうつもり」

「別に……ただお兄さんならこうすると思っただけです」

「敵をみすみす逃しておいて、それで済むとでも？」

「そもそも、敵って何でしょうか」

私には、目の前の少女を敵として認識することができなくなっていた。

「あなたと私、本当に敵対する意味がありますか」

「そうやって隙を見せて無事で済むと思ってるの！」

背中を向けた私に対して、背後から異様な力のこもった拳が飛んでくる。

「私は……お兄さんみたいに口が回るわけじゃないので——」

異様な力であっても、関係ない。私は振り向きがてらにその拳を手で掴む。

「いま、ここであなたを壊しきるか、逃がすかの2択しかとれないんです」

「じゃあ壊せば？」



「嫌です」

謎の少女は、キョトンとしていた。

「私、わがままなので」

掴んだ拳を離し、再び背中を向ける。もはや私は、謎の少女を驚異だと思えなくなっていた。

「お兄さん、いますぐ神の使いさんをお願いしますからね、待っていてください」

表の世界だったら致命傷でも、この世界ならば間に合う。私は神の使いさん呼びながら、未だに後ろで色々と言ってくる少女に目を向ける。

「だからあなたは私を——」

「しつこい」

「ふぎやっ」

軽く上からどついたつもりが、当たりどころが悪かったらしい、謎の少女は白目を向いて地面に崩れ落ちてしまった。まだピクピクしているので、生きてはいるだろう。

その数分後に到着した神の使いさんからお兄さんの無事を聞いた後、私は緊張の糸が切れて倒れるように意識を失ってしまった。

おやすみ

よし、BBQをしよう。

なんだ唐突だなんて？そりやもう、決まってるだろ。なんか強そーな奴撃退した祝いをしなきゃなんねえだから。

今日はもう奮発も奮発。今月の残りの食費予算を切り崩すレベルで食材を仕入れてきた。

「お、お兄さん……？こ、これって」

「ふふふ、見た目はエグみがあるが、まあ任せておけて」

この日のために、俺は肉屋の店主と仲良くなっていたと言っても過言ではない。

「肉屋のオリジナルソーセージをカリッと焼いて、んでパンにレタスと一緒に挟んで……よしっ、特製ホットドッグの完成だ」

研究を欠かさなかった俺と店主のおっちゃん、涙の結晶でもあるソーセージは、こりやもう目から涙が溢れるほどのジューシーさで俺を圧倒する。

「い、いただきます」

ちっさい口でもぐもぐとする魔法少女は、一口目ではソーセージにたどり着けずに必死にかぶりついている。口が止まらないところを見るに、お気に召したようだ。

「よし、他もどんどん焼いてくぞー！」

俺の目が黒いうちは好き嫌いなんて許さない。下拵えを済ませた肉とともに野菜も焼きまくる。

「あの……」

「なんだ？まさか好き嫌いか？」

網奉行をしている俺に元魔法少女が話しかけてくる。残念ながら、彼女の能力が戻ってくることはなかった。

「いえ、その……本当に私もここにいて良かったのかなと」

「なんだ、そんなことか」

深刻そうな顔をするもんだから、つい食えないものでもあるのかと思っただけ。アレルギーのチェックも忘れていたな。

「おい元魔法少女」

「ひゃっ、はい！」

「アレルギーとかあるか？」

「ないです！」

「ならよし」

俺はその答えを聞いて安堵しながら、元魔法少女の持つ皿に焼けたものをどんどん乗せていく。

「あ、あの……その……」

「たんと食えよ」

「ま、待っててください！」

「ん？どした？」

「い、いや何でもないです……体重オーバーしちゃいそう……」

最後の方がボソボソと喋っててよく聞こえなかったが、まあ問題ないだろ。よく食う子は好きだ、おかわりもいいぞと言っておく。

【僕も貰ってもいいかな】

「おう、もちろんよ」

そう答えると、神の使い野郎はグネグネと姿を変える。みるみるうちに成人男性の姿になった奴は、カシユつといい音を立てて銀色の缶を開けた。

「ぐっ……」

「おっと、君はダメだよ。まだ数年早い」

「わかってらあ……」

一度だけ、一度だけ試したことがある。そのあとめちやくちや魔法少女に怒られたのだが、そんなのは些細なことだ。何ともまあこの体、アルコールに対して耐性が低すぎたのだ。

俺は新しい皿を取り出して、だいたい全ての肉と野菜を取り分ける。他の奴らが自分の皿に夢中になっている中、家の門の方へと向かう。

「なに？」

「食わねえか？上手く焼けたんだ」

「慈悲のつもり？」

謎の少女がそこには座り込んでいた。少女は俺から皿をぶんどると、ガツガツと食べ始めた。

「美味いか？」

「さあね。でも地獄への土産話にはちょうどいいかも」

謎の少女は減らず口を叩きながらもモグモグ口を動かしている。

「どうやら舌までも、魔法少女と瓜二つらしい。」

「まだ地獄に行くとは決まったわけじゃないだろ？」

「それじゃあ、あなたが神さまに交渉してみれば？」

「うーん」

俺は腕を組んで考え込む。

この謎の少女はもうしばらくすれば自然に消える。そう答えてくれたのは神の使い野郎だった。奴がいうのなら、そうなのだろう。嘘をついている感じはしないし、つくメリットもない。

「所詮、私は神に仇なすために生まれてきた存在だもの」

食べ終わった皿を俺に返しながら、少女はそう言う。

「ごちそうさま」

「お粗末さまでした。ああ、飲み物を持ってきてやるから待ってろ」

「いや、いらないよ」

振り向くと、そこには既に体が透けかかっている少女がいた。魔法少女と瓜二つの容姿だからか、無性に心が痛い。いや、これは違うな。目の前の少女を救えない自分が情けないのだ。

「なに、仏さんも、一杯やるくらいは待ってくれるさ」

俺は少女の方を向かないようにして、急いで庭へと戻った。

|| \*\* || \*\* || \*\* || \*\* || \*\* ||

「とういうわけだ。どうだ？」

「うんうん、それが本当に君の望むことなのならね」

串に刺さった肉を頬張りながら、神の野郎はアウトドアチェアにもたれかかった。

「もちろんだ。だが、そんなに軽くできるものなのか？」

「私は神だからね。むしろ君には詫びたいところなんだよ。少し厄介ごとを抱えていたとはいえ、目を離している間に地球がこんなことになっていたなんてね」

神は俺との対峙のあと、すぐに魔法少女に頼り切ったシステムを撤廃した。元々、地球が混沌に包まれていた時代に作ったシステムらしい。混沌ってなんだよ歴史で習ってねえぞと言ったら、これだから人間はという目で見られた、解せぬ。

「とにかく、その詫びとして俺の提案をのんでくれないか？」

「……まあ、君が望んでいるのなら、私はそれで構わないよ」

「ああ、頼むよ」

決行は、今日の夜になった。

||\*||\*||\*||\*||

「お兄さん？」

「ん？ああどうした？」

ホットミルクを片手に少しぼーっとしていたみたいだ。気づけば、魔法少女が心配そうにこちらの顔を覗き込んできていた。

「いえ、ただなんだか、思いつめているような顔をしていたので……」

「大丈夫だ。それより、寝れそうか？」

「はい。お兄さんのおかげです。ちゃんと食べて寝る。前のように疎かにできなくなっちゃいました」

「そりや何よりつてもんよ」

人間、とりあえず寝て食ってりやなんとかなる。

「お兄さん、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

笑顔を浮かべる魔法少女を前に、俺は言葉につまり、結局それだけしか言えなかった。

おやすみ

そして、おもしろい、だ。

## エピローグ

ああクソ、あのクソ上司、絶対に許さねえ

ふつつつと湧いてくる怒りを道端の石ころにぶつけながら、俺は街頭のみが照らすオフィス街を駅に向かって歩く。

なんだかすべてにイライラしてきた。なんでこうクソみたいに家から遠いんだうちの職場は。しかもなんだ、なんでおれはこんなクソみたいな時間まで残らされたんだ。要領が悪いわけじゃないだろうに。

それもこれも、全部クソ客のせいだ、絶対に許さん。

石ころを大きく蹴り上げたところで、スマホが鳴る。

「ああもう、こんな時間に誰だよ」

スマホの画面を見て、青ざめる。

「おい、うそだ、嘘だと言ってくれ」

着信の相手ではない。着信画面のせいで上の方に追いやられた時間の方だ。

「終電……のがしたじゃねえか!」

地面に膝をつきながら、俺はこんな深夜に電話なんぞをかけてきよったクソ客に悪態をつけてやると着信をとる。

「いやあ、君、仕事の納期の話なんだがね?」

「ええ、おかげさまで残業までして終わらせたので終電のがしたところですよ」

『いやあすまないねえ。ではまた次もこの調子で頼むよ』

「……せえ」

『ん?なんだね?』

「うるせえのはどっちだオラア!アアン?なんで俺があんたの都合のために心身削って仕事しなきゃいけないんだアア!」

『ちよつと君、お、落ち着きたまえ』

「落ち着いてられっか!もう辞めてやるこんな仕事!月曜からは自分で仕事すること覚えるんだな!じゃあな!」

それだけ言い捨てるどブチつと電話を切る。ついでに俺のキャリア

ア人生もキルつと。ははっ、笑えねえ。

「いいし、俺にはニチアサがあるし」

先週は休日返上だったため録画した分が残ってる。タクシーでも捕まえてさっさと家に帰ろうしよう。こういう日はビールでも流し込みながらアニメ鑑賞するに限る。

家に帰ると、無機質なワンルームが俺を出迎えてくれる。

「つたく、こういうのでいいんだよ」

俺は作っておいた自家製チャーシューと缶ビールを取り出し、ちやぶ台にドカつと置く。カシユツという音が疲れ切った体に沁みる。

「ああ……もはやこのためだけに頑張ってるまでである」

テレビのリモコンをいじって録画を再生し始める。魔法少女が謎の化け物を相手に奮闘するよくあるアニメだ。女兒向けとは言っても、脚本の深さ、テーマの濃さ、そして制作陣の力の入れ方。たとえ俺のような大人でも楽しませてくれる。

「もし俺がこの世界にいたら、きつと悪役側だろうな」

俺みたいなダメな大人は、だいたい悪役側か、そうでなくても敵に利用される側だ。

「ま、そんな非現実なことがおきるわけないけどな」

俺はもうひとつ酒を開け、そのまま泥のように眠りについた。

※※※※※※※※※※

「つと、そういえば俺はもう無職か」

早朝に目を覚ました俺は、いそいで仕事の支度をし始めてから気がつく。もう発注も来ないだろう。暇だ。

「仕方ねえ……とりあえず軽くメシ買いに行くか」

最低限の身なりを整えて、財布とスマホだけを手にコンビニへと向かう。朝はパンか、いやでもおにぎりの気分でもある。汁物も欲しいから、インスタントの味噌汁におにぎり……これだな。



そう思いながら住宅街を歩いていると、ふと学生たちと道端ですれ違い、俺は足を止めた。

三人組だ。

そっくりな双子らしき少女たちと、それから二人と学校が違うらしく別の制服を着ている少女だ。というか双子はメツシユの色が違う以外はマジで見分けがつかねえ。ただ性格は違うらしく、金メツシユの方は静かで、銀メツシユはお喋りのようだ。まるで白と黒、光と影、善と悪。そんな印象を感じる。

3人でキャツキヤと話しながら登校する姿を拝みつつ、足を再び動かし始めた瞬間だった。

「お兄さん」

双子の片割れ、静かで落ち着いた方から声をかけられる。あれ？俺なにかやっちゃいました？さすがにお縄にはかかりたくないんですけど。

そう思いながら振り返る。

「これ、落としましたよ」

「ああ、すまん助かる」

どうやら財布がポケットから落っこちてしまっていたらしい。地面に落ちた財布を、少女は屈んで拾ってくれた。

「えつと……セイギさん？」

「いや、正義って書くけどマサヨシって読むんだよ。変な名前だろ？」

「いえ、良い名前だと思いますけど」

「そうか？まあ、どっちかっていうと悪人面って言われるけどな」

そういうと、少女はクスクスと控えめに笑った。

「良いんじゃないですか？悪人面の正義のヒーローがいても」

「まあ、別に正義のヒーローなんかしてないからいいけどな」

まったく、財布くんが渾身の開脚をしたが為に中の免許証が少女に見られたじゃないか。

「とにかく拾ってくれてありがとう」

「いえいえ」

「じゃあな」

「はい、お兄さん」

なんだか懐かしさを覚えながら、俺はコンビニへと向き直る。

「そういえば神の使いさんが、またお兄さんの唐揚げが食べたいって  
言っていましたよ」

「……神の使いさん？誰だそれ」

「いずれ分かりますよ、それじゃあ」

そんな謎の言葉を残したまま、少女は駆け足で2人の元へと駆けて  
行く。

「でも、なんだか聞き覚えがある気がするんだよなあ」

最近みたアニメでそんなのがいた気もするし、そうじゃないどこか  
で聞いた気もする。

頭にモヤモヤを抱えながら、俺はコンビニの扉を開いた。

その数分後、俺はなににも買わずにコンビニを出て、近くのスーパー  
へ向かっていた。